そげもの芸者

奥方様（おくがたさま）は仕事人



六道 慧

文庫書下ろし 長編時代小説

光文社文庫

光文社文庫

文庫書下ろし／長編時代小説

そげもの芸者

奥方様は仕事人

六道慧（りくどうけい）



光文社

光文社文庫

文庫書下ろし／長編時代小説

そげもの芸者
奥方様は仕事人

六道慧（りくどうけい）



光文社

この作品は光文社文庫のために書下ろされました。

目次

第一章　花催い　9
第二章　御免勧化　64
第三章　土竜　116
第四章　さくら　168
第五章　木賊の丈吉　219
第六章　叫び　272
第七章　艶やかな刺客　328
あとがき　394

『奥方様は仕事人』シリーズ主な登場人物

野村留以　のむらるい
二十一歳。定町廻り同心である野村平左衛門の妻。幼いころ両親を夜盗に殺される。小野派一刀流の使い手で「剣術小町」との評判も。

野村平左衛門　のむらへいざえもん
二十六歳。盆暗同心、与太郎同心と揶揄されていたが、留以と所帯を持ってからは、鴛鴦同心と呼ばれ見直されている。

野村希与、環紀　のむらきよ、たまき
平左衛門の母と姉。留以にとっての姑、小姑。

近藤時之助　こんどうときのすけ
留以の義父。天城小十郎と同役だった。両親を亡くした三姉妹を引き取る。

近藤織江　こんどうおりえ
留以の姉。時之助の配下、左兵太（さへいた）を婿に迎え一児をもうけている。

山崎朋江　やまさきともえ
留以の妹。薬種問屋（やくしゅどいや）の山崎屋に嫁ぐ。

おのぶ、弥太郎　おのぶ、やたろう
四年前、近藤家のころから留以に仕える下女下男。

本庄美之助　ほんじょうよしのすけ
頭脳明晰、容姿端麗の同心。平左衛門とは同役同期。幼なじみでもある。

本庄沙苗　ほんじょうさなえ
二十歳。美之助の妻。

八木沢兵庫　やぎさわひょうご
平左衛門、美之助の上司。六尺を超える大男。冨田（とだ）流免許皆伝の腕前。

そげもの芸者

奥方様は仕事人

第一章　花催い

一

その男は、桜の下に立っていた。

弘化四年（一八四七）二月末。

場所は両国橋西詰近くの薬研堀である。広小路の南に位置する小さな堀は、静寂と闇に覆われていた。堀の南側に一本だけある枝垂れ桜が、花催いの風を受け、枝をゆらゆらと揺らしている。

枝垂れ桜の蕾はまだ固く、花が開くのは今少し先のように思えた。

「留以殿」

男――中川周平の呼びかけに、野村留以は答えた。

「周平様、いえ、中川様」
しばし無言で凝視め合う。
周平は留以より五歳上の二十六。色が浅黒く、目尻が切れあがった精悍な顔つきは、三年前に別れたときのままだった。何度も水をくぐらせているのだろう、着物と袴は、多少色褪せていたが、留以はむしろ好感を持った。贅沢に慣れ親しんでいる与力よりはずっといい。
「お久しゅうございます。中川様におかれましては、ご息災でなによりでございます。剣術の腕をみがくため、武者修行の旅に出られたという話だけは伺うておりましたが……いつ江戸に戻られたのですか」
心からの言葉と、問いかけが出た。
「三日前でござる」
周平は眩しげに目を細める。
「留以殿もお変わりなくなにより、と言いたいところでござるが、以前よりも美しゅうなられた。それこそが幸せの証でござろうな。して、かような場所においでになられた理由は？」
「〈四つ目屋〉でございます」

供をして来たおのぶが、後ろから口を挟んだ。
「有名な例のお薬を……」
「おのぶ」
留以は慌てて制した。我知らず頬が染まっていた。周平とは昔馴染みであるため、おのぶは、つい出てしまったのかもしれない。あるいはかつて留以と恋仲だった男に、今の様子を伝えようとしたのか。いずれにしても、よけいな口出しは無用だった。
「桜を見に参りました。義母上様が花見をしたいと仰せなのです。大川端はそろそろ見頃ではないかと存じまして」
懸命に取り繕ったが、周平は、特に気にした様子は見せなかった。
「さよう。上野はあと三、四日。大川端も同じ頃ではないかと存ずる。飛鳥山には足を運ぶ暇がござりませなんだゆえ、ちとわかりかねまするが」
少しでも役に立てばという感じだった。中川家は、留以の実家、近藤家と同じ御役目を賜る十人目付の一家。周平は部屋住みの三男坊ではあるものの、直心影流の印可を受けた剣の腕前を買われて、跡目を継いだ兄の配下を務めている、はずだ。

「中川様は、なにゆえ、ここにおいでになられたのですか」

問いかけには、複雑な想いをこめていた。幼なじみの二人は、桜が盛りとなるこの時期、それぞれ親から言いつかって、薬を買い求めに来た憶えがある。長じて、どちらからともなく薬研堀の枝垂れ桜を、待ち合わせ場所に決めたようなところがあった。懐かしさを覚えるとともに、「なぜ?」と素朴な疑問が湧いていた。

「花催いの風に誘われ申した」

周平は言った。

「母に頼まれて、よう祖母の薬を買いに来たのを、思い出しておりました次第。留以殿もそうでござったな」

やはり、同じことを考えていたようである。

「はい」

我知らず口もとがほころんだ。甦った思い出は、同時に甘酸っぱさとほろ苦さを運んでくる。

「あの、中川様は今も」

留以の問いかけを、

「跡目を継いだ兄上の、配下を務めておりまする」

周平は素早く継いだ。
「さようでございますか」
さらに問いかけようとしたが、流石に躊躇いを覚えた。それを察したに違いない。
「それがしは、いまだ独り身でござる」
周平は応えて、続けた。
「我が家も他家に劣らず台所は火の車。三男坊が所帯を持つなど、夢のまた夢でござるよ。兄に家督を譲ってもなお、父は、中川家の主でございますからな」
唇に苦い笑みが滲んだ。それこそが、留以と別れざるをえなかった理由なのだと告げていた。
「近藤家、いえ、わたくしの生家の天城家は、色々と問題のあった家でございますゆえ、中川様はそれをご案じなされたのではないかと存じます」
遠慮がちに述べた。と同時に、十一年前の騒動を思い出している。
十一年前の十二月七日。
深更、天城家に押し入った盗人は、まず留以の父を殺害。その後で母を陵辱した挙げ句、喉を掻っ切って絶命させた。生き残ったのは留以ひとり、母によって隠し部屋に押しこまれたのが運命を分ける結果になっていた。

隠し部屋の覗き穴から見えたのは、頭と思しき男の背中に彫られた虎の刺青だった。未明に異変を察して駆けつけた育ての親――近藤時之助によって、留以は隠し部屋から助けられている。賊が『もがりの猛蔵』の異名を持つ盗賊だと知ったのは、裏の仕事を始めた頃だった。

「盗人に押し入られた挙げ句、殺められるとは、なさけない限りよ」

という噂が、幕府内に広まったのは言うまでもない。

「むしろ死んでよかったのではないか」

「さよう、侍として恥辱にまみれるよりはな」

「生き恥を曝すよりはましだったやもしれぬわ」

などなど、生き残った留以たち三姉妹は、針の筵の暮らしだった。子のなかった近藤夫婦が引き取ってくれなければ、今頃、どうなっていたことか。

「馬鹿なことを」

否定した周平の声は、消え入りそうなほど小さかった。真情を吐露したような感じだったが、今度は留以の方が気づかぬふりをする。

「それが真実でございます」

きっぱりと告げた。周平の父が、留以との祝言を反対した裏には、昔の騒動が

隠れている。周平も口にはしないだけで、同じことを考えているに違いなかった。
「その物言い、変わっておられぬな」
笑って、訊いた。
「剣術の稽古は、今も続けておられるのか」
「はい。昔のようにはいきませぬが、月に二度ほど、道場へは通うております。義父上の家に参りました折にも、稽古をつけてもろうております」
「剣術小町はご健在か。ご亭主はうかうかしておられぬな。いつ何時、えいやっと竹刀が振り降ろされるやもしれぬゆえ」
「留以様。そろそろ戻りませんと」
おのぶの遠慮がちな申し出を受ける。
「そうですね。では……」
「だ、だれかっ」
突如、叫び声があがった。
「お助けください！」
両国橋の方からだった。留以はおのぶが抱えていた小太刀を取るや、走り出している。

「留以殿はそこにおられよ」

追いぬきざま、周平が告げた。しかし、素直に聞けるはずもない。留以は走りながら、小太刀を鞘袋から出した。袋を帯に挟み、左手で小太刀を握りしめる。見据えた両国橋の上では、すでに斬り合いらしき刃鳴りがひびいていた。

橋の欄干を背にして、何人かが固まっている。それを襲撃者らしき七、八人が包囲していた。橋の真ん中あたりには、武家用の駕籠が停まっている。月末であるため月明かりはひどく頼りなかったが、夜目の利く留以は不自由を覚えなかった。

「中川様」

留以は思わず呼びかけている。遣い手の若者は、真っ直ぐ賊らしき群に躍りかかった。もとより周平は目付の配下として動く身、真剣の斬り合いには慣れているだろう。

「おやめください、留以様」

おのぶの制止を背に、留以は小太刀を抜いた。賊と思しき者たちは、みな頭巾を被っている。おのぶの声を耳にしたのかもしれない。振り向いたひとりに、留以は真っ向斬りを浴びせかけた。

「くっ」

間一髪、相手はさがって間合いを取る。敏捷だった。動きからして、相当な遣い手だと判断する。逆に相手の男は女だと思い、たやすく始末できると考えたのかもしれない。橋の片側に固まっている一群から、そろそろと離れ始めた。誘っているのはわかったが、逃げる気持ちはなかった。

留以は男の一挙手一投足に集中する。相手は剣先を右にさげ、身体で隠すようにしていた。一気に懐へ飛びこめば、剣先が撥ねあがるは必至。留以は青眼に構えたまま、少しずつ間合いを詰めて行った。

（来る）

気配を読んだ瞬間、男は右から逆袈裟斬りを放った。留以はいち早く左にかわしながら、攻撃に転じる。すかさず踏みこんでいた。

見据えているのは男の心ノ臓。小太刀が吸いこまれるように胸に食いこんだ。ずぶり、と、確かな手応えが伝わる。

「ぐ……」

男はのけぞり、その場に崩れ落ちた。留以は素早くさがる。飛び散った鮮血を避けつつ、背後に迫った男の刀を撥ねあげた。卑怯にもひとりが、後ろから斬りつけようとしていたのである。がらあきになった男の胸もとに、ふたたび小太刀を突

き出した。

二度目の斬撃も見事に相手の急所をとらえていた。心ノ臓をつらぬかれて、二人目が橋の上に沈む。留以は次の敵を探したが、すでに残りの賊は消えていた。

斃れていたのは、全部で五人。

「留以殿、ご無事か」

駆け寄って来た周平に頷き返した。

「中川様こそ、お怪我は？」

「大事ない」

「殿、お気を確かに」

橋の片側に固まった者たちが、大声をあげている。

「医者を頼む」

「わ、わたしが参ります」

最後に受けた声に憶えがあった。先刻、助けを求めた男だった。挟箱などを持つ下僕かもしれない。蒼白な横顔が、夜目にも見て取れる。

「おのぶ」

留以が呼びかけると、おのぶが小さく頷いた。男に同道して、医者を呼びに走る。

留以は懐から手拭いを出した。
「これを」
周平に渡して、屈みこむ。倒れている男は、もはや虫の息という感じに見えた。胸から腹にかけて、くろぐろと濡れそぼっている。駕籠の造りや供の数からして、上級旗本か大名家の上級家臣ではないだろうか。
「殿、お気を確かに……殿!?」
抱きかかえていた男が、悲痛な叫びをあげる。
花催いの風は、いつの間にか、血腥い風に変わっていた。

二

「過日の騒ぎだが」
留以の夫――野村平左衛門が重い口を開いたのは、二日後の早朝だった。留以は支度を手伝っている。
「亡くなられた御旗本のご姓名は、黒崎半九郎様であることがわかった。ご公儀の評定所に、ご奉公なされていたお方のようじゃ。わしは今ひとつ話がわからなん

だのだがな。なんでも寺社奉行の」

そこで言葉に詰まった。中川周平と同い年の二十六だが、打てばひびくような周平と違い、総じておっとりとしていた。

南町奉行所の同役からは、人の好さだけが取り柄の与太郎同心、無能という実に立派な能力を持っている男、女房自慢しかできない男、起きているのか寝ているのかわからぬ盆暗同心などなど、陰口を囁かれるのは日常茶飯事。

「寺社奉行の本多中務大輔忠民様でございますか」

留以の助け船に、「さよう」と応えた。

「黒崎様は本多様のもとに出向なされていた由。確か」

と、またもや言葉に詰まって、遠い目をした。

「吟味物調役ではないかと存じます」

ふたたび補足してから、刀と十手を渡した。

「ご公儀の評定所より一名が、寺社奉行様のお手伝い役として、遣わされる由。さようでございましたか。襲われたのは、評定所の御役人だったのでございますね」

「うむ。黒崎様を含めると、死んだのは六人。ひとりは、黒崎様の家臣だったとか。留以たちの加勢がなければ、全員、危なかったやもしれぬ」

刀を差し、十手を腰に挟んで、平左衛門は留以を見おろした。
「そなたが食べられるようになり、安堵した。食べることは生きることだからの。桜飯がよかったのやもしれぬ。此度はなかなか食が進まなんだゆえ、気が気ではなかったが」
ほっとした気持ちが、表情に浮かびあがっている。留以は裏の仕事を終えた後、三、四日、なにも食べられなくなるのが常だった。そう、まさに仕事をしたのが五日前のこと。以来、ある憂悶にとらえられてしまい、いつも以上の苦悩に襲われたのだが、昨日、桜飯を口にして、なんとか己を取り戻していた。
「申し訳ありませぬ」
「気にするでない。わしの方こそ、『すまぬ』と思うているのじゃ。色々と気遣いせねばならぬ家ゆえ、な」
最後の部分は囁き声になっていた。
「わたくしは、旦那様と平らかに暮らせるだけで充分でございます」
夫を見あげた留以は、物言いたげな雰囲気をとらえた。じっと見おろすその目に、言おうか言うまいかという逡巡が表れている。
「いかがなされましたか」

「いや、それを訊きたいのは、わしの方じゃ。膳は摂れるようになったが、そなたの表情は今ひとつ晴れぬ。なにか心配事があるのではないかと思うてな」

心から案じている様子だった。上役や同役からは、悪し様に言われたり、侮蔑まじりの言動を取られたりするが、噂されるほど夫は鈍くないと、留以だけは信じていた。

「旦那様」

ふわりと胸があたたかくなる。一瞬、なにもかも話してしまいたい衝動に駆られた。が、真実を告げるわけにはいかない。

「お気遣い、ありがとうございます」

留以の言葉に、

「平左殿。遅れますよ」

義姉の環紀の呼び声が重なった。気遣いせねばならぬ相手のひとりであるのは言うまでもない。留以と平左衛門は、どちらからともなく苦笑する。

「では参る」

「はい」

夫に従い、玄関まで見送りに出た。すでに小者の辰蔵が玄関先に控えている。火

打ち石を打ち、留以は深々と頭をさげた。

「お気をつけて」

背中に刺すような視線を感じている。人の口に戸は立てられないというやつだろうか。『花催いの逢瀬』をだれかに見られてしまったらしく、八丁堀界隈には、すわ不義密通かという噂が早くも広まっていた。平左衛門は表面上、平静を装っていたが、心の裡まではわからない。

立ちあがろうとしたとき、

「留以殿」

姑の希与に目顔で呼ばれた。むろん小姑の環紀も一緒である。年はそれぞれ五十一と三十一。環紀は出戻りで、子が授からなかったことを理由に、婚家を追い出されていた。

（ああ、また食べられなくなりそう）

うんざりしつつも、居間に足を運んだ。気配を察したのだろう、おのぶが台所に続く廊下に立ち、不安げな目を向けている。

（大丈夫です）

頷き返して、留以は居間に入る。

「さて」

希与がさっそく口火を切った。

「困ったものよ。嫁して二年目を迎えたというに、我が家の嫁女は自覚が足りぬと見ゆる。かつての許嫁と逢瀬を楽しむとは言語道断。今、ここで離縁状を渡されても、文句は言えませぬぞ」

眉間の皺が、いちだんと深みを増していた。えらの張った顔は、将棋の駒のよう。そっくりの顔立ちをした環紀が、横で何度も頷いている。

「母上の仰るとおりです。時刻は夜、しかも人気のない薬研堀近くで、いったい、なにをしていたのやら。まあ、訊くまでもないことかもしれませんけれど」

鬼の首を獲ったような顔をしていた。母娘は嫁女をいびるのが、もはや生き甲斐となっている。だからこそ、留以は一昨日、戻ったときに、ちゃんと話をしたのだが……。

「お言葉ではございますが、中川様とお目にかかりましたことは、あの夜、お話しいたしました。義母上様と義姉上様はもちろんのこと、旦那様にもお知らせいたしております。おのぶも同道しておりましたので、確かめていただきたく存じます」

「信用できませんよ」

環紀が断じた。

「おのぶと弥太郎は、留以殿のご実家から付いて来た者たち。女主のためならば、いかような偽りも告げましょう。逢瀬を楽しむ間、茶店で待っていたのかもしれませんからね。鵜呑みにはできません」

ちらりと冷ややかな目を投げる。すぼめられた目に、陰湿な光が宿っていた。半年は同じ話を繰り返されるに違いない。

「申し訳ありません」

留以は、一昨日の夜と同じ謝罪を口にした。

「野村家に嫁した者として、いささか配慮が足りませんでした。繰り返しになりますが、この間も申しましたように、中川様とは偶然、出会うただけでございます」

「なぜ、薬研堀などに行ったのじゃ」

希与の問いかけには、答えられない。

「それは」

「そら、言えぬではないか。なにもなければ答えられるはず。一昨日の夜は敢えて訊かなんだがの。わたしと環紀は、おかしいと思うていたのじゃ」

「まことに。それとなく向かいの本庄様に伺うてみたところ、あらかじめ逢瀬の

段取りを整えていたに違いないという噂が、すでに広がっているとか」
「やはり、とな、思うた次第じゃ」
「正直に仰いませ。偽りを口にするのは、侍の妻として恥ずべき行いですよ」
「さよう」
「さあ、留以殿。正直が一番です」
さあさあさあ、と、環紀に詰め寄られる。正直に言えば言ったで、呆れられるは必定。留以はなかなか決心がつかない。
「薬研堀に参りましたのは」
消えた語尾を、だれかが廊下で受けた。
「〈四つ目屋〉でございます」
おのぶが勢いよく障子を開ける。
「旦那様に精をつけていただきたくて、わたしがお勧めいたしました。お子を授かるためでございます。あの夜はその薬を〈四つ目屋〉へ買いに参りました。桜の様子を見に参りましょうと言って、留以様をお誘いしたのです」
深々と頭をさげた。畳の縁に額をすりつけんばかりだったが、
「……」

姑と小姑は、凍りつくような沈黙を返した。〈四つ目屋〉は強壮剤や淫具を扱っている見世であり、屋号を聞いただけで頬を染める女子も少なくない。ましてや意図あって訪れたとなれば、さらに噂が広まるは必定。さて、どうしたものかと、母娘が困惑しているのが見て取れた。

留以はかあっと耳まで熱くなる。赤く染まったであろうことは、鏡を見るまでもなくわかった。

三人三様の沈黙の後、

「呆れたものよ」

「開いた口が塞がりません」

姑と小姑が、ほとんど同時に口を開いた。

「これではまだ不義の噂の方が、ましかもしれませんな」

「はい、母上。平左殿には話せませんね」

「もうよい」

行け、と、希与に手で追い払われる。

「あの」

留以もすぐに立ち去りたかったが、明日は三月三日。雛祭りである。

「明日はいかがいたしましょうか。義母上様や義姉上様も、近藤の家に招かれております。断った方が……」

念のための問いかけを、

「参る」

希与が素早く遮った。

「そうですとも。近藤様は公儀の御目付役ではありませんか。お断りすれば、角がたつかもしれません。無理をしてでも、お伺いしなければなりませんよ。ねえ、母上」

「うむ」

希与はしかつめらしい顔を造っていたが、口もとには隠しきれない喜びが浮かびあがっている。仕出し料理屋の豪華な膳や、帰りに渡される土産物が、楽しみでならないのだろう。贅沢とは無縁の野村家にとって、近藤家の雛祭りは貴重な催しであるに違いなかった。

「畏まりました。それでは近藤家に使いをやります」

辞儀をして立ちあがった留以に、おのぶも倣い、主従は台所に足を向けた。

「ふう」

吐息をつきながら、留以は板の間に座る。
「すみません、留以様。差し出口でございました」
おのぶの謝罪に首を振った。
「なにはともあれ、苦行から解き放たれたのは、そなたのお陰です。今宵、旦那様にも薬研堀に行った理由を、きちんとお話しいたしましょう。義母上様や義姉上様から知らされる前に、わたしの口からお伝えした方がよいと思います」
「朝餉はいかがなされますか」
おのぶに言われて、まだ食べていなかったのを思い出した。野村家の嫁女は、平左衛門と希与母娘が膳を終えた後でなければ、食べられない決まりになっている。
「軽くいただきましょうか」
冴えない表情を読み取ったのか、
「まだ……気にしておられるのですか」
おのぶが訊いた。此度の騒動ではない。
五日前の夜に行った仕事のことを指していた。

三

野村留以の表の顔は、南町奉行所の定町廻り同心の妻。しかし、裏の顔は密かに『犬』と呼ばれる標的を始末する仕事人。

元締を務める源内は、鎌倉河岸で諸色問屋〈なにわや〉を営んでいる。仲間は他にも何人かいるが、留以と一緒に動くのは、浪人の岡田文士郎と、吉原で針妙を務めるお真佐の二人だった。

（あの夜）

留以は考えずにいられない。源内に言われた相手を、仕留めたのは深更の本所だった。武家屋敷が立ち並ぶ一角は、昼間でも人通りの少ない場所。屋敷に戻ろうとした男を仕留めたとき、

（だれかの視線を感じた）

はっとして背後の闇を振り返ったが、人影はふっと見えなくなった。反対の道にいたおのぶと弥太郎は、気づかなかったと答えている。

「気のせいでございますよ」

膳を運んで来たおのぶに、浮かぬ顔を向けた。
「そうであればよいのですが」
「うちの亭主は、年の割に目がよいのです。なれど、人影は見なかったと言っておりました。そうですね」
勝手口にいた弥太郎に呼びかける。
「はい」
無口な下男は、すぐに仕事に戻った。行徳あたりの百姓が売りに来たのだろう、届いたばかりの新鮮な野菜を運び入れる。掘りたての筍や山蕗、独活、分葱といったみずみずしい野菜が、春爛漫の彩りを見せていた。希与は膳の金子も吝嗇るため、代金は留以が支払っている。
「なれど」
留以の心は晴れない。確かに人の気配が在った。一瞬ではあるが人影を見た。月も星もない闇夜だったため、相手も留以の顔までは、はっきり見ていないだろうが……恐怖に近い不安が消えなかった。
「すぐに離れましたから、大丈夫でございますよ。それに鼻をつままれてもわからないほどの闇夜だったではありませんか」

「そう、そうですね」

無理に己を得心させた。それでも湧かない食欲をごまかすため、飯に味噌汁をかけて、流しこむ。

「行儀の悪い食べ方でございますね。ご実家のお父上様が見たら、苦笑いなさいますよ。いえ、叱りつけられるかもしれません」

おのぶの注意は聞こえないふりをする。野村家において留以は、女中のごとく使われるのが常。食べないと身体が保たなかった。

「裏庭の掃除は、わたしがいたします」

膳を片付けがてら、台所の土間に降りる。憂悶を察したに違いない。

「元締のところに参りますか」

おのぶが訊いた。

「今は下手に動かない方が、いいかもしれません。なんとなく、いやな感じがするのです。だれかに見張られているような気配が消えなくて」

「留以様」

おのぶもまた不安げな顔になる。

「やはり、向いていないのではないですか。早めにお辞めになるのが、宜しいので

はないでしょうか」

　留以を案じるがゆえの訴えも聞こえないふりをした。両親の仇を討つためには、裏社会との繋がりが欠かせない。父母の凄惨な死に様が甦る度、『もがりの猛蔵』への怒りと憎悪が燃えあがる。

（許せない）

　竹箒を握りしめる手に力がこもった。それを鎮めるように、裏庭を掃き清める。そろそろ花便りが聞かれるものの、吹きつける風はまだ冷たかった。向かいの本庄家の裏木戸が開いたのに気づき、慌てて台所に戻ろうとしたが、

「留以様」

　いち早く背中に声がかかる。本庄家の嫁女、沙苗がにんまり笑って、会釈した。無視するわけにもいかず、留以も仕方なく会釈を返した。

「申し訳ありません、留以様」

　断りもなく、沙苗は木戸から入って来る。年は二十で美人の部類に入るだろう。いちおう竹箒を持っていたが、掃除のために家から出て来たのではあるまい。留以が出て来るのを待ちかねていたような感じだった。

「訊ねられるまま、夫から聞いた話を、環紀様にお話ししてしまいました。留以様

が不義など働くわけがないと、わたくしは言うたのです。なれど、環紀様のお耳に届きましたかどうか」

さも案じるような顔をしているが、油断できない。頷くだけでも、すべて留以の言葉として広まるのだった。広めているのは眼前の女子に違いないのだが、証をたてるのがむずかしい以上、うまく付き合うしかなかった。

「義母上様も義姉上様も、信じてくださっております。それよりも、沙苗様。民子様のご容態は、いかがでございますか」

留以は急いで話を変えた。いささか露骨すぎたかもしれないが、妖怪もどきの嫁女が相手では、四の五の言っていられない。本庄民子は実の母のように、留以に目をかけてくれているのだが、労咳を患っているため、希与たちに見舞いを禁じられていた。隙を見ては訪れるのだが、ここ数日、それもできない日が続いている。

「暖かくなってきたからでしょうか。それに先日、留以様にご紹介いただいた〈山崎屋〉の人参が、身体に合うようなのです。お陰さまで近頃は、だいぶ顔色がよくなって参りました」

日本橋通一丁目の薬種問屋〈山崎屋〉は、留以の妹、朋江の嫁ぎ先だった。留以の口利きということで、本庄家には良質の人参を、かなり安く用立てていると聞

いていた。
「そうですか」
ほっと気をぬいたとき、
「見ましたよ」
沙苗が耳もとに囁いた。
「え？」
留以はどきりとする。まさか、仕事をしたあの夜、あそこに立っていた人影は、沙苗だったのだろうか。もし、そうだとすれば、もう終わりだ。留以が仕事人だという話は、江戸中に広まる。じきに町奉行所の役人が来るだろう。もしかすると、捕らえに来るのは夫かもしれない。平左衛門に縄を打たれて、哀れ、留以は番屋に引き立てられる……。
冷や汗が滲み、胸の鼓動が速くなった。
「なんの話でしょうか」
掠れた声で問いかけた。口の中が一瞬のうちに乾いていた。
「留以様の、許嫁です」
「は？」

つい目を合わせていた。にんまりと沙苗がほくそえむ。目尻と口の端が、きゅっと吊りあがっている。女狐が笑ったように見えた。

「中川周平様ですよ。日本橋の十軒店で、たまたまお見かけしたのです。人形市においでになられたのか、ついでに眺めてみようと思われたのか。よくわかりませんが、雛人形をご覧になっておられました」

なぜ、周平の顔を知っているのか。などという疑問を発したが最後、よけい話がややこしくなるのは間違いない。たまたまというのも信じられないことだが、これまた追及するのは避けた。

「中川様のお父上は、御目付役を賜っております。亡き父や近藤の義父と同じ御役目でございますゆえ、家も近く、幼なじみでございました。それだけのことです」

注意深く言葉を選んでいる。仕事の場面を見られたわけではないようだが、気はぬけなかった。あたりさわりのない話で終わらせるのが得策と、勝手口に出て来たおのぶに、目顔で合図を送る。

「留以様」

察しのいい下女が声をあげた。

「すぐに参ります」

留以は答えて、沙苗に告げる。
「それでは、沙苗様。近いうちにまた民子様の、お見舞いに伺います。くれぐれもよしなにお伝えください」
「はい」
別れようとした瞬間、不意に腕を摑まれた。
「わたくしは、留以様の味方でございます。なにかありましたときには、遠慮なくご相談くださいませ」
どんな幽霊話よりも恐ろしい誘いだった。間違って相談しようものなら、留以の明日は暗闇に包まれるだろう。二度と今の暮らしに戻れなくなるのは確かだった。
「ありがとうございます」
それでも懸命に笑みを押しあげる。引き攣りそうになる口もとを意識してゆるめた。辞儀をした沙苗に、辞儀を返して、台所に駆けこむ。
「ふう」
本日、二度目の吐息は、はてしなく深かった。

四

「気のせいだと、申しあげたではありませんか」
おのぶは、同じ慰めを口にする。
「考えすぎてはいけません。気持ちをうまく切り替えないと駄目ですよ。続けられなくなります」
いかにも仕事人の先輩らしき言葉が出た。弥太郎ともども、おのぶは仕事人を務めていたのだが、四年ほど前に留以は怪我をした二人を助けている。それが縁となって、近藤家に下働きとして奉公し始めたのだった。
以来、留以を自分たちの女主と定め、仕えてくれている。
「おのぶの言うことは、もっともですが、なかなかそこまで図太くなれません」
留以は賑わう十軒店に、気のない目を投げていた。妹の家に行くのを言い訳にして、おのぶと一緒にぶらぶら歩きを楽しんでいる。二月の末から三月三日まで、この通りは雛人形の市がたつのが常だった。老舗の雛問屋の軒先を借りて、臨時の人形屋が店開きしている。地方の素朴な土雛なども並べられていた。

「沙苗様ごときの言葉に、あれこれ悩むようでは、とても務まりませんね。少し休まれてはいかがですか」

辞める話をしても無駄だと思ったのかもしれない。休むに変えていた。

「腕が鈍ります。ただでさえ稽古不足なのですから」

十軒店の通りは混み合い、思うように歩けない有様だった。しかし、このなにげない風景が、気持ちを落ち着かせてくれる。自分もこの中のひとりなのだと思うことによって、ともすれば沈みがちな気持ちを引き立てていた。

「中川様は……留以様を思い出しておられたのかもしれませんね」

おのぶがぽつりと呟いた。薬研堀の枝垂れ桜は、どちらからともなく決めた待ち合わせ場所。ときには、この十軒店へ足を伸ばすこともあった。おのぶが同道したのは、一度だけだったが、忘れもしない雛祭りの時期、確かにここへ来たことがある。

（そう。だから、よけいにどきりとした）

沙苗から、周平が十軒店で雛人形を眺めていたと聞いたとき、わけもなく胸が高鳴るのを覚えた。もしや、と、思ったのである。

まだ想うているのではないか。

（だれが？）

周平だろうか、それとも……。

「留以様」

おのぶに腕を引かれて、はっと顔をあげた。人波の中でも、その長身は目立っている。平左衛門の上役、南町奉行所の与力、八木沢兵庫がこちらに近づいて来た。

「これは、留以殿。人形に負けず劣らずの美しさ。いや、人形はあきらかに負けておりますな。急に色を失ったかのごとき有様です」

年は三十六、美丈夫であるのは、だれもが認めるところだろう。また能吏の証をたてるかのように、奉行所内で大出世をはたしていた。この若さで年番方と支配方を兼ねることになったのは、おそらく兵庫が初めてではあるまいか。もっとも裏で相当な額の小判が動いたという噂も消えていなかった。

「ご活躍、主人より伺うております」

仕方なく儀礼的な挨拶を返した。留以は兵庫が苦手である。さあ、どうだと言わんばかりの言動が、疎ましくてならない。

「さようか」

兵庫は満足げに頷き、続けた。

「して、この後は何処へお出かけなさるのか」
暇があれば茶店にでも誘いたそうな風情だった。色男好きの妹であれば大喜びするだろうが、あいにく留以は男の趣味が違っている。
「〈山崎屋〉に参ります。向かいの本庄様に、人参を頼まれました。急いでおりますので、失礼いたします」
「近くまでお供いたしましょう」
頼んでもいないのに、兵庫は付いて来た。ありがた迷惑だったが、平左衛門の上役である。無下には出来ない。
「申し訳ありません」
いちおう礼を言ったものの、つい早足になっている。が、背の高い兵庫にとっては、どうということもなかった。平然と隣に並んでいる。
「留以殿。見ましたぞ」
囁かれて、またまたどきりとした。見たのは、つまり、例の仕事の様子か。侍を殺めたあれを見たというのだろうか。この世でもっとも目撃されたくない相手に、見られてしまったのだろうか。
鼓動が速くなり、じわりと冷や汗が滲み出る。

「なんの話でござりましょうか」

本庄沙苗の顔もちらついていた。この与力と沙苗は、少し似ている部分がある。顔立ちは整っているのに、隠しようのない心根の悪さが、目つきや口もとに出ていた。

「両国橋の襲撃騒動のとき、賊の二人を仕留めたのは、留以殿だったとか。それがしも亡骸をあらためましたが、流石は留以殿と思うた次第でござる」

まぎらわしい言い方をして、と、腹がたったがこらえる。

「お恥ずかしい限りです。義母上様には、女だてらにと、きつく叱られました」

「野村の母御は、ちと変わり者でござってな。気になさらぬのが宜しかろうと存ずる。検視役人もそれがしと同じ見立てでござったが、二人とも心ノ臓をひと突きではござらぬか。見事な腕前だと、役人ともども唸り申した」

「なれど、人を殺めたわけでございますから」

いつまで付いて来るのだろうか。長身の与力は、非常に目立つ。擦れ違う者たちは、例外なく振り返っていた。あまり人目を引きたくない留以にとっては、さまざまな意味で厄介な相手だった。

「自慢せよとまでは言いませぬが、近頃は、同心の中にも、ろくに刀を使えぬ者が

いる有様。むろん人を斬ったことなど、ありませんからな。彼の者たちには、留以殿を見習うてほしいと思うた次第でござる」

彼の者たちの中には、おそらく夫の平左衛門も入っているに違いない。そして、もうひとつ兵庫が気になるのは、賊を仕留めたもうひとりの人物であろう。

「すでにお聞き及びかもしれませんが、たまたま居合わせた中川周平様は、わたくしの幼なじみでございます。中川様も二人の賊を仕留められました。直心影流の印可を受けるほどの腕前でございますゆえ」

先んじて言った。

「ほう。美之助と同じ流派でござるか」

すぐに夫の同役、本庄美之助の名が出る。自身も冨田流の印可を受けている兵庫は、剣術の話に詳しかった。それもあってよけいに、かつて剣術小町と謳われた留以が気になるのか。興味津々という表情をしていた。

「本庄様は、中川様をご存じかもしれません。確か同じ道場に通うていたのではないかと存じます」

「なぜ、公儀の評定所から遣わされた吟味物調役が、襲われたのでござろうな」

兵庫は、好奇心まじりの問いかけを投げた。此度の騒動を受け持つのは、公儀と

寺社奉行であるため、町奉行所には関わりなきこと。それでも興味が湧くのかもしれなかった。

「わたくしには、わかりかねます」

いささか冷たい口調になったかもしれない。

「愚問でござった。お許しめされよ」

兵庫の謝罪に、慌てて首を振る。

「いえ」

二人の後ろには、無言でおのぶが付いていた。尾行に気をつけるよう、家を出る前に申し渡している。留以と兵庫は、かなりの早足なのだが、遅れることなく後ろに従っていた。こういうとき、仕事人だった昔を思わずにいられない。

おのぶと弥太郎には底力がある。

「近いうちに野村家へ参るやもしれませぬ。まだ決まっておりませぬゆえ、詳しい話はできませぬがな。是非、留以殿のお力を、お借りしたいと思うておるのでござるよ」

「さようでございますか」

否でも応でもない、曖昧に答えた。平左衛門が口にしない以上、それは聞いてい

ないも同然の話。兵庫と内々に決めるなど、あってはならないことだと思っていた。
「そういえば、野村はいかがしたのでござろうか」
ふと思い出したように言った。
「なにか？」
訊きたくないが、訊かざるをえない。
「いや、昨日から浮かぬ顔をしておりましてな。美之助が問い質しても、もごもご口ごもるばかりで、なにも話さぬのでござるよ」
「……」
まさか。
すうっと血の気がひいた。仕事を見たのは他のだれでもない、夫の平左衛門ではないのか。今朝方、物言いたげな様子をしたあれは、確かめたかったのではないだろうか。
「いかがなされた、留以殿。真っ青でござる」
差し出された兵庫の手には摑まらず、後ろから伸びたおのぶの腕を摑んだ。
「あ、いえ、ちと目眩を覚えました。なれど、すぐそこが妹の家でございますゆえ、ご心配には及びませぬ」

「知らせて参ろう」
兵庫は返事を聞かずに走った。なにはともあれ、離れてくれたのが嬉しくてならない。大きく深呼吸した。
「少し気分がようなりました」
「元凶は、犬目与力ですか」
おのぶが皮肉めいた笑みを浮かべる。犬目とは、涙の出ない目を意味する語であり、泣くことを知らない非情の人の喩えとされた。
「それもありますが」
「例の杞憂ですか」
「ええ」
おのぶの腕を握りしめたまま、留以は、混雑する道を進んで行く。犬目与力の厄落としには、妹の明るい笑顔が一番かもしれない。
「朋江が大騒ぎしそうですね」
留以は、独り言のように呟いていた。

五

「んもう、八木沢様ったら、お茶も召しあがらないで帰られました。おあがりくださいと申しあげましたのに」

予想どおり、妹の朋江は、頬を紅潮させていた。何度も「残念です」と繰り返している。留以は皮肉を言わずにいられない。

「そなたは、わたしの容態よりも、八木沢様が気になるようですね」

「あら」

と、朋江は大きく目をみひらいた。見透かされてしまいましたか、そのとおりです、すみません。というような『言葉』が表れている。年は留以より一つ下の二十歳、子をひとりもうけているのだが、夫の千吉が大事にしすぎるのか、幼さが消えていなかった。

「わかりました」

留以は呆れ顔で告げた。

「なにも言っておりませんよ」

「正直に出ております、お顔に」

「あら、いやだ」

両手で顔を覆う仕草が、我が妹ながら可愛らしい。粋な数寄者として名を知られていた千吉も、この無邪気さに惚れたのではないだろうか。

「まったく、しようのないお妹君ですねえ」

などと言いつつも、千吉は蕩けそうな顔をしている。留以は二階に案内されていたが、おのぶは下で蕎麦を振る舞われているようだった。三歳になる嫡男の捨吉は、別室で乳母が面倒を見ている。朋江は毎日のように、やれ芝居だ、やれ花見だと、忙しく出かけているようだった。

「まことに」

留以は、朋江と千吉に目を走らせる。

「なれど千吉さんが甘やかしすぎるのです。〈山崎屋〉の女将は、身代を潰すのではないかと、まことしやかに囁かれておりますよ」

「ご心配なく。わたしごときがちょいと遊んだところで、潰れるような見世ではありませんから。祝言をあげる前の夫は……」

「おや、こちらにお鉢がまわってきましたか」

早々に千吉は立ちあがる。

「では、留以様。てまえはこれで失礼いたします。水入らずの方が宜しいと存じますので。番町のご実家には、義母上様たちも参加する旨、使いをやりました。明日が楽しみでございますね」

如才ない応対は、流石に老舗の主という風格を漂わせていた。朋江よりも十以上、年上ということもあるだろうが、若い頃の放蕩が良い形で表れているのかもしれなかった。いつ来ても二人は、このうえなく幸せという様子をしている。

（わたしも幸せ、ですけれど）

複雑な思いが湧いていた。母の無惨な死に様を見たのは、留以ひとり。だからだろうか。姉の織江や妹の朋江との間に、微妙な隔たりを感じている。壁までとはいかないが、ときどき疎外感を覚えるのだった。

「聞いていますか、姉様」

朋江の呼びかけで我に返る。

「え？」

「またぼんやりしていたのですね。潰れる云々の話ですが、先月あたりから中店ぐらいの見世が何軒か、見世仕舞いしているのです。夫は商いに失敗したのだろう

と言うておりますが」

「なにか引っかかることでもあるのですか」

「いえ、ただ心中した夫婦もいるのですよ。〈山崎屋〉とも取り引きのあった薬屋だったので、いささか衝撃を受けました。借財が膨れあがって、二進も三進もいかなくなったようですが、それまで借金の話など聞いたことがありませんでしたから」

「そういえば、昨夜、旦那様から伺いましたよ。心中が続いているという話をしておられましたが、そうでしたか。ひとつは、この近くの見世の話でしたか」

応えて、留以は言った。

「外から見るほど楽ではなかったのでしょう。千吉さんは、なにか言っていましたか」

「口にはしませんが、やはり、感じることがあったようです。時折、遠くを見るような目をして、考えこんでいますから」

「千吉さんにとっては朋江の明るさが、救いなのかもしれませんね。文句を言いながらも、食べていけるだけ、幸せなのかもしれません」

「わたしは文句など言うておりませんよ」

「そうでした。文句が出るのは、わたしの口。朋江の口から出るのは、お惚気ばかりでしたね。いつもあてられていますよ」

思わず吐息が出た。

「ほら、また、それ」

すかさず朋江が言った。

「さいぜんから、五度目ですよ。かような深い吐息が出るのは、性根の曲がったお姑様と小姑のせいですか」

「朋江ったら」

「図星でしょう？」

「まあ、それもありますけれど」

留以は手短に説明する。過日の仕事の際、だれかに見られたような気がしてならない。どうしても不安が消えなかった。

「脅しの文などは届いていないのですか。『仕事』の様子を見たぞ、金を出さなければ奉行所に訴え出る、などというような文は来ていませんか」

いつになく朋江も真剣な顔になっていた。なにかあったときには、支えになってくれると、姉妹ともに約束している。しかし、留以はできるだけ二人を巻きこみた

くなかった。地獄に堕ちるのは自分だけでいいと覚悟を決めている。
「今のところ、かような文は届いておりません」
「ここに来るまでの間、尾行けられていたような気配は？」
「おのぶに頼んでおきましたが、おかしな気配はなかったようです」
「近頃、なにか変わった出来事はありましたか」
「変わった出来事とは言えないかもしれませんが、中川様にお目にかかりました。一昨日の夜、薬研堀の近くでばったりと」
「おや、まあ」
朋江は、やけに大人びた顔になる。亡き母の面影が見えた。
「中川様は」
次に出る言葉を察して、留以は答えた。
「まだおひとりだそうです」
「姉様のことが、忘れられないのですねえ」
しみじみ呟いた。
「わたしが言うのもなんですが、天城家の騒動さえなければ、似合いの夫婦になられたと思います。姉様は小野派一刀流、中川様は直心影流。流派は違えど、剣術

を学ぶ志は同じでしたもの」
「仕方ありません。ご縁がなかったのです」
「中川様は不思議でならないでしょうね」
「なにがですか」
「野村家に嫁いだことですよ。平左衛門様は、色男でもなければ、剣術の達人でもない。おまけに口うるさい姑と小姑付きの家に、なにゆえ剣術小町は嫁いだのか、と、疑問をいだいておられるに違いありません」
「何事もご縁ですから」
「姉様」
朋江は、呆れ顔で吐息をついた。
「ほら、わたしにまでため息が、伝染ってしもうたではありませんか。姉上は野村家に嫁いだ理由を、察しておられるようですが、わたしも中川様と同じく、いまだに理解できません。どこがいいのでしょうか。とても不思議です」
「中川様は、かようなことは言うておりませんよ。当て推量だけで、ものを言うのはおやめなさい」
「なれど気になるのです。野村様は姉様に、なんと言ったのですか。嫁ぐことを決

めた言葉が、あるのでしょう？」

「秘密です。そなたに教えたが最後、面白可笑しく吹聴されてしまいますからね。わたしが嫁ぐことを決めた言葉は、わたしの胸に秘めておくのが得策だと思います」

だれかが階段をあがって来たため、留以は話をやめた。

「朋江」

千吉が障子を開ける。

「鎌倉河岸の諸色問屋〈なにわや〉の主が来ているんですよ。御内儀にお目にかかりたいと言っているのですが」

いささか不審げな顔つきをしていた。留以は朋江に目顔で合図を送る。〈なにわや〉の主――源内が仕事人の元締であることは、すでに話してある。

ぴんときたのだろう、

「こちらにお通ししてください」

朋江は答えて、言い添えた。

「お茶事に用いるお茶を、安く仕入れられると聞いたものですから、お呼びしたのです。うちで使うお茶ではありません。野村家のお茶です」

「そうでしたか」
千吉は得心したように頷いた。野村家の姑、希与は袋師として、そこそこ名を知られていた。袋師は茶道具を作る千家十職のひとつであり、当然のことながら、希与は茶事に通じている。他の家以上に、茶が要るのは言うまでもない。
「こちらにご案内いたしましょう」
立ちあがった千吉に、
「お手数をおかけいたします」
留以は礼を告げた。朋江も会釈して、夫のあとに続いた。思いもかけず妹の嫁ぎ先での密談が始まろうとしている。
またもや例の憂悶が、留以の心を覆っていた。

六

「おのぶさんから話は聞きました」
開口一番、源内は言った。
「どうせなら、こちらのお見世を使わせていただいた方がいいと思いましてね。お

のぶさんに段取りを整えてもらいました。不意打ちをくらわせてしまい、申し訳ありません」

と、丁重に詫びた。諸色問屋は、おもに江戸と地方の間で流通する米や油、茶や陶器、木綿といった商品の仲介をする商いだ。〈山崎屋〉とも商いの関わりがある。それを利用しない手はないと思ったに違いない。

「確かにここで会う方が、怪しまれずにすみますね」

留以も同意した。今までは源内が用意した船を使い、密談や礼金をもらう場にしていたが、船に乗り込む際、だれかに見られる懸念があった。源内は留以の立場を慮ってくれたのだろう。

「はい」

遠慮がちに答えた。

「朋江様にはご迷惑かもしれませんが、姉君が妹の家を訪ねることに対して、不審をいだく者はおりませんから」

それで、と、話を変える。

「おのぶさんによりますと、だれかに仕事を見られたような気がするとか」

「そうです。おのぶと弥太郎は、人影など見なかったと言うているのですが、さっ

とだれかが隠れて、姿を消したように思えてならないのです」
「なるほど。てまえの子飼いの者に、しばらく留以様の身辺を見張らせましょう。おかしな動きがありましたときには、岡田様やお真佐さんの力をお借りしますよ。留以様は少しの間、仕事はなさらない方が宜しいと存じます」
話しながら源内は、懐から小さな紙包みを出した。
「まずはお収めください」
すっと畳をすべらせたそれを、留以は受け取る。
「ありがとう存じます」
「ご存じかと思いますが、仕事の依頼は、浅草の今戸にある古寺の和尚が受けます。この和尚も、もと仕事人ですがね。賭場なども開いている生臭坊主なのですよ。色々な噂話が耳に入るようでして」
含みのある言葉に、ぴくりと耳をそばだてた。
「もしや、『もがりの猛蔵』が江戸に現れたのですか」
思わず問いかけている。盗人や極道の話を知るには、裏の道に入るしかない。そういったことを考えて、留以は仕事人の道に身を投じた。むろん源内にも二親を『もがりの猛蔵』に殺められた話は伝えてある。仇討ちしたいとも告げていた。

「いえ、猛蔵ではないのですが、おそらく手下だと思います。丈吉という男が姿を見せたと言ってきました。押し入る先の下見に来たのか、単に江戸の水が恋しくなって現れたのか。あるいは両方かもしれませんが」

「その和尚は、猛蔵を知っているのですか。手下を見知っているのですか。丈吉の塒はわかって……」

まあまあと、源内に仕草で宥められた。

「お気持ちはわかりますが、落ち着いてください。繰り返しになりますが、和尚はもと仕事人。猛蔵は似顔絵でしか知らないと思いますが、何人かの手下は、賭場を開くと遊びに来ていたようです。そもそも寺で賭場を開くこと自体、信じられない話ですがね。けっこう行われているんですよ」

「それで」

留以は逸る気持ちを抑えられない。

「丈吉という男の塒は」

問いかけを遮るように源内が答えた。

「まだわかっておりません。どうも遊女屋を泊まり歩いているようでして」

「わたしも参ります。早く行かないと逃げられてしまうかもしれません」

「大丈夫です。見張りを付けておりますので」
「ですが」
心はすでに跳んでいた。手下の丈吉を責めあげて、頭の猛蔵の居所を吐かせる。京か大坂にいるのであれば、無理をしてでも行って、猛蔵を始末する。路銀は朋江に用立ててもらおう、などなど、忙しく考えていた。
「留以様の動きを知れば、猛蔵は警戒するでしょう。丈吉は泳がせておいた方が宜しかろうと存じます。見張りを頼んだ者は、猛蔵の顔を知っておりますので、姿を見せれば必ず連絡が来ますから」
「そう、ですか」
浮かせた腰を戻したものの、落ち着かなかった。諦めかけていた仇討ちが、手の届くところまで来ている。思いのほか動揺している自分に驚いていた。
「平らかな暮らしに浸かりすぎたようです」
自嘲気味の呟きに、源内は小さく首を振る。
「ご自分を責めてはいけません。あたりまえのことではないかと存じます。仇を討つ者にも、日々の暮らしがありますからね。まあ、それは盗人の方も同じでしょうが」

ふと目をあげた。

「かねてより、思っていたのですが、お義父上の近藤様には『もがりの猛蔵』を見たと、お話ししていないのですか」

「話しておりません。義父は目付役、旗本の監視が主な御役目です。町人の盗人については、知らないと思いますから」

「そうとは限りませんよ。探索はお手のもの。騒動の流れによっては、町奉行所の役人とも連絡を取り合うではありませんか。きっとお力になってくださると思います。一度、ご相談なされてみてはいかがですか」

猛蔵の件とは関わり合いになりたくない、ということだろうか。遠まわしにそれを、ほのめかされているように感じた。

「やはり、ご迷惑だったでしょうか」

声が弱々しくなりすぎたかもしれない。

「いえ、そんなことはありません」

源内は慌て気味に告げた。

「てまえどもは、留以様の仇討ちに、及ばずながらお力添えするつもりです。岡田様とお真佐さんも同じことを言うておりました。悪党が片付きますからね。ただ一

刻も早く猛蔵の居所をつかみたいのであれば、近藤様にお願いするのも、よいのではないかと思うた次第です」

「それを聞いて安堵いたしました」

はからずも出た本音に、またもや恥ずかしくなる。

「我ながら、なさけないこと。源内さんたちを頼っていては、本懐を遂げられるはずがありません」

「そこまで厳しくご自分を追い詰めなくても、よいのではありませんか。どこにいるのかわからない盗人が相手です。雲をつかむような話ですよ。力を借りられるときは借りて、じわじわと相手を追い詰めた方が宜しいのではないかと」

「そうですね。自分を追い詰めるよりは、相手を追い詰めた方がいいですね」

自然に笑みが出ていた。猛蔵の手下の話が出ただけで、このていたらく。平左衛門との暮らしが、どれほど支えになっているか、あらためて感じていた。失うものがあるからこそ、失いたくないと思い、踏ん張れる。

「一度、その今戸の古寺に参りたいのですが、いかがでしょうか」

気になることを問いかけに変えた。

「生臭坊主の話を聞きたいという仰せですか」

「はい。明日は、番町の近藤家に参ります。姉に頼めば口裏を合わせてくれるでしょう。二日ほど、時が取れるかもしれません。手下の丈吉がどういう男なのか、人相風体だけでも知りたいのです」

「承知いたしました。うまくいけば、塒がわかっているかもしれませんしね。留以様の仰せに従いましょう。段取りをつけます」

「お願いいたします」

ひとつ片付くと、またもや例の憂悶にとらわれる。

「気のせいであれば、いいのですが」

「見たのであれば、相手はなにか言ってくるはずです。あるいは騒ぎらしき気配を感じたのかもしれませんが、仕事をしていただいた夜は、月も星もない闇夜でした。留以様のお顔までは、わかりませんよ」

「おのぶにも同じようなことを言われました。確かにそのとおりなのですが」

消えない不安を感じ取ったのか、

「幻の目撃者から連絡が参りました折には、この源内。命に替えましても、留以様をお守りいたします」

源内が軽く自分の胸を叩いた。仲間がいることを懸命に伝えようとしていた。も

とより源内たちを信じている。

「此度の憂悶は、己の甘さが引き起こしたもの。ちらりと見えたあれは、わたしの影だったのやもしれませぬ」

仕事人というのは、常になにかに怯えて生きるのかもしれない。修羅の道に足を踏み入れたことを、あらためて思い知らされていた。

第二章　御免勧化（ごめんかんげ）

一

だが、修羅の道を歩む身にも、日常（ふだん）の道がある。

三月三日。

留以は、姑たちと一緒に、番町の近藤家を訪れていた。

「ほんに美しい雛人形でござりますなあ。去年もお招きいただきましたが、いちだんと雅（みやび）な風情（ふぜい）が増しているように思えまする」

姑の希与は、歯の浮くような世辞（せじ）を口にする。

「まことですね、母上。女雛はどことなく、留以殿に似ておりますよ。我が家の嫁女は、美人ですから」

小姑の環紀も、しきりに相槌を打っていた。この二人は、近藤家を訪れたときだけ人が変わる。尻がむず痒くなるような世辞を平然と口にするのだった。

「わたくしの躾け方がよくなかったのか、留以は家事が苦手です。ご迷惑をおかけしているのではないかと存じます」

母親代わりの長女、近藤織江が詫びを口にする。雛人形が飾られた座敷には、留以と朋江、希与と環紀の五人が集っていた。義父の時之助と婿の左兵太は御城に出仕しており、甥の真吾は学問所に行っているため、まさに女だけの雛祭りになっている。それぞれの前に置かれた箱膳には、美味しそうな仕出し料理が用意されていた。

「なんの。留以殿は頑張ってくれております。のう、環紀」

希与が同意を求めると、

「はい。朝から晩までコマネズミのように働いてくれますよ。ほんに助かっております」

環紀が作り笑いで応じた。この言葉に関しては、偽りを告げていない。留以はまさにコマネズミのごとく、夜明け前から深更まで働かされている。

「さようでございますか。お役に立っているのであれば、なによりです」

織江は、仏のような笑みを浮かべて、話を合わせた。母娘の酷い扱いは、むろん知っているものの、そこは武家の嗜み。敢えて口にしなかった。

「そういえば、織江様は夏頃に第二子がご誕生なさるとか」

希与が織江の腹のあたりを見やる。まだお腹は目立ってはいないが、少し頬がふっくらしていた。織江と留以はよく似ており、朋江だけはいささか美貌は劣る。しかし、愛嬌でそれを補い、千吉から愛されていた。

「はい」

織江は短く答えた後、

「あまり白酒を召しあがっておられませんね。留以からお二人がお好きだと聞きましたので、〈豊嶋屋〉から多めに買い求めておきました。ささ、遠慮なく召しあがってくださいませ」

うまく話を変えてくれた。子のできない留以を慮りつつ、妹をさりげなく持ちあげるのも忘れていない。婿を取って近藤家を継いだ女主は、その役割を充分すぎるほどに果たしている。そんな姿が、留以には眩しかった。

「義母上様、義姉上様、どうぞお召しあがりください」

姉から白酒の銚子を取って、注ぎ役になる。この家に着いた時点で、二日ほど

近藤家に泊まることにしてほしいと織江に話しておいた。うまく話がそちらに行くよう、次の言葉を考えている。

「そうそう、我が家の旦那寺でございますが」

不意に希与が口を開いた。

「来月、両国の回向院において、出開帳を催すことになりました。お寺の普請をするのでしょう。公儀より御免勧化も賜りましてな。我が家もわずかではございますが、寄付いたしました次第」

御免勧化とは、幕府に勧化状を発給してもらい、募金活動を行うことだ。許可を受けないものを自分勧化と呼ぶが、幕府の許可を得られた方が効果は大きい。

（近藤家も寄付をせよとの仰せですか）

留以は姑の思惑を読み取っている。姉も気づいたのだろう、

「それでは、あとで些少ながら徳を積ませていただきたく存じます」

にこやかに申し出た。

「〈山崎屋〉も喜捨いたします」

朋江が請け合うや、希与は破顔した。

「いえ、かようなつもりで言うたわけでは、ございませんがの。織江様がご懐妊と

承りましたゆえ、安産のお札をお贈りいたしたく思いました」

「母上はご開帳巡りがお好きなのです。ほら、年末にございますでしょう、泉岳寺のご開帳。赤穂浪士たちの遺品も展示されるあれが、特にお気に入りでございまして」

言葉を継いだ環紀に、すぐさま希与は反論する。

「わたしのことは言えませぬぞ。そなたも前夜は眠れぬほど、気が昂ぶるではないか。翌日には歌舞伎三昧じゃ」

「あら、それこそ、わたしのことは言えませんよ。歌舞伎の演目がまた赤穂浪士の討ち入りですからね。足を運びたくなります」

「さよう。歌舞伎役者も商いが巧いわ。成田山が深川の永代寺で出開帳をした折には、成田屋が舞台で『成田不動』を演じるではないか。われらは、ついつい出かけたくなる」

「ほんに」

母娘は二人で盛り上がっていた。いかに出かけているかを示すような会話になったことに、遅ればせながら気づいたのかもしれない。

「いやですよ、母上。出開帳巡りの話になってしまいました」

取り繕うように環紀が言った。
「いえ、楽しいお話でございました」
朋江が如才なく受ける。
「お寺も色々と大変なのでしょう。檀家だけでは成り立たないため、信徒を増やすのに躍起になっているようです」
「芝の増上寺などは、お坊様の数だけで三千人前後いるとか」
と続けた織江に、母娘は目を丸くした。
「三千人もいるとは知りませんでした」
「それでは、賄いだけでも大変でしょうね」
「我が家も大食らいの嫁女がいるゆえ、楽ではないがの」
「まあ、母上ったら、かような軽口をたたいて。ここは近藤様のお屋敷でございますよ。遠慮なされませ」
白酒がまわり始めたらしく、ちくりと皮肉もまじえていた。朋江は苦笑を滲ませていたが、よけいなことは言わない。
「ですが、増上寺や寛永寺は、江戸近郊にそれぞれ一万石の領地を賜っております。おまけに境内を含めた敷地も、公儀から寄進された土地。よって年貢、つまり

租税は免除されますので、商人よりもずっと恵まれているのではないかと存じます」

代わりに、いかにも武家の出らしい知識を披露した。あるいは商家に嫁いだがゆえの考えが口に出たのか。寺に対する厚遇を目の当たりにして、複雑な思いが湧いているように感じられた。

（心中騒ぎが続いていると言うていましたね）

留以は、平左衛門と朋江の話を思い出している。商いに失敗したのか、他に理由があったのか。詳しいことはわからない。が、商人や民が御免勧化などを行えないのだけは確かだった。

「増上寺と寛永寺の間にも、微妙な確執があるとか」

織江が口を挟んだ。

「歴代の将軍様がみまかられたとき、さて、どちらの寺が葬儀を受け持つかで揉めたこともあるそうです。交代になった時期もあるようですが、近頃は、寛永寺で執り行われることが多いとか」

「なるほど。葬儀を引き受けられれば、お布施や寄付が計り知れませんからな。奪い合いになるのも無理からぬこと。将軍様ともなれば、ご逝去なされた後も、のん

びりしていられませぬの」
　希与が得心したように頷いている。
「それを思えば、わたしたちは楽ですねえ、母上。明日は永代寺、その次は回向院と出開帳三昧ができますから」
「さよう」
　ちらりと希与が目を向けた。
「留以殿のお陰でしょうな」
「……」
　ぞくりと悪寒が走った。白酒でほろ酔い気分とはいえ、あまりにも不気味すぎる。厭味を言われている方が落ち着くのは、もはや病気だろうか。
「母上。近藤様や〈山崎屋〉さんに、喜捨していただけるのなら、雑念寺の講に少しまわせますね」
　環紀も頬を染めている。上機嫌だった。
「雑念寺とは、どちらのお寺ですか」
　留以は思わず訊き返している。野村家の旦那寺ではない寺に、姉妹の寄付金をまわされてはたまらない。問いかけに力が入った。

「芝の寺じゃ」
希与が答えた。
「面白い講でな。一両、預けると、一年後には二両になる、というものよ。預けた金をうまく、うまく、なんだったかの」
娘に助けを求めた。
「運用するのです。人に貸し付けて増やすのですよ。それで一年後には、二倍になって返ってくるというわけです」
「二倍」
留以は、蓄財の二分のことを考えている。吝嗇家の希与は、弥太郎夫婦の賃金を出してくれないため、その分も留以が負担していた。また日用品に関しても、びた一文渡してはくれない。ときどき平左衛門が小遣いをくれるものの、足りないのがあたりまえの状態になっている。
金欠病を読まれてしまったのか、
「留以殿もやりますか」
環紀に誘われた。
「いえ、わたしはかような講に預けるお金がございませんので」

「〈山崎屋〉さんに用立てていただけば、よいではありませんか。一両が一年後には二倍ですよ、二倍」

二本の指をたてて、環紀は迫った。二分が一年で二倍になれば四分、つまり、一両になる。このうえなく魅力的な誘いだったが、

「やめておきます。朋江に迷惑をかけたくありませんから」

かろうじて撥ねのけた。心の中では「二分が一両、二分が一両」と呟いている。小判を拝めたのは、源内に礼金をもらった昨日のみ。諸々（もろもろ）の支払いで、またたく間に消え失せていた。

その話、乗った！

と言いたいのを、ぐっとこらえている。

二

「希与様。申し訳ないのですが」

織江が遠慮がちに切り出した。

「二日ほど、留以をお貸しいただけますでしょうか。わたくしの手伝いをしてもら

いたいのです。ここにきて急につわりがひどくなりました。真吾の世話などが行き渡らなくなっているのです。二日が無理であれば、一日でもお願いできないかと思いまして」

打ち合わせどおりの流れを作った。今日と明日の二日あれば、浅草の今戸の古寺を訪ねられる。仕事人の依頼を受ける古寺だが、『もがりの猛蔵』の手下、丈吉の塒がわかっていた場合、塒に行くことも考えていた。可能ならば二日、無理ならば一日。気むずかしい姑の気質を考慮して、二段構えにしている。

「それは難儀でござりますなあ」

希与は外面のよさを保っていた。

「なれど家事の苦手な留以殿が、役に立つのでしょうか」

環紀の口から本音と思しき呟きが出る。酔いにまかせたものだったかもしれない。希与は娘の手を軽く叩いて窘めた。

「喜んでお受けいたしまする。留以殿は力仕事が得意でござりますゆえ、必ずやお役に立ちましょう。思う存分、使うてやってくださりませ」

腹の底はわからないが、いちおう希与は承諾する。

「ありがとうございます」

織江の辞儀に、留以も続いた。

「義母上様、義姉上様。ご迷惑をおかけいたします。姉へのお心遣い、ありがたく存じます」

「ささ、白酒をどうぞ。おや、空ですね」

「姉上。わたくしが」

留以は立ちあがって座敷を出る。台所に向かう間も心の中で「一年で二倍」と呟き続けていた。爪に火を灯すような思いで、やっと貯めた二分。それが一年待てば、一両に増える。蓄財が一両になるのは、本当に心丈夫だった。

「白酒ですか」

おのぶが、台所の土間から訊いた。

供をして来た下女は、近藤家の年老いた下男――忠兵衛と一緒に、この家では雛寿司と呼ぶ寿司を食べていた。同じぐらいの大きさに切った干瓢や蒟蒻、人参、干し椎茸、戻した凍み豆腐などを味付けして、酢飯に混ぜたものである。亡き義母が得意だったちらし寿司を、織江がきちんと継いでいた。留以も大好物であるのは言うまでもない。

「ええ。でも、おのぶは休んでいなさい。わたしが持って行きます」

土間に降りて、膳台に置かれていた白酒を手に取る。雛寿司は希与たちに持たせる土産のひとつに加えるつもりなのだろう。寿司桶にたっぷり作られていた。人参や金糸卵の彩りに、つい見惚れている。

「召しあがりますか」

おのぶが訊いた。

「あとで頂きます」

「それでは」

勘働きのいい下女は、鋭く読み取っている。家事をするのは嫁の役目と、留以をこき使う姑が、二日も暇をくれるかどうか。おのぶにとっても気がかりだったに違いない。

「お許しいただいたのですね」

確かめる声が弾んでいた。

「はい」

「〈なにわや〉に使いを出します」

源内に知らせると告げた。

「お願いします」

近藤家の下男を懸念して、仕事人の話は最低限に留めた。源内に知らせておけば、古寺の和尚に連絡をつけてくれるはず。留以は、年老いた下男に目を向ける。

「忠兵衛。義父上はまだお戻りにならないのですか」

ちらし寿司を食べ終えた忠兵衛は、勝手口の近くで一服と思ったのだろう。煙管と煙草入れを手にしていた。

「今日は遅くなるかもしれないと言っておられました」

かぼそい声は、ともすれば聞き取れないときもある。留以がここに引き取られたときから忠兵衛は年寄りだったが、近藤家には、他にもおのぶと同じ年頃の下男夫婦が奉公していた。下男は義父たちの供役を務め、下女は買い物にでも行っているのか。二人とも姿が見えなかった。

「そうですか」

留以の返事を聞くと、忠兵衛は会釈して、勝手口から出て行った。

「過日の騒ぎですよ」

おのぶが茶を淹れてくれる。留以は板の間の上がり框に腰かけて、話を続けた。

「黒崎様が襲撃された騒ぎですか」

「はい。ご公儀の評定所から遣わされた吟味物調役の御役人が襲われたんですから

ね。下手人探しにも力が入ります。無事だったのならともかくも、命を落としたとあっては、上役から叱咤されるのは必至。寝ずの探索になりましょう」

「あの騒ぎ、瓦版などには載っていませんでしたが」

「ご公儀が止めたのかもしれません。わたしも亭主に頼んだりして、気をつけていましたが、売られませんでしたから」

「姉様」

朋江が割って入る。

「やはり、かようなところで話しこんでいたのですね。お貸しください。白酒はわたしがお持ちします」

「すみません」

盆に載せた白酒を渡したが、「そうそう」と朋江も座りこんだ。

「今、姉上にお聞きしたのですが、この屋敷のご近所、ほら、姉様もご存じでしょう。御旗本の小林新右衛門様。確か小納戸役を務めておられたように憶えております。お婆様の作る柏餅が美味しかった家ですよ」

「ああ、憶えております。うちは三姉妹、小林家は三兄弟でしたね。確か小林家もご長男が跡を継がれたのではなかったですか」

「はい。ご次男とご三男は、親戚筋にご養子に出たとか。跡継ぎのご長男は六年ほど前に祝言をあげられて、お子を二人、もうけられたそうです。柏餅を作るのが上手だったお婆様は、とうにご他界なされた由。その後、相次いで二親を亡くしたと聞きました」

「それで？」

長くなりそうな話を、なかば強引に終わらせようとする。

「なにが言いたいのですか」

「いえ、この一家がいなくなってしもうたらしいのですよ。夫婦と二人のお子が、ある日、突然、姿を消してしもうた由。三、四日、前だそうです。神隠しではないかと……」

「たかが三、四日ではありませんか。それぐらいで大騒ぎするとは」

「ですが、屋敷の中は、まさにがらんどう。家財道具がいっさい残っていなかったようなのです」

声をひそめた朋江に、留以も倣った。

「では、もしや……夜逃げ？」

「そうかもしれません。家財道具を売り払い、逃げ出したのではないかと、みな噂

しているようです」
「夜逃げした理由はなんですか」
「さあ、わたしに訊かれましても」
姉妹の会話は、長姉の呼びかけに遮られる。
「留以、朋江。白酒はまだですか。二人とも戻って来ないのは、〈豊嶋屋〉さんに買いに行ったからですか」
座敷からひびいた皮肉まじりの言葉に、二人は肩をすくめる。つい長話をしてしまうのは、希与たちの相手をしたくないからだ。
「参りましょうか」
澄まし顔で留以は立ちあがる。
「はい。わたくしもお供いたします」
朋江もおどけて応じた。ふふっと笑い合って、女だけの雛祭りは佳境に入る。
織江が上手に相手をしているのだろう、座敷からは姑と小姑の笑い声がひびいていた。

三

翌日。

夜が明けきらぬうちに、留以とおのぶは近藤家を出た。ひさしぶりに家事から解放されて、身も心も軽かった。

「桜が綺麗ですねえ」

留以は今戸橋の上に立ち、対岸を見やった。竹屋の渡しで向こう岸に渡ると、小梅村に挟まれて三囲神社があるのだが、今日は花見客で混雑するに違いない。河岸に植えられた桜は、まさに満開のときを迎えていた。競い合うように枝を広げるさまが、川に映し出されている。

「おのぶ。あの船はなんですか」

留以は川を上がって来た一艘の大屋形船に目を留めた。紅提灯を綺麗に飾りつけた船は、華やかな何本もの幟を、春風にはためかせている。笛や太鼓に合わせて、振り袖姿の女子たちが船室の中で踊っていた。わざとだろうが、障子を閉めていないため、中の様子がよく見える。

「連中船でしょう。遊芸師たちも花見に来たんですよ。〈山村屋〉か〈杵屋〉かもしれませんね」

おのぶが答えた。手には鞘袋に入った留以の小太刀をかかえている。

「鳴り物はお手のものですか。派手やかな桜狩ですねえ」

「希与様たちも、桜狩に出かけると言うておられましたね」

おのぶの言葉に、留以は唇をとがらせた。

「義母上様たちは毎日のように出かけてばかり。旦那様はちらし寿司を味わえたでしょうか。それがちと案じられます」

「お二人で平らげてしまわれたと？」

「ありうるではありませんか」

「確かに」

と受けて、おのぶは笑った。

「旦那様のことも、ちょいとお忘れになられればよいではありませんか。せっかくお暇をいただいたのですから」

「それはそうですけれど」

ふたたび留以は歩き出した。今戸橋から橋場までの大川の河岸地が今戸町だった。

花見のついでに寺詣りをと思う者が多いのかもしれない。あるいは寺詣りをしたついでに花見をするつもりなのか。早朝であるにもかかわらず、かなりの人出になっていた。

今戸町の家々の竈からは煙が立ちのぼっている。瓦師が多く住み、付近で採れる土を使って、今戸焼を産出していた。火鉢や土風呂などを造る傍ら、江戸名物の今戸人形も造るのだろう。

立ちのぼる煙は、煮炊きだけに使われているのではない。揺らめく煙に職人たちのさまざまな想いが、こめられているように感じた。

「結局、大旦那様はお戻りになられませんでしたね」

おのぶが言った。おのぶと弥太郎は、義父の時之助を大旦那様、婿の左兵太を旦那様と呼び習わしている。

「お忙しいのでしょう。姉上に文をお預けしておきました」

歩きながら留以は、店先に並べられた今戸人形を眺めている。土人形の富士見西行、腹鼓を打つ狸、今戸新造といった人形が人気のようだった。

（二分を預ければ、一年で二倍。つまり、一両になる）

目は人形に向けられているが、思うのは昨日の話のみ。環紀が口にした「一年で

二倍」が、頭の中でひびいていた。
「『もがりの猛蔵』を見た話ですか。それを大旦那様に、文でお伝えしたのですか」
おのぶは囁き声になる。
「ええ、そうです」
「探すのを手伝うてくださるでしょうか」
「わかりませんが……」
「留以様」
おのぶに腕を摑まれた。両手で留以の頬をはさみ、ぐいっと自分の方に向ける。いやおうなく目を合わせる形になっていた。
「急になんですか」
「なんですかではありませんよ。上の空ではないですか。まだ例のことを気にしているのですね」
「例のこと」
繰り返して、はっとした。
「仕事を見られたことですか」
「おや、違うんですか」

「そなたに言われるまで忘れていました」
留以はまた歩き始める。おのぶが慌て気味に追いかけて来た。
「いけませんよ、留以様」
「なんの話ですか」
「中川様のことを考えておられるのでしたら……」
「おのぶ」
今度は留以が足を止めた。
「なぜ、急に中川様の話が出るのですか。意味がわかりませんよ」
「これも違いましたか」
試しに言ってみただけだという顔をする。正直に言えば笑いとばされるのは確かだろう。留以は無言で歩き出した。
女主の勘気を蒙ったと思ったのか、
「申し訳ありません。浮かない顔をしておられるのが気になったのです」
おのぶが隣に並んだ。主従は、立ち止まったり、歩いたりを繰り返している。なんとかして蓄財が増えないかと、留以は考えているだけなのだが、主の心、下女は知らず。懸命に詫びていた。

「心配なんですよ、留以様が。迷いは仕事に表れます。いえ、わたしと亭主も、そういう時期がございまして」

「おのぶ」

留以は前方の人だかりに目をとめる。道の両側には、瓦師の家が連なっているのだが、その先の一角に大勢の人が集まっていた。町人だけではなく、浪人ふうの侍も見える。

「え？」

視線を追ったおのぶも、その人だかりに気づいた。

「お待ちください。見て参ります」

「参りましょう」

返事を待たずに、留以は走り出している。もしや、刃傷騒ぎか。喧嘩でも始まっているのではないか。野次馬を掻き分けて、強引に前へ出た。

「芝の雑念寺でございます」

坊主が引札を配っていた。

「こちらのお寺の境内をお借りいたしまして、今、桜花講を執り行っております。ただの講ではございません。一両をお預けいただけますれば、一年後には二倍にな

るという講にございます」

「雑念寺」

引札を受け取った留以は、記憶を探った。

「確か義姉上様が仰っていたのも雑念寺だったような」

一年で二倍のくだりも同じだった。おのぶは怪訝そうに引札を覗きこむ。

「桜花講ですか」

「そなたは、別の部屋にいたので、義姉上様の話を聞いていませんでしたね。昨日、このお話を伺ったのですよ」

留以は声が上ずるのを止められない。これは仏のお導きではあるまいか。一年で二倍と考え続けていたら、まさにそれを告げる坊主が現れた。環紀に託した場合、あとで一割よこせだのなんだのと、面倒なことになるかもしれない。そう思うがゆえに踏み切れなかった部分もある。

この坊主であれば大丈夫なのではないだろうか。

「ちと話を聞きたいのですが」

「承知いたしました。どうぞ境内においでください。桜花講と記された幟のところに、受付所がもうけられておりますので」

「わかりました」
「留以様」
おのぶの手を振り切って、寺に続く参道を進んで行った。が、途中で動けなくなる。留以は追い抜いて進もうとしたが、
「御新造様（ごしんぞうさま）」
中年女に呼び止められた。
「並んでいるんですよ。あたしが最後らしいんで、後ろに付いてください」
町人の女は、無愛想に顎（あご）で後ろを指した。留以は背伸びして前の様子を見る。坊主が告げた桜花講の幟が、ひらひらと風に揺れていた。ざっと見ただけでも、四、五十人は並んでいるように思えた。
（これだけ大勢の人が預けるのなら安心です）
わずかに残っていた不安が、行列を見て霧散（むさん）する。
「仕方ありませんね。並びましょう」
「本気ですか」
呆れ顔のおのぶに、引札を渡して、告げた。
「義姉上様に預けるよりは、こちらの方がよいではありませんか。引札をよくご覧

なさい。宜しいですか、一年で二倍ですよ。一両を預ければ、一年後には二両になるのです」

「だれに預けるのですか。なぜ、二倍になるのですか。一年後にどこでそのお金を受け取れるのですか」

おのぶは矢継ぎ早に問いかける。

「また質問の嵐ですね。いっそ『矢継ぎ早のおのぶ』とでも名乗りますか。お金は雑念寺に預けるのですよ。そして、雑念寺は集まったお金を人に貸して、儲ける。ゆえに預けたお金が、一年後には二倍になって返るという仕組みです」

「あたしは二度目なんですよ」

前に並んでいた女が振り返る。

「去年の二月頃、雑念寺にお預けしたんです。そうしたら、先月の末にお坊様がうちまで届けに来てくれました。受付所で住む場所と名を記すんです。住む場所がない者は、ここのお寺の名でもかまわないとか。はじめは半信半疑だったんですけどねえ。ほっとしましたよ。だから今年は多めにお預けしようと思っているんです」

無愛想だった顔が、ほころんでいる。留以には福の神のように見えた。どちらからともなく主従は顔を見合わせる。

「そなたも出しますか」
「はい」
「なれど反対するつもりだったのでは……」
「気が変わりました。わたしも蓄財の二朱をお預けいたします」
おのぶの答えと目に力がこもった。頷き返して、留以は帯に挟んでおいた蓄財を取り出した。二分が一両、二分が一両と、心の中で呟いている。
（一年後が楽しみです）
家に届けられては困ると思い、これから訪ねる心光院の名を記そうなどと考えていた。

四

「思いのほか、時を取られてしまいましたね」
急ぐ留以を追い抜いて、おのぶが前に出る。
「和尚に知らせて参ります」
裾を翻して走った。おのぶも一年後の楽しみを思い描いているのだろうか。弾

むような足取りだった。

「『矢継ぎ早のおのぶ』はどこへやら、ですね」

留以は笑って、下女に先触れ役をまかせた。道の左右には今戸町が広がり、相変わらず家々からは煙が立ちのぼっている。なんとなく気持ちにゆとりがあった。

「一年後には一両」

ついにんまりしている。おのぶのことを笑えなかった。長襦袢の生地も買いたい、平左衛門の雪駄もそろそろ取り替えなければ……あれも買いたい、これもほしいと、望みは限りなくふくらんでいる。

「気持ちを切り替えなければ駄目ですね」

ぱんっと両手で頬を叩いた。心光院に現れたのは、本当に『もがりの猛蔵』の手下なのだろうか。それを思いうかべたとたん、浮かれ心が消え失せた。おのぶは戻って来ないが、心光院の境内に足を踏み入れる。

先刻の行列騒ぎとは、無縁の静けさが広がっていた。山門の向こうにさして長くない参道が続き、その向こうに本堂が見えている。先に来たはずのおのぶは、どこにも見あたらない。

「おのぶ？」

留以は山門をくぐって、参道をゆっくり進んだ。樫の木だろう、右手に大きな木があるため、陽が遮られている。

急に寒さを覚えたそのとき、

(だれかが後ろにいる)

背後に人の気配をとらえた。留以は右に逃げたが、相手はいち早く後ろにまわっている。するりと尻を撫でた。

「無礼な!」

振り向きざま、相手の手をひねりあげる。

「いたたた」

坊主が悲鳴をあげる。年は五十なかばぐらいだろうか。背の高さは留以とあまり変わらない。おのぶが本堂の陰から出て来た。

「やはり、そういうことでしたか。好色心を満たすための言い訳だったのですね。申し訳ありません、留以様。法庵和尚が留以様の腕を試したいと言われたものですから」

「法庵和尚」

留以が腕を放すと、和尚はさも痛そうに顔をしかめた。

「女子の割には、力が強いの。ああ、ああ、かような目で睨みつけるでない。ちと尻をさわっただけではないか。せっかくの美人が台無しじゃ」

怨めしげな目を向けつつ、腕をさすっている。隠居したもと仕事人と、源内からは聞いていた。もっと年寄りだと思っていたのだが、想像していたよりも若いことに、意外な思いと腹立ちを覚えている。俗世への未練がたっぷりな様子を見せつけられて、留以は不満をあらわにした。

「生臭坊主に、説教される覚えはありません」

つんと横を向いた。

「剣術小町は、噂どおりじゃのう。小野派一刀流の道場には、見物人がひきもきらず押し寄せていたとか。怒った顔もまた、たまらんわい」

「和尚」

おのぶが流石に窘める。ひとつ吐息をついて、下女は訊いた。

「丈吉の塒はわかったんですか。元締からの連絡によれば、配下に後を尾行けさせたとか。留以様はいてもたってもいられなくて、ここまで来たんですよ」

「尾行けさせはしたが、まだ連絡はこない」

和尚は答えて、本堂に足を向けた。

「尻をさわらせてくれた礼に、茶を一服、進ぜよう。いや、良い形の尻であったわ。着物の上からでも、掌に尻が吸いつくようじゃった。やわらこうて餅のような尻じゃ」

「……」

留以はもう一度、睨みつけたが、和尚は意に介していなかった。さっさと本堂に入って行く。

「お茶をいただきましょう」

宥め役のおのぶに、怒りを叩きつけた。

「尻、尻、尻と、尻と、四度も口にしました。わたしを馬鹿にしているのです」

「あれが和尚流の挨拶なんですよ。お気を悪くなさるかもしれませんが、初めて会ったとき、わたしもさわられました。さわらないのは、十歳までの童女だけだと、和尚は公言しています」

「だから得心しろと？」

「では、帰りますか」

問い返されて、留以は口ごもる。

「いえ、話だけは聞かないと」

「参りましょう」
歩き出したおのぶに、渋々、従った。俗世を捨てきれない生臭坊主に見えるが、意外にも本堂の床は綺麗に磨きあげられていた。小僧に茶の支度を頼みに行ったのか、和尚の姿は見えない。手焙りすらない本堂は冷えきっていた。
自ら茶を淹れたのか、
「貧乏寺ゆえ、下働きの者も雇えん」
盆を手にした和尚が戻って来た。
「見習いの小僧さんが、入ったと聞きましたが」
おのぶが盆を受け取って、留以の前に茶を置いた。和尚は自分で湯飲みを取り、腰をおろした。
「一昨日、使いに出たきりじゃ。消えてしもうたわい。真面目にご奉公すると言うていたが、逃げたのかもしれんの」
あっさりしていた。ずずっと茶を啜っている。白い湯気が本堂の冷えこみ具合を表すかのよう。留以も両手を湯飲み茶碗で温めながら、茶を喫んだ。
「仕事を頼みたいという人が来るお寺だと伺いました。奉公人を雇うときは、気をつけているのではないのですか」

問いかけに、和尚は唇をゆがめた。

「かようなことを言うていたら、奉公人なぞ、来てくれんわい。給金はないも同然、与えられるのは死なない程度の飯と寝床のみ。逃げ出すのも無理からぬことであろうさ」

「それで、和尚」

おのぶが割って入る。

「ここで開いた賭場に姿を見せたのは、本当に『もがりの猛蔵』の手下なんですか」

ちくりと皮肉をこめていた。寺で賭場など開くから、奉公人が居着かないんじゃありませんか。そんな表情をしていた。

「丈吉か」

和尚は頭を掻き、爪に挟まった雲脂をふぅっと吹き飛ばした。留以は座ったまま、素早く距離を取る。雲脂が茶に入りそうだった。

「賭場に来ていた他の盗人から、猛蔵の手下だと聞いた。あるいは粋がっているだけかもしれんがな。ああ、そうじゃ。猛蔵は大坂にいるらしいぞ。手下を京の公家屋敷に奉公させているとか」

「公家屋敷に奉公、ですか」
留以は意味がよくわからない。問いかけの眼差しに、おのぶが応えた。
「手下を公家屋敷に家隷として奉公させれば、その公家の絵符が手に入るではありませんか。おそらく猛蔵は、盗んで来た品物を運ぶときに、その絵符を用いるのではないかと思います。荷車に立てれば、関所や番所の調べをのがれられますからね」
「いかにも、おのぶの言うとおりよ。絵符さえあれば、荷を改められることはないからの。猛蔵の悪知恵か。はたまた後ろに黒幕がいるのか」
和尚の言葉に留以は驚きを覚えた。
「猛蔵は、だれかに命じられたのでしょうか。命じられて、わたしの家に押し入ったのでしょうか？」
自問のようになっていた。眼前の和尚が、はたして、留以の仇討ち話を知っているかどうか。それを訊ねることも忘れていた。
「さて、そこまではわからんが」
「おーい、なまくら坊主はいるか」
不意に外で大声が聞こえた。声に憶えがある。

「文士郎か」
和尚が立ちあがって、本堂の扉を開けた。

五

「なんじゃ、外の方が暖かいではないか。相変わらず、辛気くさい寺よ。来る度、災厄に見舞われるような気がするのは、おれだけか？」
岡田文士郎が入って来る。
「留以殿」
目を留めて、破顔した。
「いつもながらの美しさが、薄暗い本堂では、いっそう際立ちますな。負けたと思って、桜が早く散るやもしれませぬぞ」
年は二十五、六。先祖代々浪人暮らしという、妙な自己紹介をするのが常の男は、肩から大徳利を下げていた。
「そら、なまくら坊主」
投げるように渡した大徳利を、和尚は巧みに受け止めた。

「ありがたい、般若湯か。なれど、文士郎。そのなまくらは、やめてくれんかの。せめて、生臭にしてくれ」

「留以殿の前だからと言うて、格好をつけるでない。ぬしの『刀』はすでに役立たずゆえ、なまくら坊主よ。楽しみは酒と博奕だけであろう。自分が好きだから賭場を開いてしまうとはな。お釈迦様も真っ青だ」

「おぬしとて、人のことは言えんわ」

「まあ、確かに」

ははは と笑い合う二人を、おのぶが空咳で制した。

「今日は元締がおいでになるとばかり思っていました。桜狩がてら、船でのんびり膳を楽しもうと仰っていたのです。帰りは元締が送ってくださると思っておりましたが、いかがなされたのですか」

「それよ」

文士郎は和尚の湯飲みを奪い取って、茶の残りを飲んだ。それから「酒」とでも言うように、湯飲みを差し出した。

「自分のための酒かい」

文句を言いつつ、和尚が酒を注いだ。

「全部、飲むとは言うておらぬ」
文士郎は苦笑して、話を続ける。
「抱えていた仕事人がひとり、殺されたらしゅうてな。元締は桜狩どころじゃなくなったというわけさ。大慌てで手下に調べさせているらしい」
「まさか」
留以の不安を、文士郎は素早く受けた。
「お真佐ではない」
「そうですか」
答えた後で後悔の念が湧いた。知り合いではないから、いいという話ではない。一瞬、安堵した己に、小さな怒りを感じていた。
「刃傷騒ぎですか」
おのぶが代弁するように訊いた。
「それとも……仕事人だから狙われた、と？」
後者の問いかけには、恐れが漂っているように思えた。仕事人が標的だとすれば、留以とて無関心ではいられない。文士郎の答えを待っていた。
「それを今、調べているところだ」

さらりと言った。背筋が冷たくなるような話を、できるだけ明るく告げようとしたのかもしれない。

「ゆえに、おれが護衛役として、ここに遣わされた次第よ。元締が船を使わせてくれたのでな。帰りは八丁堀の近くまで送って行ける。もし、留以殿が望むのであれば、想い人の待つ出合茶屋に船を着けてもいいが」

あくまでも口調は軽かった。重要な話を省きたいという、無意識の気持ちが働いたのではないだろうか。

「猛蔵の手下は」

留以はごまかされない。

「どこにいるのですか」

鋭く問いかけた。

「丈吉か」

文士郎は、ふたたび苦笑する。かわしきれなかったか、というような顔をしていた。

「昨夜は深川の遊女屋に登楼ったとか。一昨日は品川の方まで足をのばしたとも聞いた。仲間と連絡を取り合っているのやもしれぬ。尾行けられるのを警戒している

のか、遊女になにか訊かれるのを懸念しているのか。同じ場所に泊まるのを避けているようだと、元締は言うていた」

「では、これからすぐに……」

腰を浮かせた留以を、文士郎は手で制した。

「待て。案内してもいいが、様子を見るだけだ。元締はしばらく泳がせておいた方がいいと考えている。おれも同じ考えだ」

下手な動きはせぬがよし、逃げられてしまったら元の木阿弥ではないか。ましてや丈吉が本当に猛蔵の手下であるか、断定できない以上、ここは様子を見るのが得策と、文士郎や源内は考えている。

「猛蔵は、また江戸で盗み働きをするつもりなのでしょうか」

考えながらの言葉になっていた。源内は丈吉の動きを見て、なにかしら感じているようだ。手下を江戸に送りこみ、仲間と連絡を取り合うのはすなわち、江戸での盗み働きを画策しているからではないのか。

そのため、しばらく泳がせておこうという提案が出たのだろうと、留以は読んでいた。

「ありうるやもしれぬ」

文士郎は頷き、目をあげる。
「つかぬことを訊くが、留以殿。二親を殺められた騒ぎから」
問いかけを遮るように告げた。
「年が明けて、十一年目を迎えました」
長いような短いような時だった。もう猛蔵は江戸に出て来ないのではないか。もしかすると、死んでしまったのではないか。この手で仇を討つのは、かなわぬ夢なのか。
絶望と苛立ちに襲われながらの十一年だった。
「考えてみれば、今まで猛蔵が江戸に出て来なんだのも奇妙な話よ」
和尚が独り言のように呟いた。どうやら仔細は源内が伝えていたようである。留以に視線を向けた。
「そうは思わぬか、ええ、留以殿。でかい盗みをするなら、やはり、江戸が一番じゃ。大店が軒を連ねておるからの。まあ、大坂も賑やかじゃが、小判の動きを考えれば、江戸にはかなうまい。なにゆえ、十一年もの間、近づかなんだのか」
確かに江戸には美味しい餌がある。にもかかわらず、猛蔵は敢えて長いときを置いた。ほとぼりが冷めるのを待っていたのだろうが、それにしてもいささか長すぎ

るのではないか。盗み働きを江戸以外の地に留めていた理由は、なんだろうか。

「だれかに命じられたのでしょうか。江戸には近づいてはならぬ、せめて十年は上方にいろ、と」

留以の呟きもまた自問のようになっていた。

「ありうることかもしれませんね。仮にそう命じたのだとすれば、相当な相手ではないでしょうか。『もがりの猛蔵』はいまや大盗人。恐れる相手は、さほど多くないように思えますから」

おのぶは言い、答えをゆだねるように文士郎を見た。

「おれは盗人の話に明るくない。おのぶたちの方が詳しかろう」

「いえ、元締から、なにかお聞きになっているのではないかと思ったんですよ。わたしたちも和尚と同じく今ではもと仕事人。入って来る話は、瓦版に毛が生えた程度のものです。盗人の動きまでは、とてもわかりませんから」

「そのあたりの論議は、さておきだ」

と、文士郎は留以に視線を戻した。

「いかがなさるか、留以殿。丈吉のもとに案内するのはお安い御用だが、はたして、冷静でいられるかどうか。ただ見るだけというのも、なかなか難儀なことやもしれ

ぬ」
「すでに場所を移しているかもしれません。留以様は目立ちますからね。定町廻り同心のご妻女が、遊女屋の近くをうろつくのは、あまりよいことではないと存じます」
おのぶが遠慮がちに口を挟んだ。できれば行かない方がいいと思っているに違いない。不安げな顔をしていた。
「行きます」
留以は告げた。
「おのぶと岡田様がいてくだされば大丈夫です」
「丈吉が遊女屋を出ていたときには、すぐに帰りますね」
おのぶが確かめるように訊いた。源内の手下が尾行けているだろうが、その連絡を待つことまではできないと、暗にほのめかしている。姑の許しを得られたのは二日間だけ。遅くとも明朝までには戻らなければならない。
「帰ります」
「よし。では行くか」
文士郎は、湯飲みの酒を一気に空けて、言った。

「元締から小芝居の脚本を預かって来た。先々のことを考えているんだろう、留以殿が丈吉に近づくための芝居よ。元締の考えどおり、今から仕込みをしておいた方がいい。題をつけるとしたら、そうよな。『剣術小町鬼退治』といったところか」

仇討ちのための仕込みと聞いただけでも、武者震いが走る。『もがりの猛蔵』を討つための第一歩となるかどうか。

「参りましょうか」

留以は、文士郎から源内の脚本を受け取った。

六

深川一色町は、茜色に染まっていた。

一色町の南裏通りから伊沢町、松村町にかけての一円は、かつて漁師が網を打っていたために、網打場と俗称されている。永代橋の東に位置しているが、岡場所がある割にはひっそりしている場所だった。人目を気にする者にとっては、格好の遊び場といえるかもしれない。

ひとりの男が、一軒の遊女屋から出て来た。着物の襟をすっと手でしごき、注意

深く周囲に目を走らせている。

「丈吉です」

見張り役の男――音八が囁いた。源内の子飼いである。留以は江戸褄の芸者姿をして、三味線を抱えていた。緑橋の近くに出ている蕎麦屋の屋台のそばに佇んでいた。少し離れた場所に、おのぶと文士郎が立っている。

事前に音八と話をして、段取りを整えていた。

「なんだと、この女。金を返せだと？」

いきなり音八が怒鳴り声をあげた。芝居であるのは言うまでもない。留以も負けじと声を張りあげる。

「ええ、返してくださいな。ここに証文もあるじゃないですか。どうしてもと頼まれたから、二朱、用立ててあげたんですよ。あれは貸しただけで、あげたわけじゃありませんからね」

「ふざけやがって」

音八は持っていた丼を地面に叩きつけた。丈吉は足を止めている。美貌の芸者と男の喧嘩に気を取られているようだった。なにも知らない蕎麦屋は、素早く片付けて逃げる準備をしていた。

「あれは礼金じゃなかったのかい、ええ、そう言ったのは姐さんだぜ。色々迷惑をかけたからと、確かにおれは聞いた、この耳でな」

耳を示したその腕を、留以は軽く叩いた。

「耳が腐ってんじゃないのかい。自分の都合のいいように、聞こえる耳なんだろうさ。あたしは貸したんだよ、二朱はあんたに貸したお金なの。利子をつけないだけ、ありがたいと思いな」

蓮っ葉な口調も筋書きどおり。貸したのところで強調するように声を大きくした。

音八はさっと頬を引き攣らせる。

「不見転芸者が、生意気な口聞きやがって」

「あんたに不見転呼ばわりされたかないね。あたしは簡単には転ばない芸者なのさ。あんたに言い寄られたときも、ははーん、そうか」

留以は顎をあげて、皮肉な笑みを滲ませた。

「あたしに振られた意趣返しってわけ。尻の穴の小さい男だねえ、呆れちまうよ。たかだか二朱ぽっちを返せないなんてさ」

「は。てめえだって、その二朱ぽっちにこだわっているじゃねえか。おれのこたぁ言えねえやな」

「言い訳する前に、ほら」
留以は手を広げて、音八の胸元に突き出した。
「返しなよ、二朱、ここに載せておくれな。二朱ぽっちも出せないのかい。本当になさけない男だね」
「てめえ」
と、音八は右拳を振りあげた。身振りがいささか大仰すぎたかもしれない。さあ摑んでくださいと言わんばかりの形になったが、
「やめときな」
丈吉が音八の腕を摑んだ。
「ちょいと小耳に挟んだんだがよ。おまえさんが姐さんから二朱、用立ててもらったのは間違いねえようだ」
留以が広げた証文を見て、さらに告げる。
「ここは引きあげた方がよくねえかい。姐さんがお奉行様に『おそれながら』と訴えれば、おまえさんはお縄にかかる。怒りにまかせてこの拳を使うと、よけい厄介なことに……」
「うるせえ」

音八は荒々しく手を振り払った。

「今日のところは引きあげてやる。だがよ、小糸。次はなにをするかわからないぜ。うるさく言うのは、やめるこった」

乱れた袖を直しながら、音八は夕闇の中に消えた。おのぶと文士郎も目立たない場所に移っているのだろう、姿が見えなくなっている。

「助かりましたよ。おまえさんがいなければ、殴られちまうとこでした」

礼を言う留以の顔に、丈吉は食い入るような眼差しを注いでいた。少しの間、軽く口を開けたままだった。

「失礼ですが、お名前は？」

極上の微笑みを向けると、丈吉はごくりと唾を呑んだ。

「丈吉だ。いや、別嬪だねえ、姐さんは。思わず見惚れちまったぜ。桜を象った銀の簪がまたよく似合ってら。たかだか二朱ぽっちで、あれこれ言うやつの気がしれねえや。まさかとは思うがよ。狐狸妖怪の類じゃねえだろうな」

半分、本気のような問いかけを発した。年は二十七、八。特に色男ではないが、髭や月代を綺麗に剃って、こざっぱりしていた。喧嘩の傷なのか、下唇の右に小さな傷痕が残っている。

「狐に見えますか」
留以は言い、にこやかに誘った。
「お礼に一杯、いかが？」
お猪口を傾ける仕草にもまた、丈吉は目が釘づけになっている。
「ありがてえ。お近づきになりてえと思っていたのさ」
「この近くに魚の美味しい見世があるんですよ。値段の割にいいお酒も置いてあるんです。お口に合うかどうかわかりませんけれど」
留以は先に立って歩き出した。すぐ近くの見世は、文士郎が教えてくれた居酒屋。留以は暖簾をくぐって、中に入る。
すでにおのぶと文士郎が、見世の片隅に陣取っていた。理由ありふうな中年女と、浪人の組み合わせは、いささか不釣り合いな気がしなくもない。しかし、留以は目を向けないようにしていた。
「お酒をお願いします。あと適当に肴も見繕ってくださいな」
酒樽に腰をおろすや、
「名は小糸だったな」
確かめるように丈吉が訊いた。

「ええ。常盤町の〈藤乃家〉さんの、お世話になっているんです。上州から流れて来たばかりなんですよ。田舎じゃ稼ぎが悪すぎて」

留以は作り話を口にする。むろん源内の筋書きにある話だった。〈藤乃家〉は、元締の知り合いの女将が営む置屋であり、留以はそこに行って衣裳一式を借りていた。遊び人を気取っているに違いない丈吉は、見かけない顔の美人芸者に疑問をいだくかもしれない。それを懸念するがゆえの筋書きになっていた。

「なるほど。出て来たばかりかい。どうりで見たことのねえ顔だと思ったぜ。いや、姐さんほどの別嬪ならよ。擦れ違うだけでも、ここに残るからな」

と、丈吉は自分の頭を指した。予想どおりの流れだったが、留以は気をぬかない。運ばれて来た銚子を取って、お猪口を丈吉の前に置いた。

「ささ、おひとつ、熱いのをどうぞ。まだ冷えますからね」

「花冷えだな」

ぐびりと飲み、目を細める。

「旨い。五臓六腑に染みわたるぜ。別嬪の酌だと酒の味が変わる。いや、ほんとだ、姐さん。世辞じゃねえ」

早口で言い添えた丈吉に、留以はまた微笑みかけた。

「丈吉さんの在所は、どちらなんですか」
酌をしながら問いかける。意識して『もがりの猛蔵』のことは思い浮かべないようにしていた。昔の場面を思い出したとたん、抑えがきかなくなりそうで恐い。
「おれは奥州の出よ。雪の多いところでな。春が待ち遠しくてならなかったぜ。桜の花が長い冬の終わりを告げる合図よ。だから今でも桜を見ると、なんだか、こう、浮きうきした気分になる」
「あたしも桜は好きですよ。特に枝垂れ桜が、いいですねえ」
ふと薬研堀の枝垂れ桜が浮かんだ。
「お。なにか思い出でもあるのかい」
すかさず丈吉が問いかける。微妙な表情の変化を読んだに違いない。留以はどきりとしたが、顔には出さなかった。やはり油断できない相手だと、気持ちをいっそう引き締める。
「いえ、枝垂れ桜が好きなだけです。桜はどれも華やかですけどね。枝垂れ桜は小さな滝のように見えるじゃありませんか。豪華絢爛という感じがして、目を惹かれるんですよ」
それで、と、留以は話を変えた。

「丈吉さんは、なにをしているんですか」
慎重に言葉を選んでいる。焦りは禁物と言い聞かせた。時をかけて話を聞き出すのが肝要。そう遠くない明日に、猛蔵を討つための大事な仕込みだ。不審をいだかれた時点で、丈吉はなにも話さなくなる。
「さあてな」
答えて、丈吉は顔を近づけた。
「なにをやっているように見える？」
「職人さんじゃないんですか。大工とか、鳶職。そう、粋な感じがしますもの。任侠気もありますしね」
心にもない世辞だったが、
「いい読みをするじゃねえか」
丈吉は満足げに目を細めた。嬉しいときに出る癖なのかもしれない。目が小さいわけではないのに、糸のような目になる。あるいは表情が読みにくくなるのを考えてのことだろうか。
そうだとすれば、かなりの曲者だった。
「あら、もう空じゃないですか」

留以はあらたに酒を注文する。
逸る心を抑えながらの接待が続いていた。

第三章　土竜（もぐら）

一

『もがりの猛蔵』の手下と思（おぼ）しき男――丈吉は、楊枝（ようじ）を作る職人という話だったが、あくまでも自称であるため、真偽（しんぎ）のほどはわからない。

年は二十六で独り者。奥州の出身だが、しばらく上方で暮らしていた。江戸の女が恋しくなったので戻って来た。そろそろ身を固めようかと思っている。住まいは深川北森下町（きたもりしたちょう）あたりの裏店（うらだな）を借りるつもりだ。

などなど、聞き出せたのは、さして重要ではない話ばかり。本当に塒を深川に決めたのか、それさえもわからなかった。

二日後の朝。

「ひどい有様ですね」

留以は野村家の畑を見て、眉を寄せた。南側にもうけた畑は、ところどころ土が盛りあがっている。大根はすでに収穫していたので被害を免れたが、畑に残っていた青菜は土にまみれていた。

「土竜でしょう。暖かくなった証ですよ」

おのぶは青菜の土を丁寧に払って、籠に入れている。姑と小姑は朝餉の後、土竜退治を命じて、同役の家に出かけていた。近々、その家で執り行われる法事の打ち合わせと言っていたが、別に嫁女の悪態大会でもかまわない。出かけてくれた方が気は楽だった。

「土竜は蚯蚓や虫が大好物。生きるために必死なのでしょうが、畑を荒らされるのは困りますね」

留以も屈みこんで、おのぶを手伝った。

「義母上様は簡単に土竜退治と仰っていましたが、それができるのであれば、とうの昔に土竜の被害はなくなっているでしょう。退治できないまでも、畑に入らせないようにする策はないものでしょうか」

姑の希与は野菜を買う金子さえ出し惜しみする。足りない分は買うしかないのだ

が、それだけに畑で採れる作物は貴重だった。多めに採れた大根は、切り干し大根にしたり、輪切りにしたものを干しておいた。これらは煮物や味噌汁の具に利用している。青菜も干すが日保ちしないため、植えたままにしておいたのが仇となっていた。

「畑のまわりを板で囲えば」

弥太郎がぼそっと言った。鍬で土を鋤きこんでいたのだが、その手を止めて、小さな畑を見まわしている。

「板で囲うのですか？」

留以はぴんとこない。

「一尺（三十センチ）ぐらいの幅の板を、ぐるりと畑のまわりに植えこむんですよ。土竜は土の中を潜って畑に来ますからね。まわりに板を植えこんでおけば、近づけないじゃありませんか。近藤家の畑には、それをしてあります」

おのぶの言葉に、「なるほど」と頷いた。

「確かに土竜が近づけなくなりますね。なぜ、もっと早く教えてくれなかったのですか」

つい怨めしげな口調になったが、口にしたとたん、自ら理由を悟っていた。

「板を買うにも金子が要りますね」

吐息まじりの呟きが出る。弥太郎夫婦は遠慮して言い出せなかったのだろう。二人にそんな気遣いをさせてしまうのが腹立たしかった。女主としては、なさけないことこのうえない。

「薪を並べて植えるのも効果があります」

弥太郎の提案に、おのぶが疑問を返した。

「でも、すぐに腐ってしまいますよ。薪用の木と板では、丈夫さが違いますからね。それに薪も無料じゃありませんから」

その場しのぎの仕事は、長い目で見たとき、損になりかねない。どうせ金子と手間をかけるなら、きちんとやった方がいいのではないか。おのぶが敢えて口にしなかった部分を、留以は心の中で嚙みしめていた。

「〈山崎屋〉に出入りしている大工の棟梁に話せば、板を分けてもらえるかもしれません。朋江に頼んでみましょう」

妹をあてにしたくはなかったが、背に腹は代えられない。土竜に畑を荒らされると、野菜が駄目になる。野菜が駄目になれば、よけいな金子がかかるうえ、希与の厭味も増える。希与の厭味をこれ以上、増やさないためにも、なにか策を講じなけ

ればならなかった。

「ちょうどよいではないですか。朋江様から桜狩のお誘いを受けていましたよね」

おのぶの問いかけに、小声で答えた。

「ええ。昨日、使いの者は、かように言伝いたしました。長命寺にお詣りがてら、大川の桜を眺めませんかと。大川端の桜は満開ですから」

気乗りしない様子を察したに違いない。

「お出かけにならないのですか」

おのぶは囁き声で訊ねる。

「義母上様たちが一緒では、のんびり桜狩など楽しめませんよ。わたしは荷物持ちに使われるだけですからね。それに」

留以は言葉を止めて、立ちあがった。採り終えた青菜を、おのぶが持っていた籠に入れて、畑から退いた。それを待っていた弥太郎が、鍬で土を掘り始める。まめやかな下男は、夏野菜の種を仕入れて、小さな苗に育てていた。今日はその苗を植えるつもりなのかもしれない。鍬を振るう腕に力がこもっていた。

「それに、なんですか。途中でやめないでください。気になって仕方がありませんよ」

おのぶに促されて、告げた。
「繰り返しになるので言わなかったのですよ。相変わらず、だれかに見られているような気がするのです。路地に出て掃除をしているときや、近くまで用足しに出たときなどに、『目』を感じるのです。はっとして振り向くのですが」
「だれの姿もない」
おのぶが継いだ。
「ええ」
「留以様の今の状態は、仕事人のほとんどが、一度は通る道だと思います。この間も申しましたが、わたしと亭主にもありました。仕事をだれかに見られたんじゃないか、仕事人だと気づかれてしまったんじゃないか。気になりだすと、いてもたってもいられなくなるんですよ。でも、大丈夫でした。考えすぎていただけなんです」
おのぶは顔を近づけて、耳もとに囁いた。
「恐いと思ったときが退け時ですよ。しくじる前に辞めた方がいいと思います」
「恐くなったわけでは……」
「そうですか？」

素早く遮って、問いかけの眼差しを向けた。言い訳じゃないんですか。落ち着かない様子や、姿のないだれかに怯えるさまは、恐れているようにしか見えませんよ。無理をしないで辞める道もあるんじゃないでしょうか。

言葉にされなかった部分は、以心伝心、読み取っていた。

「猛蔵の手下らしき者が、姿を見せたのですよ。ここで退くわけにはいきません。ようやく手がかりをつかめるかもしれないのに」

「それならば肚をくくってください。留以様には、覚悟が足りないのです。旦那様への想いが、足枷になっているんじゃありませんか。平らかな暮らしを失いたくないと思うあまり……」

「おのぶ」

弥太郎が錆びた声を発した。おのぶを窘めていた。

「申し訳ありません。言葉が過ぎました」

「いいえ。おのぶの言うとおりかもしれません」

答えて、留以は竹箒を手に取る。

「路地の掃除をしてきます」

裏木戸から路地に出た。桜の開花とともに、風もだいぶ春めいてきたが、それで

もまだ暖かいとまでは言えない。吹き荒ぶ風の冷たさに思わず身震いした。
「おお、寒い」
とたんにだれかの『目』を感じた。ねっとりと絡みつくような視線には憶えがある。振り向くと、向かいの家の裏木戸に本庄沙苗がいた。
「おはようございます、留以様」
竹箒を持ち、路地に出て来る。
「おはようございます」
留以は会釈して、路地を掃き始めた。沙苗の視線はすぐにわかる。留以が不安を覚えているのは、向かいの嫁女の『目』ではない。もっとも沙苗に仕事を見られたのであれば話は別だが……。
「民子様のおかげんはいかがですか」
恒例となっている朝の問いかけを投げた。
「落ち着いております。昨日はお見舞いいただきまして、ありがとうございました。そのお陰でしょうか。昨夜は咳や熱が出ませんでした。今朝は食も進み、顔色もよくなっております」
「それはなによりです。またお見舞いさせていただきますので」

「はい」
沙苗は物言いたげな様子を見せたが、留以は素知らぬ顔をする。いちいち相手にしていたら、きりがない。早く掃除を済ませて家に戻ろうとしたが、
「あの、留以様」
いち早く切り出された。
(遅かった)
後悔しつつ、問い返している。
「なんでしょうか」
「わたくし、見たんです」
「え?」
思わず沙苗を見たが、何日か前と同じ言葉であることに気づいた。中川周平の話を蒸し返して、また昏い愉しみに浸るつもりなのだろうか。
(ほんに根性曲がりだこと)
無視して家に戻りたかったが、こらえる。
「なんのことでしょうか」
作り笑いで促した。

「昨日の夕方です。男が裏木戸から野村様の家を覗いていたのですよ。侍でしたが、袴はだいぶ汚れているように見えました。浪人かもしれません」

「……」

思わず言葉を失っていた。やはり、仕事を見られたのではないか。浪人姿の侍こそが、あのときの目撃者。気のせいではなかったのか。男は留以の知辺を探っているのではないか。夫が南町奉行所の定町廻り同心だとわかったら……。

（落ち着いて）

自分に言い聞かせる。

「顔はご覧になりましたか」

平静を装って、問いかけた。

「いえ、後ろ姿だけです。なんだか薄気味悪かったものですから、わたくしはすぐ家に入りましたので、人相や年まではわかりません。背丈は、そうですね。これぐらいだったかもしれません」

手をあげて、自分より三寸（九センチ）ほど高いと示した。

「そうですか。もし、またその男を見かけましたときには、そっと知らせていただけるでしょうか。あとを尾行けて素性を確かめますので」

「かようなことを言われましても」
沙苗は二の足を踏んだ。告げ口や、野村家を盗み見るのは日常茶飯事だが、関わり合いにはなりたくないのだろう。かなり露骨にいやな顔をしていた。
「つまらないことを申しました」
留以は非礼を詫びる。
「一日中、我が家を見張っていることなど、できませんものね。すぐには浮かびませんが、なにか策を考えます」
「お願いいたします」
そそくさと裏木戸から家に戻る。よほど慌てたのか、ろくに掃除をしていなかった。留以の不幸は見たいが、己の幸せは守りたい。そんなところだろうか。
「大丈夫でございますか」
いつの間にか、おのぶが裏木戸のところに来ていた。
「遅いので、いかがなされたのかと思いましたよ」
「なんでもありません。沙苗様に民子様の様子を伺うていただけです」
「土左衛門だとよ」
不意に通りの方から、男の大声がひびいた。

「永代橋の西詰に、土左衛門があがったとさ」
留以は、おのぶと顔を見合わせる。その間も男は「土左衛門だ、土左衛門だ」と叫びながら、路地を走りぬけて行った。膨れあがった土左衛門を見たいわけではなかったが、平左衛門に嫁して以来、市井の騒ぎを見過ごせなくなっている。
留以は男を追いかけていた。

二

永代橋の西詰には、人だかりができていた。
「飛びこんだばかりじゃないのか」
「そうかもしれねえや。綺麗な仏さんだ」
「子供もいるじゃないの」
「痛ましいねえ」
野次馬に無理やり割りこんで、留以は前に出た。後ろにはおのぶも付いている。芥止めに引っかかったのかもしれない。三体の亡骸が筵に並べられていた。男と女がひとりずつ、そして、もうひとりは二歳ぐらいの幼子だった。

「親子かもしれねえな」
隣の男が言った。
「離ればなれになりたくなかったんだろう、そら、縄でしっかり互いの身体を結んでいるじゃねえか」
「ええ。母御はお子を抱きしめています」
と、留以は亡骸にもう一度、目を向ける。
「本庄様ですよ」
おのぶが囁いた。亡骸を改めているのは、向かいの家の主、本庄美之助だった。向こうも留以に気づき、目顔で挨拶する。留以も会釈を返した。
「お侍じゃねえのか」
「そうだよ。お侍だよ」
「また心中かね」
野次馬たちは、口々に囁き合っている。それをうるさく感じたのか、美之助は亡骸に筵を掛けるよう指図した。それでもまだ御新造の着物が、筵から覗いている。
「お侍」
呟いた留以の袖を、おのぶが引っ張った。

「留以様。御新造が着ているあの着物、桜を意匠にした小紋の着物です。見憶えはありませんか。あたしは、なんとなく見たような気がするんですよ。どこで見たのかまでは、思い出せませんけれど」

「そういえば」

言われてみれば確かに憶えがある。桜を意匠にした桜色の小紋は、まるで今を盛りと咲く桜のよう。濡れて少し色が変わっていたが、留以はかつてだれかに、こう告げたのを思い出していた。

「この季節にぴったりの小紋ですね」

嚙みしめるように言い、「あっ」と思った。

「小林様の」

「そう、そうですよ」

おのぶが同意する。番町の近藤家の近所に住んでいた小林家。小納戸方の御役を賜っていた家の嫁女が、似たような桜色の小紋を持っていた。嫁入り道具のひとつだったのかもしれない。春になると必ず着ていた小紋によく似ていた。

「朋江が言うていました。小林様のご一家は、夜逃げしたらしいと」

雛祭りのとき、朋江が言っていた話も甦っている。留以はおのぶと顔を見合わせ

た後、

「本庄様」

美之助のもとに行った。

「もしかすると、わたくしの知り合いやもしれませぬ。お顔を改めさせていただいても宜しいでしょうか」

「まことでござるか」

美之助は答えて、手下に合図を送る。年は平左衛門と同い年の二十六。背丈は八木沢兵庫よりも低いが、美丈夫ぶりでは負けていない。南町の伊達男として、兵庫ともども名を知られていた。

「ご覧くだされ」

野次馬たちを遠ざけさせたうえで、美之助は、亡骸に掛けていた筵を十手であげた。こういうとき、美之助はいつも亡骸に手ではふれまいとする。役人独特の傲慢さを見る思いだったが、よけいなことは口にしない。

慎重に亡骸の顔を確かめた。野次馬のひとりが言っていたように、膨れあがるような姿にはなっていない。顔や唇の色は流石に変化していたが、記憶から小林家の跡継ぎを引き出すのに時はかからなかった。

「小林新右衛門様だと思います」
留以は告げた。
「わたくしの実家がある番町の家の近くに、住んでいたご一家です。小納戸役を務めておられました。行方知れずになったらしいと聞き、気にかけていたのですが」
夜逃げ云々は敢えて口にしなかった。
「お子がもうひとり、おいでになったのではありませんか」
おのぶの言葉に、留以は頷いた。
「ええ。姉の子と同い年の男児がいるはずです。今年、五歳になるお子の姿が、見あたりません」
「まさか」
美之助の顔色が変わる。
「ええ。もしかすると、繋いでいた縄が外れたのかもしれません。他の場所に流れついているかも、いえ、ご夫婦が不憫に思い、だれかに預けたのかもしれませんね」
留以も慌てた。
「本庄様。とりあえず大川端を探してくださいませ」

その頼み事が終わる前に、野次馬たちが走り出していた。
「こうしちゃいられねえ」
「探せ」
「五歳の男の子だとよ」
あっという間に散っている。野次馬のひとりひとりが、もしやという望みをいだいたのではないだろうか。
五歳のその子は、生きているかもしれない。いや、生きていてほしい、と。
土埃(つちぼこり)をあげながら、右に左に散って行く人々を、驚きの目で追いかけている男がいた。供を連れた侍の顔を見て、留以は思わず声をあげる。
「義父上ではありませんか」
近藤時之助が、こちらに来た。美之助は姿勢をただして辞儀をする。時之助も辞儀を返して、言った。
「ちと御用の筋で本所や深川界隈をまわっていたのじゃ。留以の家に立ち寄ってみようと思いたっての。永代橋を渡って来た次第よ」
人だかりを見て近寄ったところ、野次馬がいきなり動き始めた。そんなところだったのではないだろうか。

「小林殿、か？」
と、時之助は屈みこむ。
「はい。御新造のお着物に見憶えがあったので、亡骸を改めさせていただいたのです」
留以は義父に念のための問いかけを発した。
「小林様に間違いありませんか」
「うむ」
時之助は答えた。
「姿を消してしもうたのでな。配下に行方を探させていたのだが」
少しの間、手を合わせていた。目付は旗本の監視役も務めている。本所や深川界隈の用件が、どんなものなのかはわからないが、それとなく小林一家の行方も調べていたのかもしれない。
「もうひとりのお子が、見あたらないのです」
留以の訴えに、時之助はいっそう深く眉を寄せた。
「そうであった。小林家には、二人の男児がいたな」
「今、付近を探させております」

美之助が継ぎ、躊躇いがちの目を向ける。
「近くの番屋にお運びいたしまするか」
とりあえず近くの番屋に運ぶべきか、あるいは番町近くの大番屋か、それとも真っ直ぐ番町の家に運ぶべきか。悩みながらの問いかけに思えた。留以や時之助の言葉から、小林家にはいささか複雑な事情があることを、美之助は察したのだろう。これまた八木沢兵庫に列ぶ能吏ぶりを示した。
「近くの番屋にお運びいただきたい」
時之助の返事で、美之助はすぐさま手下に命じた。桜の小紋が死に装束となった母親の、腕に抱きしめられた幼子は、眠っているような顔をしていた。

三

検視役人が来るまでの間、留以と時之助は、亡骸の付き添い役を引き受けることになった。薄暗い番屋は、さむざむとしている。外はだいぶ暖かくなってきたのだが、春催いとは無縁の静寂と冷たさに覆われていた。
「五歳のお子だけでも、無事であればよいのですが」

留以は板の間の上がり框に腰かけて、風で戸が鳴る度に目を向けている。吉報が届くのを待っていた。

「いや」

時之助はなにか言いかけて、やめた。留以の隣に座り、出涸らしの茶を啜っている。義父の声なき声が聞こえたように思えた。

〝二親がいない今となっては、生き残るのもまた地獄やもしれぬ〟

そんなことを思ったのではないだろうか。

「小林様たちは、番町の家には戻れないのですか」

留以は訊いた。おのぶは五歳の男児探しに加わっているため、番屋にいるのは、二人だけだった。もちろん戸の外には、時之助の供をして来た下男や、美之助の手下が立っている。ふだんは同心もいるのだろうが、今は総出で男児の捜索にあたっていた。

「むずかしいやもしれぬが」

時之助は含みを残した。夜逃げしたうえの一家心中は、幕臣としてあるまじき行い。公儀は心中をきつく禁止している。番町の家で葬儀をあげるのなど以ての外。そういった事柄を知り尽くしたうえの話になっていた。

「葬儀は無理やもしれぬが、家に一度、戻るぐらいはできるやもしれぬ」
義父の呟きに縋りついた。
「是非、是非、お願いいたします、義父上。もしかすると、生き残ったお子が戻って来るかもしれません」
言った後で気づいた。
「そうです。家に戻って来るかもしれません。姉上に知らせなければ」
腰を浮かせた留以に、時之助は告げる。
「案ずるでない。すでに使いを出した」
「そうですか」
留以はなんとなく落ち着かない。
「わたしも探しに……」
「座っておれ」
義父に優しく肩を押さえられた。
「は、い」
「文を読んだ」
切り出されて、どきりとする。姉に託した文には、十一年前の騒ぎの折、留以が

『もがりの猛蔵』を見たことを記しておいた。この話が出るのを、留以は心のどこかで畏れていたのかもしれない。

知らせたかったような、知らせたくなかったような、複雑な思いが湧いていた。

「『もがりの猛蔵』の話は、わしも耳にしたことがある。近々、火付盗賊改方に話を聞いてみるつもりじゃ」

ひと息、ついて、時之助は続けた。

「わしが小十郎の仇を討つ」

一語一語、区切った言葉には、力と決意がみなぎっている。時之助と父、天城小十郎は竹馬の友。酒が入ると決まって、母の安江を奪い合った話が出た。実子を授からなかった時之助は、三姉妹を我が子のように慈しんでくれる。

「義父上」

「ゆえに留以は手を出すでない、女子の身でつまらぬことを考えてはならぬ。よいな」

続いて出た言葉に、一瞬、首を振ろうとしたが、

「はい」

留以は頷いた。時之助に仕事人の話をするつもりはない。

「なれど、義父上。猛蔵の居所がわかったときには、教えてくださいますね。平左衛門様には、仇が猛蔵であることをまだお話ししていませんが、居所がわかったときにはお話しするつもりでおりますので」

「野村殿にもまだ言うておらなんだのか」

時之助は意外そうな表情をした。

「話せば……御役目に支障が出るかもしれません」

俯いて答えた。平左衛門は留以を想うあまり、猛蔵の探索だけに集中してしまう懸念がある。それを慮って、隠し部屋から猛蔵を見た話は教えていなかった。

「ありうることよ」

義父は、にやにやしていた。能吏と謳われる義父は、説明するまでもなく、留以の気遣いを読み取っている。

「それだけ仲がよいというに、子が授からぬのは不思議じゃ。仲がよすぎるのやもしれぬな。あるいは」

と、囁いた。

「邪魔が多すぎて子作りするどころではないか」

姑と小姑を指しているのはあきらか。

「かようなときに、なにを仰せになるかと思えば」
留以は言った。窘めるような口調になっていた。眼前の土間には、筵を掛けられた親子三人の亡骸がある。
時之助も口が過ぎたと思ったのだろう、
「すまぬ」
詫びて、また手を合わせた。
「それはそうと、義父上。両国橋で襲われた黒崎様の騒ぎは、いかような流れになっているのですか」
さりげなく話を変える。手助けしたひとりとしては、無視できない騒ぎだった。が、旗本の騒ぎであるため、夫からは話が入ってこないのである。
「調べておるところよ」
時之助は多くを語らなかった。殺された黒崎半九郎は、幕府評定所の役人だったが、吟味物調役として、寺社奉行のもとに遣わされた。いささか特殊なご奉公といえる。寺社奉行を担うのは大名家の一家。大名の監視役を務めるのは大目付といった事情も、調べをむずかしくしているのかもしれなかった。
「もしや、今日、本所や深川においでになられたのも……」

戸の外に動きを感じて、留以は言葉を切る。すぐに戸が開いた。
「留以」
平左衛門が姿を見せる。
「噂をすればじゃ」
時之助が、にやりと笑った。
「おやめください、義父上」
「義父上もおいでござりましたか」
平左衛門は緊張した様子で畏まる。一礼して、続けた。
「見廻りの途中で話を聞いてな。駆けつけた次第よ。お子がひとり、見つかっておらぬとか。すぐそこで、おのぶに会うたが」
と、小さく首を振る。桜が咲く時期とはいえ、大川の水はまだ冷たい。五歳の子が生きている可能性は、きわめて低かった。
「これもおのぶに聞いたのでござるが、義父上のお近くに住む御旗本である由」
平左衛門の問いかけに、時之助は答えた。
「さよう。いささか事情がござるゆえ、近くの番屋に運んだ次第」
「義父上は御用の筋で永代橋を通りかかったとか。ちょうど、わたしがそこに居合

わせまして」

時之助が、なぜ、ここにいるのか。留以はいたって簡潔な説明しかしなかったが、流石にそれを訊くのは憚られると思ったのだろう。

「さようでござりましたか」

平左衛門は、よけいなことは訊かなかった。与太郎同心だの、女房自慢しかできない男だのと言われるが、留以は能ある鷹だと信じている。

「わたしもお子の探索に加わろうと思います」

立ちあがったとき、

「旦那、見つかりました」

英次が飛びこんで来た。平左衛門が使う小者のひとりである。

「無事だったのですか」

留以は問いかけたが、英次が答える前に、外が騒がしくなっていた。平左衛門のもうひとりの小者、辰蔵が男児を抱えて入って来た。濡れた身体に巻きつけられているのは、おそらく辰蔵の羽織に違いない。瀕死の状態かと思いきや、男児は辰蔵の腕の中で大きな目をみひらいていた。

「こちらへ」

留以は板の間にあがって、懐から手拭(てぬぐ)いを出した。いち早く板の間にあがっていた時之助は、火鉢に載せてあった鉄瓶(てつびん)から湯飲みに湯を注いだ。立ちのぼる白い湯気が、番屋の寒さを物語っている。

「おのぶ」

入り口に顔を覗かせた下女に留以は命じた。

「替えの浴衣(ゆかた)を早く」

「畏まりました」

「手拭いもお願いします」

おのぶの背に声をかけ、留以は男児の着物と羽織を脱がせ始める。母親も晴れ着姿だったが、息子もそうであるように見えた。少なくとも着古したものではない。花見に行くと言って子らを連れ出したのだろうか。

(晴れ着姿で心中とは)

慰(なぐさ)めの言葉が見つからない。男児をただ抱きしめる。できることなら忘れてほしいと、祈りをこめて抱きしめた。

頻発(ひんぱつ)する心中騒ぎ。

江戸の町は、重い空気に覆われていた。

四

男児の名は、小林隼太（はやた）。

留以は二親を亡くしたときの我が身に、つい重ね合わせていた。厭味を言われるのはわかっていたが、隼太を家に連れて行くことにしたのである。時之助が隼太の親戚に知らせに走ったが、返事がないまま、夜が明けていた。

「かような真似をして、いかがするつもりじゃ」

案の定と言うべきか。姑の希与は、ここぞとばかりに悪態をついた。平左衛門が勤めに出るのを待っていたように、留以は母娘の居室に呼ばれている。

「赤の他人を養う米はありませんぞ。まあ、留以殿がその分の金子を、出してくれるのならば話は別だがの」

「母上が仰るとおりです」

これまたいつものように、小姑の環紀が同意する。

「嫁に来た身であることを、お忘れなのではないですか。御旗本のお子と言うていますが、心中した一家ではありませんか。万が一、宜しいですか、留以殿。ここが

大事です。野村家に類が及ぶような事態になった暁には、いかがなさるおつもりですか」

「さよう。平左衛門が御役御免になったら、われらも心中じゃ」

「おお、恐い。お騒がせ嫁女のせいですよ。だいたいが、ろくに家事もできない者に、子育てはできません」

「わたしやそなたに押しつけるつもりなのであろう」

「まあ」

睨みつけた環紀に、深々と頭をさげた。

「申し訳ありません。朋江に話すつもりです。隼太殿を〈山崎屋〉に引き取ってもらえないか、ご亭主の千吉さんにも相談してみようと思います」

「『殿』など付けてはならぬ」

すかさず希与が言った。

「心中はお上がきつく禁じておる。ゆえに、心中は罪じゃ、隼太は罪人じゃ。死に損ないは、お上にお預けするのが筋ぞ。勝手をしてはならぬ」

「……はい」

「失礼いたします」

おのぶが戸を開けた。
「花見弁当のご用意ができました。そろそろお出かけにならないと、遅れてしまうのではないかと存じます」
「そうであったわ」
「叔母様たちが、お待ちかねでしょう。早う行かないと、ああ、そうでした。おのぶ、〈豊嶋屋〉さんの白酒も忘れていませんね」
環紀が確かめる。雛祭りのとき、織江が土産のひとつとして、白酒を持たせてくれたのだった。母娘は〈豊嶋屋〉の白酒を殊の外、お気に召している。
「はい。入れておきました」
「環紀。支度を」
「承知いたしました」
母娘に目顔で追い出された。廊下に出た留以は、仕草でおのぶに礼を告げる。若き女主を助けるための呼びかけだったのは言うまでもない。
「隼太殿は、食べましたか」
問いかけながら、居室に足を向けた。
「いいえ。白湯を少し飲んだだけです」

「わたしが食べさせてみます。小さな握り飯を幾つかお願いしますよ。味噌汁も」
「しばらくは無理だと思いますが」
おのぶは答えて、台所の方に行った。戸を開けた留以の目に、きちんと正座している隼太が飛びこんで来る。平左衛門が幼いときに着た着物と袴に着替えていたが、まるで人形のようだった。留以が出て行ったときのまま、座敷の片隅に座している。
「隼太殿」
隣に腰をおろしたが、隼太の目は動かない。声も返ってこない。わずか五歳の子が、すべての感情を失っていた。
〝昔の留以と同じ目をしておる〟
昨日、時之助はそう告げた。番屋で留以が隼太を抱きしめて、温めているときに出た言葉だった。
〝憶えておらぬか？〟
訊ねられたが、留以は首を傾げるばかり。憶えているのは、いつでも留以を抱きしめてくれた時之助夫婦の温もりだった。
（だから）
と、思っている。できるだけ隼太を抱きしめよう。声を掛けて、そばにいること

を知らせよう。義父母が閨から留以を助け出してくれたように、隼太を助けてやりたい。

「いかがですか」

おのぶが、盆に握り飯と味噌汁を載せて、入って来る。

「食べますよ。ねえ、隼太殿」

留以は、小さな握り飯を口もとに運んだが、隼太は相変わらず、虚空に目を据えたままだった。握り飯を皿に戻して、留以は自分の膝に隼太を乗せる。

「可哀想に」

きつく抱きしめる。隼太は逆らわないが、身をまかせるでもない。わずかに姿勢を変えて、留以の膝に座っていた。

「おかしくなるのも、あたりまえですよ。花見に行くとばかり思っていたのに、連れて行かれそうになったのは……」

「おのぶ」

制して、いっそう強く抱きしめた。

「白湯を飲むのは、生きる気持ちがあるからです。朋江のところに預かってもらうのが、一番、よいのではないでしょうか。義父上にもお願いしましたが、旦那様に

もお願いしようと思うているのです。小僧として奉公するには、少し早いかもしれませんが、千吉さんはわかってくれるでしょう」

「旦那様にお願いしても無駄ですよ。お上からお許しは出ません。御旗本の騒ぎですからね」

おのぶは冷静だった。

「それに今朝のなさけない姿を、留以様もご覧になられたでしょう。希与様にひと言も言い返せなかったではありませんか」

姑は早く隼太を奉行所に連れて行けと、平左衛門を責めたのだが、

〝義父上にお願いしてありますゆえ、それまでは家で預かるのが宜しかろうと〟

もごもごと口ごもって、逃げるように家を出た。もとより管轄外の話である。留以は庇(かば)わずにいられない。

「言い返せなかったのではありません。義母上様を想い、旦那様は敢えて言い返さなかったのです」

「ものは言いようですね。ですが『せ』と『さ』の違いは、大きいと思いますよ。都合が悪くなると、いつもお逃げになるじゃありませんか。あの姿を見る度に、わたしはなさけなくて、なさけなくて」

「おのぶ」
横目で思わず睨みつける。おのぶは「そうそう」と話を変えた。
「昨夜、〈藤乃家〉に丈吉が来たようです。別嬪芸者の小糸姐さんに恋心をいだいたか」
「本当に芸者かどうかを確かめに来たか」
留以が継いだ言葉を、さらにおのぶが受ける。
「恋心だけでなく、疑いもいだいたのでしょうね。女将は間違いなくうちの芸妓だと答えてくれたとか。用心深い男です。やはり、猛蔵の手下かもしれません。盗みの下見に来たように思えてなりませんよ」
「丈吉は、文かなにかを預けていかなかったのですか」
「なかったようです。ちょいと智恵が足りないかもしれませんね。探りを入れに来ましたと、自ら告げたようなものです。わたしだったら、小糸姐さんに渡してくれと、文を用意していきましたよ」
「智恵がまわらないのは幸いです。動きを読みやすいですから」
留以は、身体を前後に揺らしながら、膝に乗せた隼太の背中を優しく叩いている。子守歌こそ歌っていないが、母が歌ってくれた子守歌を、心の中で繰り返していた。

その律動に動きを合わせている。
「確かにそうですね」
ふっと表情をゆるめたおのぶに、
「なれど、油断は禁物です」
留以は言った。
「わかっております」
おや、と、おのぶは腰を浮かせる。
「お客様でしょうか。玄関の方が騒がしいですね」
「叔母様たちではないですか。義母上様たちは、まだお支度ができないのでしょうか。やけに手間取っておられますね」
ほどなく慌ただしい足音がひびいた。
「る、留以殿、留以殿」
環紀が障子を開ける。廊下を滑るような勢いで来たのだろう、転びそうになっていた。外出用の一枚である極鮫の小紋に着替えている。
「義姉上様。いかがなされましたか」
「与力の八木沢様がおいでです。留以殿に話があると仰せになっています」

これ以上できないほどに大きく目をみひらいていた。入念に白粉を塗った顔に、ひびが入りそうなほどの驚きを見せている。環紀の目は、留以が膝に乗せた隼太に向けられていた。

〝だから、さっさと奉行所に連れて行けと言ったのに〟

災厄の種を持ちこんだ留以にも厳しい眼差しを投げている。花見に行くつもりが、平左衛門の上役の訪れによって、いやおうなく予定の変更を迫られていた。台無しにされてしまい、怨みがこもっている。

「義母上様と義姉上様は、どうぞ、桜狩にお出かけください」

「い、行けるわけがないでしょう。八木沢様がおいでになっているのですよ」

「わかりました。すぐ参ります」

犬目与力の用向きは、なんだろうか。

「隼太殿をお願いします」

おのぶに隼太を託して、留以は立ちあがった。

五

「心中騒ぎが続いておりますな」

八木沢兵庫は、世間話のような感じで話し始めた。怜悧な顔立ちをした色男は、六尺（百八十二センチ）を超える美丈夫。妻女を三年前に亡くして以来、後添いはもらっていなかった。二人の愛妾を囲っているらしいが、妹の朋江は密かに「兵庫様」などと呼び、憧れている。

「はい」

留以は慎重に出方を見ていた。できれば隼太を〈山崎屋〉に預けたいと考えている。むろん時之助に頼んであるが、心中騒ぎを起こした小林一家は罪人だ。町奉行所の与力の口添えもほしいところだった。

「生き残ったお子は、こちらにいると聞きましたが」

ちらりと廊下に目を走らせる。人の気配を感じているのだろうが、いるのは隼太ではなく、姑と小姑だろう。

「義父が小林様のご親戚に知らせております。迎えを待っておりますが、はたして、

来るかどうか。厄介事には関わり合いになりたくないのではないかと存じます」

かなり正直な言葉を口にした。留以はいやでも隼太に我が身を重ね合わせている。目付だった実父は、盗人に押し入られた侍として、死んだ後も不名誉な扱いを受けていた。時之助夫婦に引き取ってもらえなければ、三姉妹はどうなっていたことか。

（今度は、わたしが助ける番です）

心の中で誓っている。

「罪人でござる」

兵庫もまた姑たちと同じ意見を口にした。

「心中はご法度。非人頭に引き渡すのが、筋ではないかと存ずる。親戚が名乗り出れば、お上にも温情があるやもしれませぬが」

続けて出たのは、さらに非情な言葉だった。時之助が言いかけて止めた理由がこれである。下手に生き残る方が不幸なのは、表向き、公儀が心中を禁止しているからだ。しかし、常に抜け道はある。

「まだ五歳でございます。親子は晴れ着姿でした。花見に行こうと言われたに違いありません。二親を信じただけなのです。隼太殿が生き残ったのは、なにかをせよという天の声ではないでしょうか」

「天の声、か」

兵庫の唇に皮肉めいた笑みが滲んだ。小馬鹿にしたような物言いは、いつものこと。留以は平静を保っている。

「八木沢様は、非人頭に下げ渡すのが筋と仰いましたが、なんと言いましても隼太殿はまだ五歳。助けてやりとう存じます」

「お義父上におまかせするのが宜しいのではござらぬか」

犬目与力は凍りつくような目をしていた。留以はふと氷の壁に向かって話をしているような無力感に襲われる。それでも隼太のことを思い、気持ちを奮い立たせた。

「通常、心中を行うのは、男女のことが多いと存じます。相対死という呼び方は、そこから来たのではないかと。男か女子、どちらかが生き残った場合は、晒しものにされたうえ、非人頭に下げ渡されるのが筋。なれど、お子に関しては、かような取り決めはないのではありませんか」

一歩、踏みこむと、

「ふぅむ」

兵庫はつるりと顎を撫でた。癖のひとつなのだろう。おれは色男と言わんばかりの仕草が、留以は好きになれない。が、今は見て見ぬふりをした。

「いかがでしょうか」
窺うような目をしていることに気づき、慌てて顎をあげた。
「慥かに、生き残った子に関しては、定めがないやもしれぬ」
「では」
留以の言葉を遮るように告げた。
「なれど、心中した小林某は、御旗本。町方があれこれ口出しできませぬ。ここはお義父上の知らせを待つのが宜しかろうと存ずる」
「……」
留以は下唇を噛みしめる。正論だったが、必ず抜け道があるはずだ。そして、兵庫はそういう道に通じているはず。立場は南町奉行所の与力にすぎないが、賄賂や袖の下を使い、人脈を広げていると聞いていた。それとも所詮、この程度の男なのだろうか。
（買いかぶりすぎたかもしれませんね）
一瞬、話を終わらせようとしたが、
「昨夜は、隼太殿に添い寝をいたしました」
留以は懸命に食いさがった。

「闇の中でぱっちりと大きな目を開けておりました。地獄を見た目でございます。子守歌を歌っているうちに、ようやくうとうとし始めたのですが」

昔を思い出したことまでは口にできない。隠し部屋から見た残虐な場面、それが脳裏に焼きついていた。

（父上は、なにかを感じておられたのかもしれない）

我知らず考えている。実父の天城小十郎は、だからこそ、隠し部屋を作っていたのではないだろうか。

（もしや）

留以は、はっとした。あの日、三姉妹は近藤家に泊まるはずだった。時之助夫婦に浅草の酉の市に連れて行ってもらい、一泊する話が決まっていたのである。

しかし、留以は風邪をひいたため、ひとりだけ天城家に取り残された。本当は留以も出かけていたはずだったのに……。

黙りこんだのを不審に思ったのか、

「いかがなされた」

兵庫が問いかけた。

「あ、いえ、隼太殿の明日を思うと」

曖昧な表現になったが、留以の昔は奉行所にも知れわたっていた。剣術小町の噂は、当人が思っている以上に広まっている。

「我が身に重ね合わせておられるか」

犬目与力の目にも、わずかに悲哀が滲んだ。

「は、い」

うつむいて答える。

「辛い話ゆえ、思い出したくないやもしれぬが、敢えて訊ねたい。留以殿は、押し入った盗人を見ておられぬのか」

兵庫は一歩、踏みこんできた。憐れみをかけられたように思えたが、義父の時之助に伝えたことによって、固く閉じていた心の扉が開き始めている。とはいえ、隠し部屋の目撃談を教える気にはなれなかった。

「見ておりませぬ。ただ」

逡巡が言葉を止めさせる。

間近で留以は、兵庫と目を合わせるはめになっていた。物問いたげな眼差しを投げられたが、応えないことに焦れたのだろう、

「ただ？」

兵庫に促された。

「父が使うていた煙管（キセル）が、なくなっていたと姉に聞きました。銀の煙管には梅の花が描かれていたとか。印籠は、今、妹のもとにあるのですが、これには煙管と対になる鶯（うぐいす）が彫（ほ）られております」

思いきって告げた。さして珍しい意匠ではないうえ、十一年もの時が経っている。似たような品が出たところで、下手人を突き止めるのは至難の業。手がかりになりそうもないと思いつつの言葉だったが、

「ほう。梅に鶯でござるか」

兵庫はぴくりと眉をあげる。

「もしや、お心あたりが？」

思わず訊いていた。じりっと身を乗り出している。

「いや」

短く答えて、続けた。

「似たような煙管を、どこかで見たような気がするのでござるが、思い出せませぬ。骨董屋（こっとうや）だったかもしれませぬな。それがし、根付（ねつ）けを集めるのが趣味でござるゆえ、ぶらぶら歩きがてら、まわるのでござるよ」

「さようでございますか」
留以は、苦手な与力から早く離れたくてならない。
「お茶を淹れ替えて参ります」
立ちあがろうとしたが、兵庫に仕草で止められた。仕方なく座り直したが、なかなか口を開こうとしなかった。

六

「八木沢様」
今度は留以が促した。
「『土竜』でござる」
兵庫の返事に、問いかけの眼差しを向ける。
「え？」
「過日、留以殿に博奕場の探索を、お願いしたではござらぬか。あのときは、妹御の朋江殿にもお力添えいただきましたが、無事、悪党どもを一掃できたのは幸いでござった。もっとも片付けたのは、仕事人らしいという噂でござるがな」

自嘲めいた笑みには、複雑な思いが見え隠れしていた。博奕好きの御内儀を装い、留以と朋江は旗本屋敷の博奕場に潜入したのである。『遊糸の与市』を頭とする一味を始末したのは、確かに留以たち仕事人。

（まさか）

気づかれたのだろうか。もしや、この男に『仕事』を見られたのか。留以が怪しいと思い、尾行けられていたのだろうか。考えたくない最悪の流れに、冷や汗が滲み出る。

「それで」

ごくりと唾を呑み、訊いた。

「いかような話でござりましょうか」

返答いかんによっては、逃げなければならなくなるかも……平左衛門と別れる。そう考えただけで、闇に陥ちていくような恐怖を覚えた。答えを知りたいが、知りたくない。永遠にも思える時の後、

「また手伝うていただけぬかと思いましてな」

意外な答えが返る。

「は？」

すぐには呑みこめなかった。

「過日は女博徒でござったが、此度は芸者に化けていただけぬかと思うておりまする。密偵を『土竜』と呼ぶのは、内々にて用いられる異名。同心が使う小者たちも、似たような調べ方をいたしまするが、女子を潜りこませるとなると、なかなかむずかしいのでござるよ。これが」

と、兵庫は腕を叩いた。

「腕がたつ者、つまり遣い手でなければ務まりませぬ。いざというとき、己の身を守れる女子でなければ……」

「留以殿」

いきなり希与が飛びこんで来た。後ろには環紀も付いている。

「引き受けるのじゃ」

「さようでございます。さすれば、隼太と申すあのお子にも、お上のお慈悲があるかもしれません」

「環紀の言うとおりよ。我が身を捨ててお役に立つのが同心の妻の務め」

希与は、兵庫に向き直る。

「八木沢様。家事は苦手な嫁女でござりまするが、幸いにも剣術だけは得意でござ

ります。『土竜』として、これ以上、相応しい女子はおりませぬ」
「まあ、芸者姿が似合うかどうかは、わかりませんけれど」
ぼそっと呟いた環紀を、希与は横目でちらりと睨みつけ、留以に視線を移した。
「いかがじゃな、留以殿」
作り笑いと猫撫で声に、ぞくりと悪寒が走る。今まで一度も見たことのない笑顔であり、聞いたことのない声だった。
「わたくしは旦那様に従います。旦那様がよいと仰れば、お引き受けいたします」
夫をたてるのを忘れない。が、内心、面白い話だと思っていた。『もがりの猛蔵』の手下と思しき丈吉に近づくため、留以はすでに〈藤乃家〉の芸者――小糸として動き始めている。だれかに見られるのが心配だったものの、お上の御用であれば、堂々と調べられる。渡りに船ではないだろうか。
「平左衛門には、わたしから話をする」
希与が自信たっぷりに請け合った。
「おまかせくださりませ、八木沢様。今まではただの『お騒がせ嫁女』でしたが、これからはいささかなりとも役に立ちましょう。留以殿を『土竜』として、どんどん使うてくださりませ」

「なれど、母上。留以殿は縫い物も駄目ですが、芸事もできませんよ。三味線を爪弾けば、馬鹿力で糸を切るに違いありません。踊りはせいぜい盆踊り程度。すぐに見破られてしまうのではないかと存じます」
「ええい、環紀。水を差すでない」
「わたしはただ、留以殿にはとても務まらぬのではないかと」
「ご免くださりませ」
玄関で大きな挨拶がひびき渡った。
「朋江」
留以が迎えに出るまでもない、
「失礼いたします」
すぐに障子が開いた。
「朋江殿」
兵庫の呼びかけに、朋江は破顔する。
「まあ、八木沢様もおいでだったのですね。かようなところでお目にかかれるとは、思うてもおりませんでした」
蕩けそうな顔で言い、座敷に入って来た。素早く希与に菓子折を差し出すあたり

は、流石と言うべきか。嫁して四年目を迎えていたが、すでに大店の女房として、威厳さえ漂わせていた。

「あいすみません。八木沢様もおいでとわかっていれば、その分の菓子折もお持ちしたのですが、あいにく遠見の技は使えませんものですから」

軽口に小さな笑いが広がる。朋江はまさに向日葵の花。降り注ぐ陽の光を受け、周囲を明るくなごませる。

「あとでお届けいたしますね」

兵庫に微笑みかけると、犬目与力も満更ではない表情になった。

「お気遣いなく」

「それで、朋江。今日はいかような用向きですか」

留以は割って入った。できるだけ早く兵庫を追い出したいのに、この妙になごやかな雰囲気はなんなのか。歓迎せざるべきものだった。

「義父上から使いが参りました。こちらにいる隼太でしたか。心中騒ぎの折、生き残ったお子を、しばらくの間、うちで預かってくれぬかと」

「おお、願ってもないことよ」

留以を押しのけるようにして、希与が応えた。

「流石は近藤様。手配り、心配りに、ぬかりがありませぬな。ちとお待ちくだされ。様子を見て参りますゆえ」

菓子折の中身が気になるのか、そわそわした様子で座敷をあとにする。恭しく菓子折を抱えて、環紀が母親に続いた。

「話を戻すが」

兵庫が言った。

「いかがであろうな」

「なんの話ですか、なにかあったのですか」

今度は朋江が割りこんでくる。留以はかいつまんで『土竜』の話をした。美男の言葉は絶対と思っている妹は、目を輝かせる。

「もちろんお引き受けするのでしょう、姉様。きっと似合いますよ、芸者姿も。わたしもお手伝いしたいほどです。着物や簪は揃えられますか。借りられるあてがありますか」

金主役を引き受けかねない興奮ぶりだった。

「旦那様に伺うてみないことには、お返事できません。平左衛門様が反対なさったときには、朋江。そなたが『土竜』になればよいではありませんか」

いささか意地悪い返事になったかもしれない。

「また厭味を言われたのですか」

朋江が小声で囁いた。目で希与たちの居室を指している。兵庫の贔屓客に、留以の嫌悪感は理解できまい。

「いつものことですから」

曖昧にごまかした。

「それより、隼太殿をお願いしますよ。白湯は飲みますが、なにも食べないのです。食べられるようになるまで、時がかかるかもしれません」

「大丈夫です。生まれたての赤児のように、慈しんであげようと思います。隼太殿は一度、死んで、生まれ変わったのですよ」

答えて、朋江は兵庫に目を向ける。

「小林隼太は、〈山崎屋〉がお預かりいたします。宜しいでしょうか」

屋号を告げる横顔が誇らしげだった。子を持つ母の自信がみなぎっている。兵庫は大きく頷き返した。

「異存はござらぬ」

とにもかくにも、隼太については預け先が決まった。明日のことはわからないが、

心中で生き残った子には、お咎めなしとなるのを祈るばかり。兵庫の熱い視線を避けるように、留以は立ちあがった。

第四章　さくら

一

「わしは得心できぬ」
翌日、平左衛門は言った。
「留以を『土竜（もぐら）』にするなど考えられぬわ。八木沢様は、なにを考えておられるのか。いくら剣術が遣えるとはいえ、そなたは女子ではないか」
いつになく険しい表情をしていた。朝餉を終えて着替えているところなのだが、廊下には希与と環紀が控えている。
「八木沢様にはすでに引き受ける旨、お話しいたしましたぞ」
「はい。もっとも粗忽者（そこつもの）の留以殿では、『そげもの芸者』にしかなれないと申しあ

げましたけれど」

　環紀の言葉に、平左衛門はさっと頬を引き攣らせた。

「姉上。言葉がすぎますぞ」

　そげものは、変人を意味する言葉だが、言い得て妙だと留以は思っている。三味線も踊りもできない芸者など、通用するかどうか。

「まあ」

　と、環紀は目を丸くした。ふだんはおとなしい弟の、思わぬ反論に衝撃を受けたのかもしれない。

「参りましょう、母上。平左殿は、わたしたちの話に耳を貸す気持ちがないようです。昨日は出かけられませんでしたが、今日こそは桜狩に出かけとう存じます」

　睨みつけながら立ちあがった。

「平左衛門。そなたがなんと言おうとも、お引き受けするしか道はありませんぞ。厄介者は、朋江殿が連れて行ってくれましたがの。心中の生き残りを勝手に泊まらせた罪は、軽くありますまい。八木沢様のありがたーいお申し出を断ることはできませんぞ」

　言い置いて、希与は娘と居室に足を向けた。二人の足音が消えるまで、留以と平

左衛門は黙りこんでいる。

「留以。博奕場に潜りこんだときにも言うたと思うが」

遠慮がちに口を開いた。

「わしは反対じゃ。なにゆえ、留以がかような危ない御役目を引き受けねばならぬのか。八木沢様のお考えが、ようわからぬわ。小者に命じればよいだけの話ではないか。それをわざわざ留以に……」

「わたしは御役にたちとう存じます」

遮るように言った。

「なにを探るのかはわかりませんが、八木沢様は芸者に化けろと仰せになりました。料理茶屋といった密談が行われる場を探れということなのかもしれません。旦那様は調べの仔細を耳にしておられますか」

念のための問いかけになっている。兵庫が平左衛門を軽んじているのは、言動から察していた。

「いや、聞いておらぬ。南町と北町のお奉行様、さらに八木沢様をはじめとする両奉行所の与力が、急ぎ集まったことだけは聞いたがの。その折、なんらかの話が出て、留以に白羽の矢が立てられたのやもしれぬ」

「両国橋の襲撃騒ぎでしょうか。殺められたのは御旗本の黒崎半九郎様ですが、町方と合力して、調べることになったのかもしれませんね」
「番町のお義父上から知らせはないのか」
「来ておりません。わたしの方から文を出してみようかと思うております。なれど教えてくれるかどうか。たとえ娘と雖も、話せぬことがあるやもしれませぬゆえ」
「わしは両国橋の騒ぎよりも、巷の心中騒ぎの方が気になっておる。商人ばかりか、御旗本までもが心中とは……しかも幼子まで道連れじゃ」
平左衛門は、留以が差し出した刀を受け取りながら、言った。
「お義父上のお心配りには、ただただ御礼申しあげるしかない。小林隼太を〈山崎屋〉が引き受けてくれたのは、まことにもって、ありがたきことよ」
「お上もお許しくださるでしょうか」
「かような流れになるよう、心を砕くつもりじゃ」
廊下に出た夫に、留以は続いた。
「宜しくお願いいたします」
「留以は、桜狩には行かぬのか」
平左衛門は通り過ぎざま、希与たちの居室をちらりと横目で見る。中では母娘が

支度に勤しんでいるのだろう、時折、楽しげな笑い声が聞こえていた。
「わたしは、朋江の家に参ります。隼太殿の様子が案じられますので。結局、昨日も〈山崎屋〉まで送る結果になりましたけれど」
「隼太が泣いたか」
「いえ。ただ大きな目をわたしに向けたまま、朋江に抱かれておりました。離れたくない、寂しいと訴えているように思えたのです。つい明日も顔を見に来るからと言っておりました」
それに、と、留以は心の中で呟いた。
(芸者に化けるのであれば、元締のお力添えをいただかなければなりません。朋江の家で詳しい話をしなければ)
『土竜』としてはもちろんだが、仕事人としても芸者に化けるのは都合がいい。知り合いに会うのではないかと、びくびくしなくて済むのは、本当にありがたかった。
「件の話については、今一度、考えようではないか」
玄関で雪駄を履いて、平左衛門は振り返る。
「はい」
留以は十手を渡した。

「母上たちの花見弁当は、わしが腕によりをかけて、作った。留以にも食べてほしゅうてな。おのぶも手伝うてくれたが」

十手を受け取ったものの、平左衛門はなかなか出て行こうとしない。玄関の外には小者の辰蔵がすでに畏まっている。桜狩に出かけてほしいのだろうか。それとも他に話があるのか。

「旦那様？」

促すと、苦笑いを返した。

「いや、たいしたことではないのだが、先日、さよう。二、三日前であったか。裏木戸のところで不審な人影を見てな。話しかけたところ、中川周平だと名乗った」

「中川様が」

繰り返して、「あ」と思った。

「そういえば、向かいの沙苗様も仰っておりました。夕方頃に不審な人影を見たと」

「わしが見かけたのは、深更よ。おのぶに用があると言うたゆえ、取り次いだがの。おのぶから聞いておるか」

「いえ、なにも」

「さようか」
平左衛門はまだなにか言いたげだったが、
「参る」
くるりと背中を向けた。
「お気をつけて」
留以は深々と頭をさげる。出かけるのを待っていたのかもしれない。希与たちが居室から出て来た。
「一日遅れの桜狩じゃ」
「散っていなければ、よいのですが」
環紀が足を止め、台所の方を見やった。
「おのぶ。平左殿が作った花見弁当を持って来なされ」
平左殿の部分に、ひときわ力がこもる。留以への皮肉であるのは間違いない。
「わたくしが」
台所に足を向けたが、いち早くおのぶがこちらに来る。風呂敷に包んだ花見弁当を恭しく掲げていた。
「織江様から戴いた白酒も入れてあります」

今度はおのぶが、織江様の部分に力をこめた。この勝負、引き分けだろうか。環紀が風呂敷包みを受け取る。母娘は苦々しい表情で草履を履いた。
「留以殿もお出かけになるのであったな」
姑の言葉に、留以は畏まる。
「はい。朋江の家に参りたいと思います」
「出かける前に、土竜退治をしなされ」
「母上の仰るとおりですよ。夏野菜の苗が、育ちませんからね」
「『土竜』が行う土竜退治じゃ。さぞ効果が表れるであろう」
「まことに」
ほほほほほ、と、高笑いを残して、母娘はようやく出て行った。留以は二人のことよりも、夫の態度が気になっている。
「旦那様は、いかがなされたのでしょうか。中川様の話を口にした後、まだなにか言いたげでしたが」
「おわかりにならないのですか」
おのぶの問いかけに首を傾げる。
「なんのことですか」

「留以様は、剣術や仕事の話に関しては鋭いのに、色恋話には疎いんですねえ。やきもちですよ」

「え」

「旦那様は、留以様と中川様の仲を、気にかけていらっしゃるのです。『まさか』と思いながらも、『もしや』という疑いが消えないのでしょう。留以様が旦那様一筋なのは、傍目にも見て取れますものを」

「やきもち」

繰り返した後、じんわりとあたたかいものに包まれた。つい口もとをゆるめている。

「まあ、嬉しそうに」

おのぶがすかさず言った。

「いけないのですか」

留以も負けじと切り返した。

「いけないとは申しません。申しませんが」

「なんですか」

「いえ、なんでもありません。旦那様は留以様にも花見弁当を作っていかれたので

すよ。朋江様と召しあがれば宜しいのではないかと存じます」
台所に戻ろうとしたおのぶを、留以は呼び止めた。
「お待ちなさい。中川様が二、三日前の深更、おいでになられた由。なぜ、わたしに知らせなかったのですか」
だからこそ、平左衛門は疑いの目を向けたのではないか。やきもちをやいてくれたのは嬉しいが、無用な不安を与えたことに対しては、申し訳なさを覚えていた。
「中川様が知らせなくてもよいと、仰せになられましたので」
おのぶは答えて、言い添えた。
「両国橋の騒ぎの流れなのかもしれませんが、中川様は留以様を案じておられました。だれかに尾行けられているような気配はないかと」
「だれかの『目』は感じておりますが」
「今のそれは、仕事を見られたのではないかという不安から生じるものでございましょう。尾行けられているような気配はないとお答えいたしました」
「わたしの様子を見に来てくださったのでしょうか」
「おそらく、そうではないかと思います。よけいな不安をいだかせたくない。だから留以様に教えなくてよいとなったような気がします」

「下手人についてはどうですか。手がかりなどは、つかめたのでしょうか」
留以の問いかけに、おのぶは首を振る。
「なにも仰っていませんでした」
「わかっていても教えられないのかもしれませんね。中川様も目付の配下として、動いておいでになりますから。ああ、そうそう。ひとつ、おのぶに確かめておきたいことがあるのです」
「なんですか、あらたまって」
「中川様がおいでになられた時刻のことですが、旦那様は深更と仰っていました。間違いありませんか」
「はい」
おのぶは少し考えて、告げた。
「九つ（午前零時）を過ぎたあたりではなかったかと存じます。旦那様が勝手口からそっと入って来られました。そろそろお戻りになる頃だと思い、湯を沸かしていたところでしたので」
「そうですか」
沙苗は夕暮れ時に、男を見たと言っていた。中川周平ではなかったのだろうか。

あるいは周平が、夕方にも姿を見せたのかもしれない。
「なにか気になることでもあるのですか」
おのぶの目にも不安が漂っている。
「いえ、なんでもありません。元締に連絡はつけましたか」
「はい。船で迎えに来るという使いが参りました」
「船、ですか。わたしは〈山崎屋〉で話をするのだとばかり思うていましたが」
留以は〈山崎屋〉に行くついでに、元締の源内と話をするつもりだった。八丁堀から朋江の家までは、船を使うほどの距離ではない。
「あまり頻々とそういう場を持つのは良くないと、元締は考えたのかもしれませんね。いずれにしても、じきに迎えが来ると思います」
「花見弁当を忘れないようにしてください。朋江や隼太殿と一緒にいただきますから」
「わかっております」
「隼太殿はご飯を食べたでしょうか」
ひとり取り残された隼太のことが、頭から離れなかった。留以の心を癒してくれる平左衛門の料理。それが幼子の心をも、癒してくれるのを祈っていた。

二

留以は、八丁堀に架かる稲荷橋のところで、源内の船に乗りこんだ。むろん、おのぶも同道している。

「ぐるりと一周、いたしますよ。大川に繰り出して、船から桜狩を楽しみたいのですが、岸からだれかに見られる懸念があります。話が終わるまでの間、短い船旅にお付き合いくださいませ」

源内は言い、障子を閉めた。桜が咲く季節とはいえ、まだまだ冷える。特に船の中は寒かった。

「どうぞ、留以様も炬燵にお入りください」

勧められるまでもなく、足を入れている。いつものように酒肴の用意もされていたが、留以は茶を所望した。薫りだけでも極上とわかる茶を、じっくり味わっている。正月に実家で味わって以来の風雅な味だった。

「この船の中は極楽ですね」

留以の呟きを、源内が受ける。

「かように心がけております。我が家も地獄でございますゆえ、せめてと思いまして」

我が家も、のところでは苦笑を返すしかなかった。もっとも源内の場合、恐ろしいのは母ではなくて御新造である。傍目にも見て取れるほどの恐妻家だった。

「噂を耳にいたしましたよ、留以様。犬目与力に、またもや『土竜』になるよう言われたとか」

源内の言葉に、留以は目を丸くした。

「地獄耳でございますね。わたくしが八木沢様と話をしたのは、昨日のことですのに」

答えつつ、「なるほど」と得心してもいた。だからこそ源内は船での密談を望んだのかもしれない。ふだんは仲間の岡田文士郎やお真佐が同席するのだが、今日はおのぶを入れて三人だけの話になっていた。

「これもご存じかもしれませんが、八木沢様は、芸者に化けるのがよいのではないかと仰せになりました。渡りに船と思うた次第です」

すでに留以は元締の手配りで、常盤町の置屋〈藤乃家〉の芸者――小糸を名乗っている。あとは元締の許しを得られればという流れになっていたが、

「そのことなのですよ」
源内の表情がくもった。
「てまえが前に出るのは、ちょいとまずいのではないかと存じます。てまえが〈藤乃家〉に口利きしたとなれば、八木沢様が〈なにわや〉においでになった折、挨拶をなされましょう。なにかと面倒なことが起きるのではないかと思いましてね」
「御新造様に角が生えますか」
おのぶが両手の指で角を示した。芸者の置屋云々の話を聞けば、悋気の強い源内の妻は、平静ではいられないだろう。図星とはいかないまでも、理由のひとつではあったのかもしれない。
「まあ、それもありますが」
言葉を濁して、続けた。
「いかがでございましょうか、〈山崎屋〉さんに口利き役をお願いするというのは。いえ、形だけのことでございます。実際には、てまえが仲立ちしておりますので、〈山崎屋〉さんにお世話いただくことはございません」
提案には、諸々の事情が見え隠れしていた。八木沢兵庫に頼めば事は簡単に済む。御役目の話であるうえ、兵庫は自他ともに認める数寄者。喜んで口利き役を引き受

けるに違いない。

だが、留以は、兵庫を蚊帳の外に置いておきたかった。自分に対する犬目与力の、いささか過剰な関心だけでも持て余しているものを、芸者に化けるとなれば、御役目を口にして、さらに近づいて来ることも考えられる。

「わたくしは、源内さんにお願いしたいのですが」

遠慮がちの訴えから不安を読み取ったのか、

「もちろんでございます、お助けいたしますよ」

源内は力強く請け合った。

「留以様も同じお考えかもしれませんが、てまえは、八木沢様とは距離を置いておきたいのです。鋭いお方でございますからね。てまえが仕事人の元締であることを、気づかれてしまうかもしれません」

「とりあえず〈山崎屋〉さんに、お話ししてみるのが、宜しいのではありませんか」

おのぶが折衷案を出した。

「〈山崎屋〉さんは、本物の通人でございます。若い頃は放蕩三昧だったようですが、そのお陰で花柳界にも知り合いが多いのではないかと存じます。〈藤乃家〉に

も伝手があるかもしれません。なくても別によいではありませんか。話は通してあるのですから、女将に口裏を合わせてもらうだけのことです」

本物の通人は、八木沢兵庫に対する皮肉のように聞こえた。

「そうですね」

留以は笑って、頷いた。

「おのぶさんにしては、名案かもしれません」

源内の言葉に、おのぶはちらりと冷ややかな目を向ける。

「元締」

「冗談ですよ。いかがですか、留以様」

「わかりました。千吉さんに話してみます。すでに朋江から、わたしが芸者に化ける話を聞いているかもしれません。否とは言わないと思いますが」

正直なところ〈山崎屋〉を巻きこみたくはなかった。朋江は実の妹であるため、協力してもらうことに迷いはないが、千吉は堅気の商人。できるだけ遠くにいてほしいというのが本音だった。

「大丈夫でございます」

源内が言った。心を読んだような言葉になっていた。

「〈山崎屋〉さんには絶対に、ご迷惑はおかけいたしません。名前貸しのようなものですよ。町奉行所を欺くための策とでも申しましょうか。〈藤乃家〉には、丈吉も姿を見せましたからね。油断できません」

『もがりの猛蔵』の手下と思しき丈吉は、留以が本物の芸者かどうかを確かめに行っている。確かに気はぬけなかった。

「その後、丈吉の動きはいかがですか」

留以は訊いた。

「相変わらず、遊女屋巡りをしておりますよ。あの後、また品川宿に泊まりました。上方からの連絡役と落ち合う場所なのかもしれません。いったん上方に戻るか、このまま江戸に腰を落ち着けるのか。見張りを続けます」

「お願いいたします」

留以の礼を、おのぶが継いだ。

「仕事人がひとり、殺められたと聞きました。下手人は」

「まだです」

源内は遮るように言った。

「仕事の最中、返り討ちにあったのか、仕事人と気づかれたがために狙われたのか。

なにもわかっておりません。あるいは単に仲間うちの諍(いさか)いということかもしれませんが」

そうであってくれればという、願いのような含みが感じられた。留以は訊かずにいられない。

「仲間うちと仰いましたが、仕事人同士の諍いかもしれないとお考えなのですか」

「違います」

きっぱりと答えた。

「留以様もおわかりのように、仕事人は、仕事のときにしか顔を合わせません。道で会っても素知らぬ顔をするのが定め。『犬』を調べているときに、二言、三言、交わすぐらいはあるかもしれませんがね。会って酒を酌み交わしたり、連れ立って博奕場に行くような真似はいたしません」

ここで言う『犬』は、標的のことである。

「だれが決めたわけでも、ないんですけどね」

おのぶが同意した。

「自然にそうなりました。これはわたしと亭主の考えですが、暮らしの中にまで血(ち)腥(なまぐさ)い関わりを持ちこみたくないんですよ。だから会っても素知らぬ顔をする」

言われるまでもない、留以も自然にそうしていた。岡田文士郎やお真佐に外で会ったときは、互いに目を合わせないようにして、別れるのが常。あらためて訊くまでもない話だったかもしれない。

「それにしても」

源内は、重い吐息をついた。

「近頃の心中騒ぎは、尋常ではありません。ひと月ほどの間に、五件ですよ。先日の大川騒ぎを含めてですがね。首を吊ったり、互いの心ノ臓を刺したりと、やり方は違いますが、心中であることに変わりはありません。いったい、どうなっているのか」

「亭主とも話したんですが、心中病とでもいうような、流行病（はやりやまい）なのではないかと思いたくなりますね」

おのぶが相槌を打つ。

「心中が伝染（うつ）る」

留以は独り言のように呟いていた。ありえない話だが、そう考えたくなるような騒ぎが続いている。ひとりだけ生き残った小林隼太の明日はどうなることか。

「元締は、なにか裏があるとお考えですか」

留以の問いかけに、源内は首を傾げる。
「さあ、どうでしょうか。今戸の請け人、法庵和尚によりますと、坊主がちょいとおかしな動きをしているようですがね」
「おかしな動きとは？」
今度はおのぶが問いかけた。
「それを今、調べさせているんですよ。そうそう、心中騒ぎで思い出しました。生き残ったお子ですが、ええと、名は」
源内の視線に、留以は応える。
「小林隼太殿です」
「そう、隼太様でしたね。朋江様が連れて行かれたご様子。〈山崎屋〉にお預けなされたのですか」
見張りを付けていることを隠そうとはしなかった。こういうところを、留以は非常に好ましく思っている。仕事人が殺されたと聞き、源内は、連絡役と護衛役を兼ねた者を留以に付けているのだろう。
「そのつもりでおります。親戚が迎えに来なければ、隼太殿は〈山崎屋〉に奉公することになると思います」

「迎えに来るわけがありませんよ。小林様には二人の弟がいたようですが、両名ともに幼い頃、他家に養子として入ったとか。本家の小林家と付き合いがあったのかさえ、わかりません。心中した兄の子を引き取る余裕はないでしょう」

言葉を継いだおのぶは、ふと考えこむような表情になる。記憶を手繰り寄せるように首を傾げていた。

「いかがしたのですか」

留以は訊いた。

「いえ、隼太様なのですが、少し気になることがございまして」

「どんなことですか」

「『さくら』でございます」

三

「さくら、とは、桜のことですよね」

留以は確かめている。

「おそらくそうだと思いますが、『さくら』とだれかが言う度に、ぴくりと身体を

震わせるのです。留以様が希与様たちと話していたときもそうでした。わたしは隼太様と庭にいたんですけどね」

おのぶは答えて、説明した。なんとかして隼太に感情を取り戻してほしい。そう願うおのぶは、隼太を抱きながら、子守歌を口ずさんでいた。

「座敷から、桜狩だのなんだのと聞こえる度に、隼太様の身体が大きく震えましてね。わたしにしがみつきました」

「そうですか」

留以は昏い気持ちになる。

「花見に行こうと二親に言われたのでしょう。四人とも晴れ着姿だったではありませんか。花見弁当も持って行ったかもしれません。最後の膳を親子で食べた後」

そこから先は口にできなかった。縄で互いの身体を繋ぎ、それぞれの袂に石を入れて、四人は大川に飛びこんだ。凍りつくような冷たさだったに違いない。激しい驚きと恐ろしさで、もがいたことは容易に想像できる。

隼太を繋いでいた縄は、結び方がゆるかったのか。はたまた不憫に思った母親が、わざとゆるく結んでおいたのか。

「番町の義父上は、言うておられました。助かったのが、いいのか悪いのか、と」

「借財があったのですか」
と、源内。
「さあ、詳しいことはわかりません。ただお婆様や小林様の二親、隼太殿にとっては祖父母にあたる方々が、たて続けに亡くなったという話は聞きました」
「御旗本ならば、旗本株を売ればよかったと思いますが……そこまでは思いきれなかったのかもしれませんね」
源内の考えを、おのぶが受けた。
「二人いる弟のどちらかに、小林家を継がせたかったのではないでしょうか。家で死ななかったのは、不吉な話を残さないためだったように思えなくもありません」
主一家が無惨な死を遂げた武家屋敷は、とかく不気味な噂が流れるもの。とはいえ心中した家は、改易されてしまう可能性が高かった。
「お子たちのためにも生きるべきでした。お上のお慈悲があればよいのですが、小林家の明日はどうなることか」
留以の脳裏には、虚ろな隼太の目が浮かんでいる。昨日、〈山崎屋〉で別れたときには、わずかに光が動いたように思えたが……。
「隼太殿にとって『さくら』は、このうえなく、辛いものになってしまいましたね。

わたしの虎落笛と同じように」

またもや我が身と重ね合わせていた。

家のまわりの竹垣や柵に、冬の強い北風が吹きつけ、笛が鳴るような音を出すことを虎落笛と呼んでいる。十一年前のその日、天城家に盗人が押し入った日も、虎落笛が哀しげな音をたてていた。

「できれば引き取りたいのです」

留以の口から出た言葉を、おのぶは即座に否定する。

「無理ですよ。吝ん坊のお姑様が、許すわけがありません。親戚筋からの話であればともかくも、心中騒ぎの生き残りですから」

身も蓋もない言い方だったが、そこには、女主に対する気遣いがこめられているように思えた。だれかが厳しく言わないと、留以は諦めきれない。いやな役目を引き受けてくれたのではなかろうか。

「心中騒ぎですが」

源内が話を戻した。

「町人についてはわかりませんがね。小林様の心中騒動は、もうひとつの騒ぎ、両国橋の騒ぎに関わってくるかもしれません」

「黒崎半九郎様の騒ぎですか」
留以は思わず確かめている。
「はい」
源内は答えて、続けた。
「留以様が助太刀なさった黒崎様の騒ぎです。ご公儀の評定所からお手伝い役として、黒崎様は寺社奉行にご奉公なされました。吟味物調役です。まあ、監視役のような御役目といえるのではないでしょうか。寺社奉行を務めるのは大名家ですからね。旗本を監視役に付けて、目を光らせる必要があるのでしょう」
「では、黒崎様は寺社奉行内の争い事に巻きこまれたのですか」
「それもまだはっきりしておりません。調べているところです。ひとつ気になっているのは、騒ぎがあったとき、御目付の配下が近くにいたことです」
「中川様」
留以は、はっとした。
「たまたま薬研堀にいたわけではなかったのでしょうか。黒崎様をそれとなく守っていたのかも……」
「申し訳ありません」

不意に、おのぶが頭をさげる。

「事前に中川様から連絡をいただいておりました。留以様に逢いたいので段取りをつけてほしいと。ちょうどあの時刻あたりに、中川様は両国橋の近くにいると伺いましたので、留以様を薬研堀にお誘いしたのです」

「まことですか」

そう言った後、留以はしばし言葉を失った。複雑な思いが湧いている。中川周平は今も留以を想っているのだろうか。先日、深更に家を訪ねて来たのは、平左衛門に自らの存在を知らしめるためだったのか。そう考えるのは、ただの自惚れだろうか。

「おのぶ」

「お叱りは覚悟のうえでございます。ですが、わたしは希与様たちにいびられて、小さくなっている留以様を見るのが辛いのです。おいたわしくてなりません。ご実家は十人目付の一家ではありませんか。たかだか三十俵二人扶持の……」

「おやめなさい」

鋭く制した。

「わたしは、旦那様のお人柄に惹かれて、嫁いだのです。その旦那様を生んでくだ

さった義母上様を大事にするのはあたりまえのこと。家事や裁縫が苦手であるため、そなたや弥太郎には苦労をかけますが」

「苦労などとは思っておりません。ただ中川様に嫁いでいらっしゃれば、今少しのびのびと暮らせたのではないかと」

「前にも言うたではありませんか。ご縁がなかったのです」

それで、と、留以は話を変えた。

「中川様のことですが、やはり、黒崎様の護衛役を務めていらしたのでしょうか」

「さあ」

おのぶはあっさり答える。

「さあ、ではないでしょう、おのぶ。つまり、中川様はあの時刻に黒崎様が、両国橋の近くにいるのを、あらかじめわかっていたとしか思えません。そうでなければ、わたしと薬研堀で『たまたま』逢うのは無理だったでしょうから」

「あ、そういえば、そうですね。黒崎様は毎日、同じ順路を通っていたのでしょうか。あるいは、あの日だけ両国橋を渡る用事があったのか」

おのぶの言葉は、自問のようだった。

「とぼけているのですか、本当に知らないのですか」

責めるような語調になった留以を、
「まあまあ、留以様」
源内が窘めた。
「実に興味深いお話でした。黒崎様は寺社奉行の中で起きている騒ぎを、調べておられたのかもしれませんね。そして、留以様のもと許嫁、中川周平様は、護衛役を担っていたということも考えられます」
もと許嫁には、いささか抵抗を覚えたが、敢えて口にはしなかった。
「それゆえ、黒崎様の駕籠が通る道を知っていた、と」
留以も自問のように呟いている。
「だからこそ、逢瀬の時が持てたのではないでしょうか。むろん、おのぶさんの手引きがあればこそですが」
源内の冷ややかな目に、おのぶは肩をすくめて、もう一度、頭をさげた。逢瀬の段取りをつけたのは、浅薄と言うしかない。仕事人が狙われているのだとすれば、留以が襲われていたかもしれないのである。
「勝手な真似はしないでくださいよ」
源内は、念のためという感じの言葉を投げた。

「はい」
おのぶは殊勝に頭をたれる。
「名残惜しいですが、そろそろお別れのようです。留以様とは、一日中でもご一緒したいのですけれどねえ。まあ、おのぶは要りませんが」
障子をわずかに開けて、源内は外の様子を見ていた。冷たい風が流れこんで来る。天気はいいのだが寒かった。
「悪うございました、ええ、なにもかも、わたしの罪でございますよ。桜がすぐに散るのも、希与様たちの意地が悪いのも」
「臍を曲げないでくださいな、おのぶ」
笑って留以は、暇を告げる。
「それでは失礼いたします」
「〈藤乃家〉の仲立ち役は、〈山崎屋〉さんにお願いしてみてください。断られたときには、てまえが引き受けます」
「わかりました」
船が近くの船着き場に着いた。

四

おのぶが先に降りて、花見弁当を抱えた留以に手を差し伸べる。船は本当にぐるりとまわっただけだった。八丁堀の近くに着いていた。

「朋江の家に花見弁当だけ、届けておいてもらえばよかったですね」

留以は、楓川の方に向かって早くも歩き出している。おのぶも少し後ろに付いていた。

「そんなに慌てなくても、大丈夫でございますよ。午にはまだ間がありますから。中食の用意はしていないと思いますよ。朋江様はおおらかなご気質ですからね。留以様のお顔を見て、なににしようか考えるのではないかと存じます」

「ものは言いようですね」

と、苦笑した。

「あの子の場合、おおらかというよりは、大雑把であるように思えますが」

右に曲がって楓川沿いに歩いて行った。左側には蔵が立ち並んでいるため、川の流れまでは見えない。我知らず、足を速めていた。

「隼太殿が気になりますか」
おのぶも遅れずに付いて来る。
「ええ。泣いているのではないかと」
「泣くことができるようになれば、ひと安心ではないですか。なんの感情も見せませんでしたからね。留以様と別れるときだけ、わずかに哀しげな目をしましたが」
「あの目が、夢に出てきました。だれかに見られているような感じも、消えていませんけれど」
「留以様。さりげなく前をご覧ください」
おのぶが言った。警戒のひびきを感じて、留以は目をあげる。楓川に架かる越中橋のところに、丈吉が立っていた。『もがりの猛蔵』の手下と思しき男は、こちらに歩いて来る。ちらちらと留以を盗み見ていたが、流石に声を掛けるような真似はしなかった。
（見ては駄目）
留以は、毅然と顎をあげて通り過ぎた。芸者の小糸に瓜二つの御新造を見て、丈吉はさぞ驚いたに違いない。擦れ違った後も、食い入るような眼差しを向けているのではないだろうか。背中に強い視線を感じていた。

「振り向いてはいけませんよ」
おのぶが告げる。留以は前を見たまま、越中橋を渡った。通一丁目に行くには、この先の橋の方がいいのだが、一刻も早く丈吉の目からのがれたかった。幸いにも川沿いに建つ蔵が、二人の姿を隠してくれる。
「尾行けて来るかもしれません」
三度目のおのぶの警告にも、なにも応えなかった。少しだけ足を速めて、角を左に曲がる。日本橋通一丁目の〈山崎屋〉に着いたときには、安堵の吐息をついていた。
「驚きました」
「留以様」
帳場にいた主の千吉が、上がり框に出て来る。
「どうかなさいましたか」
「いえ、ちと会いたくない者に、会うてしまいまして」
留以は、振り向きたくなる衝動を、かろうじて抑えていた。おのぶは戸口に立ち、なにげなく道を見やっている。丈吉が尾行けて来ないか、様子を見ていた。なにか感じたのかもしれないが、

「さようでございましたか」
千吉は、よけいなことは訊かなかった。
「お待ちください。すぐに足を洗う湯を用意いたします」
「湯は要りません。雑巾で充分です。さほど歩いておりませんので」
「わかりました。朋江が先程から気にしておりましたよ。おいでになるのが、遅いのではないかと申しまして」
「これができるのを待っていたのです」
花見弁当を渡して、上がり框に腰かけた。下女が持って来た雑巾で足袋の汚れを軽く拭く。道には一度も目を向けずに帳場へあがった。
「姉様」
奥座敷に続く暖簾が揺れて、朋江が姿を見せた。腕には三歳の嫡男、捨吉を抱いていた。帳場にあがると、薬種問屋ならではの匂いが強く感じられた。さまざまな薬を調合しているに違いない。
「隼太殿は？」
声が聞こえたのか、留以の呼びかけと同時に、隼太が飛び出して来る。屈みこんで抱きあげると、留以の首に腕をまわした。

「気に入られたようですね」
朋江の言葉に、短く答える。
「そうだといいのですが」
「慕っておりますよ。姉様の声が聞こえたとたん、立ちあがりましたもの。落ち着かない様子になりました」
「話は奥でいたしましょう」
「二階よりも、奥座敷の方が宜しいですか」
「隼太殿を抱いたまま、階段をあがるのは危ないですから」
「まあ、慎重ですね」
朋江は笑ったが、留以は笑えなかった。不運な子を守りたいという気持ちが強くなっている。さらなる災厄が襲いかからぬよう、しっかり隼太を抱きしめていた。
「隼太殿は、なにか食べましたか」
留以は訊いた。朋江のあとに続いて、奥座敷に続く廊下を進んでいる。中庭を囲む形で薬を調合する座敷や、袋に詰める座敷が続いていた。いっそう薬の匂いが濃くなっている。大店の〈山崎屋〉は、見世の間口も広いが、家自体も広かった。
「はい。昨夜も今朝も、ちゃんと食べましたよ。今朝はお代わりをしました」

「そうですか」
　ほっとすると同時に、敗北感のようなものを覚えていた。子を持つ朋江なればこそ、隼太は心を開いたのではないか。何度、食べさせようとしても口さえ開けなかったのは、子を持ったことのない留以を拒絶したからではないのか。
「捨吉が助けになったようです」
　朋江が、その杞憂を打ち消した。
「相変わらず、なにも話しませんが、捨吉のそばから離れません。夜も同じ布団で眠りました」
　座敷に腰を落ち着けた妹に倣い、留以も隼太を抱いたまま座る。二親とともに死んだ弟が、捨吉に重なるのかもしれない。母親の朋江にではなく、幼子に温もりを求めたのが哀れでならなかった。
「負けたのが、朋江でなくてよかった」
　ふと出た呟きに、朋江が笑みを返した。
「おかしな姉様。負けるだのなんだのという話ではないでしょう」
　子を持つ母親の余裕が漂っている。子ができない限り、留以は女として朋江と対等にはなれないと思っているのだが、妹はそういう気持ちを理解できないだろう。

話しても虚しくなるだけだとわかっていた。

「義父上の方はどうですか。なにか連絡がありましたか」

別の話を振る。奥向きの下女が、茶や菓子を運んで来た。隼太は菓子を見たが、留以の膝から降りようとはしない。饅頭と煎餅の両方を取って、持たせた。

「文をくれたのは、姉上です」

朋江も饅頭を取り、捨吉に少し食べさせる。

「此度の騒ぎで色々な話が耳に入って来た由。この間も言いましたでしょう、小林様の家には、美味しい柏餅を作るお婆様がいたと」

「ええ、憶えておりますよ。隼太殿にとっては、曽祖母にあたるお婆様ですね」

隼太は留以の膝に座って、おとなしく饅頭を食べていた。特に会話を気にする様子はない。

「そうです。膈の病だったようで、ずいぶんとお金がかかったとか。悪いことは重なるものですね。小林様の二親、これは隼太殿の祖父母ですけれど、相次いで労咳を患ったようなのです」

「労咳ですか」

留以の頭には、向かいの本庄民子が浮かんでいる。母親のような存在だが、労咳

は不治の病。なにかと役得の多い定町廻りの同心なればこそ、人参の代金をどうにか用立てられるのではないだろうか。旗本の家でたて続けに病人が出たとなれば、借金はふくれあがるばかりだったかもしれない。

「借りられるところからは、借り尽くしたのでしょう。金目のものは売り払い、しのいでいたようです。ほら、これも姉上のところで聞いたではありませんか。小林様の屋敷には、なにも残っていなかったと」

「万策尽きて、ですか」

敢えて心中は口にしない。朋江は「それが」と継いだ。

「姉上の文では、小林様は借財を返すあてができたと、親戚には言うていたとか。とても喜んでいたようなのです。あのとき、着ていた晴れ着も、質屋から請け出した品ではないでしょうか」

隼太に聞かせまいという心遣いだろう。朋江も小林親子の入水心中を「あのとき」と曖昧にぼかしていた。

「では、なにゆえ、騒ぎにいたったのでしょうか」

「あてがなくなったのでしょうね」

朋江はさらりと言った。

「だれかから借りるつもりだったのが、やはり、駄目だったとなったのかもしれません。一度はこれで大丈夫と思っただけに、落胆が大きかったのではないでしょうか。桜が咲き誇るときを選んだのは、せめてと思うたのかもしれません。最後の花見をしながらと」

ぴくりと、抱いていた隼太の身体が震えた。饅頭を食べていたのに、ぎゅっと留以にしがみついた。

「大丈夫、大丈夫ですよ」

留以は宥めるように言い、優しく隼太の背中を撫でた。大雑把ではあるものの、鈍い方ではない。

「なにかまずいことを言いましたか」

朋江が小声で訊いた。

「あとで話します。ああ、そうでした。ひとつ、そなたにお願いしたいことがあるのですよ。正しくは千吉さんへのお願いですけれど」

話しつつ、腕に抱いた隼太と、朋江の子を交互に見やっている。子らには、あまり聞かせたくない話だった。

「お待ちください」

察して、朋江が乳母を呼ぶ。隼太は留以から離れたくなさそうだったが、駄々をこねるほどの我儘は見せない。捨吉を抱いた乳母に手を引かれると、素直に付いて行った。

「すぐに行きますよ」

留以は思わず声をかけていた。聞き分けのよさが、逆に哀れでならない。妙に素直なところがあるのは、入水したときの衝撃がまだ残っているからではないのだろうか。

「早く平らかな気持ちを取り戻してほしい」

独り言のような呟きを、朋江が受けた。

「それでお願いとはなんですか」

「昨日の八木沢様の話ですが」

五

留以は、『土竜』の話に切り替えた。持ちかけたのは、与力の八木沢兵庫。すでに留以は常盤町の置屋〈藤乃家〉の小糸として、動き始めている。しかし、元締の

源内は、立場上、兵庫とは距離を置きたいと思っているようだ。表向きだけでも仲立ち役を、千吉に頼めないだろうか。

「わかりました」

朋江は即答した。

「え」

留以は思わず訊き返している。

「千吉さんに確かめなくても、よいのですか」

「〈山崎屋〉は商人ですよ、姉様。お上のお申しつけに、否と言えるはずがありません。それに」

と、朋江は悪戯(いたずら)っぽく微笑んだ。

「他ならぬ八木沢様のお言葉ですもの。断るはずがないではありませんか。わたしも芸者に化けてみたい。駄目でしょうか」

なかば本気のような顔をしていた。過日、朋江も女博徒とまではいかないが、博奕場に出入りする上級旗本の奥方役を務めている。留以は役者まがいの真似をすることに、今も抵抗を覚えるが、妹は味をしめたのかもしれなかった。

「やはり、そなたの方が『土竜』には、向いているかもしれませんね」

呆れ顔で言うと、朋江は膝を乗り出した。
「では」
「駄目です。此度は剣術が遣えなければ、危ないという仰せでした。それゆえ、わたしに頼みたいと」
「姉様は剣術小町ですものねえ。でも、ああ、悔しい。わたしも八木沢様の御役にたちたいのに」
不意に朋江は立ちあがる。
「こうしてはいられません。さっそく夫に話して参ります」
落ち着かない様子で座敷を出て行った。入れ替わるように、おのぶが入って来る。
「やはり、尾行けて来ました」
耳もとに囁いた。丈吉のことであるのは言うまでもない。
「今も見世の前にいるのですか」
「いえ、通り過ぎただけです。どこかで見張っているかもしれませんが」
「確かめるような動きは、やめた方がいいでしょうね。おのぶの姿を見たら、丈吉は疑いを深めるかもしれません。不審をいだかれてはなりませんから」
「〈藤乃家〉の件はいかがですか」

おのぶは問いかけながら、目で帳場のある見世を指した。朋江が「旦那様」と千吉を呼んでいる。

「千吉さんはわかりませんが、朋江は二つ返事でしたよ。八木沢様のご命令であれば従うのでしょう。手伝えるのが嬉しそうでした。あの美男好きは、もう病ですね」

「なんにしても宜しゅうございました。犬目与力に仲立ち役を引き受けられますと、色々と厄介でございますからね」

おのぶの話は耳に残らない。留以の目は、障子に半分だけ身体を隠した隼太に向いていた。入ってもいいのか、話は終わったのか。様子を窺っているようだった。

「隼太殿」

呼びかけたとたん、飛びついて来た。すぐにまた留以の膝に乗る。きつく抱きしめるのを見て、おのぶが吐息をついた。

「別れが辛くなりますよ」

「またおのぶは、いやなことを言って。大丈夫ですよ、隼太殿。別れるのはほんの一時。毎日、隼太殿の顔を見に参りますからね。これからは、わたしを母と思って、甘えてください」

と、留以は隼太の顔を覗きこむ。
かすかに口もとが微笑みを形作った、ように見えた。
「笑いました」
「え？」
顔を見たおのぶは、首を振る。
「口もとがゆるんだだけでしょう。とても笑顔には見えません」
「いいえ、笑いました。ねえ、隼太殿。今一度、見せてくださいな。この意地悪なおばさんに、とびきりの微笑みを」
「意地悪なおばさん」
反論しようとしたおのぶが黙りこむ。ひそやかな足音がして、朋江が姿を見せた。
「姉様。隼太殿の叔父御というお侍が参りました。小林様の弟君だそうです。はじめは野村家に行ったようですが、こちらにいると聞いて来たとか」
「……」
留以は、おのぶに怨めしげな目を向けている。そなたが別れを口にするから、そのときが来てしもうたではありませんか。八つ当たり的な気持ちをぶつけていた。
「いかがいたしますか」

朋江の問いかけにも迷いがあった。わずかなうちに姉と隼太の絆が深まったのを、感じているに違いない。さりとて追い返すわけにもいかず、思いあぐねている表情をしていた。

「お通ししてください」

渋々の返事になっている。やりとりから察したのだろう、隼太がいっそう強くしがみついた。

「承知いたしました」

見世に戻る朋江を、おのぶが目で追いかけている。

「あんな騒ぎの後なのに、よく迎えに来てくれましたねえ。奇特な人がいるもんです。もしかしたら、お子がいないのかもしれませんね。それで引き取ることに決めたのではないでしょうか」

珍しく会ってもいない相手を持ちあげていた。少しでも留以の哀しみをやわらげようと思っているのかもしれない。預けても大丈夫ですよ、身内ですからね。そんな気持ちが伝わってきた。

「おのぶらしくないこと」

皮肉が口をついて出る。膝から降りようとしない隼太を、留以もまたきつく抱き

しめていた。どこにも行かせたくない。
「旦那様にお話しして」
「無理です」
おのぶが言った。
「身内が引き取ると申し出ているのに、希与様が応と言うわけがありません。旦那様だって同じですよ。屋敷の場所を伺って、時々、訪ねて行く旨を告げるのが精一杯です」
正論だった。が、受け入れたくなかった。近づいて来る足音や気配が、これほど忌まわしく思えたことはない。
涙が滲んだ。
「離れたくありません」
「留以様」
「だって、そうじゃありませんか。隼太殿はわたしを慕うてくれています。心を寄せてくれているのに」
声が聞こえたのか、
「お連れいたしました」

案内して来た朋江の表情も、暗く沈んでいた。留以はあふれかけた涙を、慌て気味に拭っている。男が、座敷前の廊下に畏まった。

「川瀬弥次郎でござる。五歳のとき、御家人の川瀬家と養子縁組をして以来、小林家とは疎遠になり申した。騒ぎを聞いた親戚が、知らせてくれたのが昨日のことでござる。とり急ぎ、駆けつけました次第」

年は三十前後、表情や話しぶりからして、実直そうな印象を受けた。それでも留以は隼太を抱きしめている。

「隼太殿を引き取りたいと？」

素っ気ない口調になっていた。

「さよう。会うのは、これが初めてでござるが」

弥次郎の答えに、留以はきっと眉をあげた。

「なにゆえ、初めてなのですか。お母上やお父上が亡くなられたとき、兄君や隼太殿と顔を合わせるではありませんか。失礼ですが、まことに叔父上なのですか。もしや、騙っているのでは……」

「姉様」

朋江が窘め、割って入る。

「見世先で川瀬様より、おおかたの経緯は伺いました。川瀬家は小林家の遠縁にあたる家であるとか。小林様は川瀬家にも、金子を用立ててくれぬかと頼んだようでございます」

「なれど我が家は無役の御家人でござる。禄高は三十俵二人扶持。他家を助ける余裕はござりませぬ。とうてい無理だと断ったときに縁が切れ申した。家には二度と顔を見せるなと兄に言われて、親の死に目にも逢えませなんだ」

言葉を継いだ弥次郎は、下唇を噛みしめた。武家の悲哀が滲み出ている。貸してくれ、いや貸せぬと、言い争いになったのかもしれない。無役の御家人では、用立ててやりたくてもできなかっただろう。

留以は、同情を禁じえなかった。

「お子はおいでにならぬのですか」

訊ねる声から少し棘が消えていた。

「三歳の娘がひとり、おりまする。五年もの間、子ができずに、ようよう授かった娘でござるが」

と、弥次郎は隼太に目を向ける。

「兄の子でござる。ゆくゆくは、我が娘と娶せてもよいのではないかと思い、足

を運びました次第」

金で切れた兄弟の縁。互いに詫びる機会を見ていた部分も、あったのではないだろうか。いずれはと思っているうちに、哀れ、兄は一家心中。生き残った忘れ形見を、せめて育ててやりたいと考えたのは、無理もない流れに思えた。

しかし、留以は得心できない。

「おのぶ。ちと隼太殿を頼みます」

朋江を目顔で促しながら、別の座敷に足を向ける。なんとかならないだろうか。引き取るのは無理とわかっているのに、忙しく考えていた。

「わたしは」

別の座敷で口を開いたとたん、

「駄目です」

朋江が遮るように言った。

「お身内が名乗りをあげてくれたのは、ほんにありがたいことではありませんか。お上もお許しくださりましょう」

「貧乏御家人ですよ。食べて行くのがやっとの暮らしぶりであるに違いありません」

「姉様とて似たような暮らしではありませんか。お姑様に財布を握られて、腰巻きひとつ買えない有様。隼太殿を引き取れるはずがありません」
「でも」
「子供のように駄々をこねないでくださいませ。きっと姉上も同じことを仰います。我儘はおよしなされと……」
「そ、そなたには、わたしの気持ちはわかりません」
留以は訴えた。涙がぽろぽろとあふれ出した。
「隼太殿は、わたしと同じなのですよ。ひとりだけ生き残ってしまいました。ち、義父上は言うておられました、感情や言葉を失い、まるで人形のようだったと。抱きしめて、話しかけて、また抱きしめて、話しかけて。それを繰り返しているうちに、日々の暮らしを取り戻していったのだと。隼太殿にはわたしが必要なのです、そして、わたしにも隼太殿が」
両手で顔を覆っていた。無意味なことを言っている、わかっているのに止められなかった。抑えつけていた感情が爆発していた。
「姉様」
朋江が差し出した手拭いを受け取る。

「すみません。わたしとしたことが、取り乱してしまいました。剣を学ぶ者として、あるまじき行い。恥ずかしいことです」
「いいえ。わたしこそ、申し訳ありませんでした」
「そう思うのであれば、一朱、貸してください」
留以の申し出に、妹は怪訝な表情を返した。
「は？」
「隼太殿の着物の袖にでも、縫いこんでやろうと思います。なにかあったとき困るでしょう。いくばくかの金子があれば、心強いではありませんか」
「まあ、驚いた。初めてですね、姉様がわたしに借金を頼むのは。隼太殿のためならば、なんでもできるということでしょうか」
朋江の苦笑に、留以も苦笑で応じる。
（ええ。なんでもできます。わたしは隼太殿の母ですから）
心の中の呟きを知る者はいない。
別れのときが迫っていた。

第五章　木賊（とくさ）の丈吉

一

「隼太殿は、『さくら』という言葉を恐れています。二親たちと入水したときの恐怖が、心に焼きついているのだと思います。くれぐれも気をつけてやってください。川瀬様にはご迷惑かもしれませんが、月に一度ぐらい様子を見に参ります。どうかお許しいただけますよう」

留以は、何度も、何度も、川瀬弥次郎に繰り返した。歩こうとしない隼太は、弥次郎に抱かれて〈山崎屋〉を出たが、最後までじっと向けられていたあの眸（め）が忘れられない。ひと言も話さない、いや、話せない子であるだけに、胸に迫るものがあった。

〝なぜ、わたしを追い出すのですか。母と思うてくれと、言うていたではないですか。あれは偽りだったのですか〟

無言の問いかけが、耳の奥で鳴りひびいている。寝ても覚めても、思うのは隼太のことばかり。恋患いのようになっていた。

三日後。

留以は常盤町一丁目の置屋〈藤乃家〉にいた。

「あっ、また三味線の糸が」

女将の千代が叫ぶように言った。留以が撥で三味線を弾いた瞬間、ぴしっと糸が切れたのである。昨日、ここに来て以来、何度目になるだろうか。はからずも、義姉の環紀が言った通りの、稽古風景になっていた。

「すみません」

小声で謝った。薄く紅を差しただけの薄化粧だが、粋な縞の着物を普段着に用いるところは、けっこう気に入っていた。武家ではあまり着ないため、新鮮な感じを味わっている。が、三味線の方は思うようにならなかった。

留以以上に疲れを覚えているのだろう、

「ちょいと休みましょうか」

吐息まじりに言い、千代は立ちあがる。年は三十なかば、美人というほどではないが、独特の華を持っていた。垢抜けた雰囲気に、藤色の細い縞の着物が、しっくりと馴染んでいる。

「撥で糸を切る人なんか、そうそういませんよ。次は三味線を壊しちまうんじゃないですかね」

千代は笑って、台所の方に行った。一緒に稽古をつけてもらっていたお真佐を、留以は振り返る。

「剣術のようなわけにはいきませんね」

「大丈夫です。爪弾くぐらいは、できるようになりますよ」

お真佐にしては珍しく世辞を口にする。年は二十七、八。吉原の遊女屋に針妙として奉公している女は、物静かで無駄口をたたかなかった。

遊女は留以同様、針仕事が苦手なので、長襦袢の繕いもろくにできない。それゆえ、お真佐のようなお針が要るのだった。

「お真佐さんは、上手いじゃありませんか。だれに習ったんですか」

留以の問いかけに微笑を浮かべた。

「見よう見真似です。習うほど好きじゃありませんが、端唄を口ずさむとき、三味

線があると、少しは上手く聞こえるんじゃないかと思いまして」
あくまでも謙虚に答える。おのぶがそばにいると、丈吉や他の者に留以がすなわち小糸であることを気取られてしまうかもしれない。そう考えた元締の源内が、お真佐を配してくれたのだ。
「わたしは、じゃなかった、あたしは駄目ですよ」
留以は慌てて言い換えた。少しでも芸者らしく見えるように努めている。
「三味線や端唄、小唄、さらに踊りの類は、まるで才能がありませんでした。まあ、口うるさい義母上様たちの顔を見ないで済むのは、このうえない幸せですけどね」
おのぶと弥太郎がいないのは、心許ないと思う反面、姑たちや八木沢兵庫に会わなくて済むのは、ありがたいと思っていた。
「留以様ったら」
「小糸ですよ、お真佐さん」
「そうでしたね」
「とにかく見た目だけでも、それらしくならないと」
留以は答えつつ、隼太のことを考えている。別れてから三日しか経っていないの

に、三年も過ぎたように思えた。
（なにか話したかしら。泣いてはいないでしょうか。せっかく食べられるようになったご飯が、また食べられなくなっていなければいいのですけれど）
考えこみすぎたかもしれない。
「小糸さん、小糸姐さん」
お真佐の呼びかけで、はっと我に返った。
「ごめんなさい。なにか？」
「いえ、踊りに少し工夫を凝らしたら、いいのではないかと元締、あ、いいえ、源内さんが言っていたんですよ」
お真佐も言い直して、続ける。
「ほら、小糸さんは剣術が得意じゃありませんか。剣舞のような力強い踊り、そう、剣術の型を取り入れた踊りならば、できるんじゃないかと」
「今のそれ、いいかもしれませんね」
茶を運んで来た千代が同意した。
「三味線はお真佐さんにまかせて、小糸姐さんは、剣舞を踊る。やろうと思っても、できるものじゃありませんからね。受けるかもしれませんよ」

「ですが、野村留以を思い浮かべやすくなっちまうんじゃないですかね。せっかく苦労して、小糸姐さんになりきろうとしているのに、水の泡になるんじゃないかしら」

意識して町人の言葉を使っていた。言葉づかいはもちろんのこと、立ち居振る舞いのひとつひとつが、武家と町人では違っている。さらに新米芸者を務める身としては、覚えなければならないことが山のようにあった。

「そんな心配は要らないと思いますよ。ああ、そうそう。いっそ真似していると言っちまえばいいじゃないですか」

千代の答えに、問いかけを返した。

「真似とは？」

「剣術小町に憧れているから、剣舞を踊るようにした。型だけでも覚えたいと思い、野村留以様に稽古をつけてもらっている。それを建前にするんですよ」

ぽんと手を叩いて、言った。

「我ながら名案だわ。そうすれば、ここに同心のご妻女の留以様が出入りしても、おかしくないじゃありませんか。逆に小糸姐さんが、八丁堀の家に行っても不審に思われない。いかがですか」

「言われてみれば、ですね」

留以は、お真佐と顔を見合わせた。確かに名案かもしれない。遅かれ早かれ丈吉は、ここに姿を見せるだろう。そのときのことも考えると、ひとり二役を自然な形で演じ分けられるようにしておいた方が、いいのではないだろうか。

「いいかもしれませんね。この間、訪ねて来たという丈吉は、留以と小糸の繋がりを疑っていると思います。まあ、二人揃ったところを見たい、などと言われたときには、困りますけれど」

千代の顔を見ながらの言葉になっていた。元締の源内と女将の関わりについて、詳しく聞いてはいない。源内が仕事人の元締であるのを知っているのか。口にできないまま稽古をつけてもらう流れになっていた。

「そのときは、そのときですよ。丈吉は堅気には見えませんからね。むしろ八丁堀のご妻女と繋がりがあると思ってくれた方がいいかもしれません。この見世や小糸姐さんと、距離を置くんじゃないかしら」

女の細腕一本で見世を切り盛りしているからだろうか。よけいな問いかけをしないばかりか、名案をひねり出してくれる。この気配りと、さばさばした気質ゆえに、源内が贔屓にするのかもしれなかった。

「あの男が堅気ではないと、なぜ思うんですか」

留以は確かめるように訊いていた。
「雰囲気で、わかりますよ。それに源内さんが、小糸姐さんのことを訊く者が来るかもしれないと、あらかじめ言っておいてくれましたから。それとなく気をつけていたときに、現れたのがあの男ですからね」
「そうでしたか、源内さんが」
気配り怠りないのは、千代だけではなかった。源内の行き届いた配慮に、今回も助けられている。
「では、小糸さん。剣舞の稽古をいたしましょうか」
千代の誘いに、大きく頷いた。
「お願いいたします」
「お真佐さんは、小糸さんの踊りに合わせて、三味線を弾いてくださいな。少し力強く弾いた方がいいかもしれませんね」
「わかりました」
「試しに、五行の型からやってみます。お真佐さんに見てもらったうえで、三味線を適当に弾いてもらうのが……」
留以の言葉を遮るように、玄関の戸が開いた。

「女将さん」
女の呼びかけがひびいた。〈藤乃家〉が抱えている芸妓だろうか。
「華吉さんだわ」
千代は呟き、玄関に行った。留以は耳を澄ましている。
「どうしたんだい、息せききって」
とたんに千代は、くだけた口調になっていた。
「新大橋の東詰でお坊様が斬られたらしいんです。あたし、もう吃驚しちゃって」
「斬られたところを見たのかい」
「いえ、人だかりができていたのを見ただけですよ。恐いんで、ぐるりと遠回りしてきたんです。すみませんけど、水を一杯、もらえますか」
話が終わらないうちに、留以は〈藤乃家〉を飛び出している。源内の言葉をいやでも思い出していた。

二

〝今戸の請け人、法庵和尚によりますと、坊主がちょいとおかしな動きをしている

ようですがね〟

と、源内は言っていた。たまたま坊主の話が出たとは思えない。今回の騒ぎは、おかしな動きとやらに関わりがあるのではないか。

（旦那様）

留以は、筵掛けされた亡骸の傍らに、平左衛門がいるのを見た。

夫は最後まで留以が『土竜』として動くのを渋っていたが、上役の八木沢兵庫に、なかば命じられるような形で従っていた。

見廻りの途中だったのか、知らせを受けて駆けつけたのか。小者の辰蔵も一緒にいる。二人とも留以に気づいたようだが、目を合わせることさえしなかった。兵庫から外では他人のふりをするよう、事前にきつく申し渡されている。留以も素知らぬ顔で野次馬に加わった。

とそのとき、野次馬の中に、中川周平の姿を見つけていた。

（中川様までもが、なぜ、ここに？）

たまたま通りかかったのだろうか。昔の恋人は粋な装いの留以を見て、あきらかに驚いているようだった。じっと凝視している。周平もまた「なぜ？」と思っているのかもしれない。

「小糸さんは、足が速いですねえ」
少し遅れて来たお真佐が左側に並んだ。
「擦れ違いざまに斬られたようじゃ」
いつの間にか右側には、岡田文士郎が立っている。源内に言われて、留以の知辺をさりげなく見張っていたのではないだろうか。
注意深く周囲を確かめた後、文士郎は囁き声で続けた。
「相当な遣い手であるのは間違いない。下手人を見た者はいないらしゅうてな。供をしていた下男も、気づかなんだと言うていたとか。下手をすると斬られた仏自身、死んだことをわかっておらぬのではあるまいか」
にやりと、唇をゆがめた。いかにも文士郎らしい冗談といえた。
「それから丈吉が、うろついていたぞ。小糸姐さんにご執心の様子。ま、無理からぬことだがな」
言い置いて、さりげなく離れて行った。短い間に話を集めたのは流石と言うべきか。亡骸は戸板に載せられて、近くの番屋に運ばれて行った。
「坊さんが斬られるとはな」
「金が目当てかね」

「さあて、どうなのか」

野次馬は話しながら散り始める。平左衛門に色々訊きたかったが、できるわけもない。番屋に向かう夫の後ろ姿を見送って、留以はお真佐とともに、万年橋の方に歩き出した。文士郎ではないが、まわりに目を走らせている。

「仕事人でしょうか」

お真佐にそっと訊いた。

「そうかもしれませんね。岡田様の見立てどおり、居合いの達人でしょう。抜く手も見せずに斬ったようですから」

「源内さんの仕事ではないのでしょうか」

留以は素朴な疑問を持っていた。今ひとつ仕事人の仕組みが理解できなかった。元締というのは、何人ぐらい存在しているのか。また元締同士の繋がりはあるのか。仕事人は他の元締の下でも、仕事をするのか。などなど、かねてより思っていた問いかけが、あふれそうになっていた。

「違うと思いますが、わたしにもよくわかりません。ただ源内さんの仕事であれば、なんらかの知らせがあったと思います。そうしないと、仲間の仕事人同士が刃を交えることになりかねませんから」

お真佐は答えて、角を左に曲がる。
「つまり、『仕事』とわからずに、仕事人が『犬』を助けてしまうことを懸念しているわけですね」
と、留以も隣に並んだ。
「そうです」
二人は小名木川沿いの道を東に進んで行った。武家屋敷に挟まれるような形で、深川常盤町がある。敷地の広い武家屋敷が続いているため、午近くの光を浴びた練り塀の白さが、眩しいほどだった。
「殺められたお坊様は、『犬』と名指しされるほどの悪事を働いていたわけですね」
自問のような呟きが出た。
「そうとは限りませんよ」
お真佐が意外な言葉を告げる。
「え？」
「源内さんは、念入りに調べて『仕事』をしますが、そうではない元締もおります。中には金さえ出せば、どんな依頼でも引き受ける仕事人がいるんですよ。仲間うちでは『山犬』と呼ばれておりますが」

「では」
留以は足を止めて、問いかけた。
「仕事人と仕事人の戦いもある、と？」
「はい」
いったん立ち止まったものの、お真佐はすぐにまた歩き出した。留以も追いかける。小名木川沿いの河岸には、そろそろ芝桜が咲き始めている。ここ数日の暖かさが幸いしたのか、緑色の河岸にちらほらと、桜色や白い花が見えていた。
「もしかすると、両国橋の騒ぎも、仕事人の仕業でしょうか」
留以はふたたび源内の言葉を思い浮かべている。
「源内さんは、心中騒ぎの話が出たとき、こう言うていたのです」
声に出して告げた。
〝町人についてはわかりませんがね。小林様の心中騒動は、もうひとつの騒ぎ、両国橋の騒ぎに関わってくるかもしれません〟
二つの騒動がどこでどう繋がるのか。留以にはまるでわからない。しかし、あそこに中川周平がいたのが、偶然ではなかったとしたら、どうだろう。目付の配下を務める周平は、襲われた黒崎半九郎の護衛役を務めていたのではないか。そういっ

た関わりがあるために、今回も野次馬のひとりに加わっていたのではないだろうか……。

「小林様は、御旗本ですか」

お真佐の問いかけに、応えた。

「はい。確か小納戸役を務めておられたと思います。小林様には、二人のお子がおりました。次男は二親と一緒に亡くなったのですが、隼太殿というご嫡男は生き残りました。まだ五歳なのです」

留以は俯いて、歩みを遅くした。

「噂は聞きました。大川に親子四人で飛びこんだとか。かなりの借財があったという話も耳に入っています」

お真佐も歩調を合わせてくれる。

「ええ。ですが妹に聞いた話では、小林様は借財を返すあてができたと、親戚には言うていたようなのです。それが、なにゆえ、心中することになったのか」

正しくは、姉の織江から来た文の内容を、朋江が教えてくれたのだが、細かいことは口にしない。

「旗本株を売るつもりじゃなかったんですか。借財を返すには、それしかないよう

に思えますけどね」

「でも、小林様はとても喜んでいたようなのです。旗本株を売る気持ちは、なかったのではないでしょうか。たとえ借財が返せるとしてもですよ。そのために旗本株を売らなければならないとしたら、喜んではいられないと思いますから」

思い出しながらの答えになっている。留以から聞いた話として、お真佐から源内に伝わる可能性もあった。できるだけ正確に伝えようとしていた。

「仰るとおりですね。では、旗本株を担保にして、金子を用立ててもらった。というのはどうでしょうか」

お真佐の考えに同意する。

「ありえますね。ところが、あてにしていた金子が入らなくなった。妹の受け売りですが、一度はこれで大丈夫と思っただけに、落胆が大きかったのではないか、と」

「そうかもしれません。ひとりだけ助かったお子は、留以様がいったん家に連れ帰られたと聞きましたが」

「はい。妹の家に引き取ってもらう段取りをつけたのですが、三日前、小林様の弟君が引き取りに参りました。本所の御家人です。できれば……わたしが引き取りた

かったのですけれど」

芸者に化けるのは、さして楽しいことではないが、〈藤乃家〉は本所の川瀬家に近かった。それが大きな励みになっている。暇を見て隼太に逢いに行こうと、留以は決めていた。

「なかなか思いどおりにはなりませんねえ」

お真佐が継いだ。やけに実感がこもっているように思えた。

「もしや、お真佐さんも、似たような想いを味わったことがあるのですか」

つい踏みこんだ問いかけを発している。お真佐には子がいたのだろうか。辛い別れを経験したのだろうか。

「機会があれば、お話しいたします。今は芸者の小糸と真佐吉に化けなくてはなりませんから」

「お真佐さんの権兵衛名は、真佐吉さんですか」

「ええ」

答えてお真佐は、目で前方を指した。

「〈藤乃家〉のお客人でしょうか」

〈藤乃家〉の船着き場近くに、中川周平が立っていた。手持ち無沙汰な様子で、行

き交う船を見るともなしに眺めている。留以が芸者に化けるべく、〈藤乃家〉の世話になっていることを、すでに知っていたのは流石と言うしかない。目付の配下としては当然なのかもしれないが、あまり歓迎できない客だった。

視線を感じたのか、

「ちと話ができぬかと思いまして」

周平が会釈する。

「二階の座敷を借りられるでしょうか」

留以の言葉を、お真佐が受けた。

「女将さんに話して参ります」

小走りに〈藤乃家〉へ走る。

留以は仕方なく、周平を中に促した。

「どうぞ」

三

二階の座敷に通された後も、周平はなかなか口を開こうとしなかった。気まずい

空気に耐えきれず、留以が口を開きかけたとき、
「野村殿はご承知なのでござるか」
周平が言った。
「ご妻女を町方の密偵として使うなど、それがしには考えられませぬ。しかも芸者に化けさせるとは」
消えた語尾にあてはまるのは「言語道断」かもしれない。
「夫は反対いたしました。中川様と同じお考えにござります」
きつい口調の反論に、周平は疑問の目を返した。
「では、なぜ？」
「わたしが自ら望んだのです。仔細はお話しできませんが、お察しくださいませ。色々と事情があるのです」
「もしや……十年前、いや、すでに十一年目になろうかという、例の騒ぎに関わりのある話でござるか」
周平は察しがよかった。『もがりの猛蔵』や両親の仇討ちについて、一度も話したことはない。にもかかわらず、すぐにそこへ結びつけていた。
「……」

留以は逡巡した。元締の源内と仕事人仲間、そして、義父の時之助には、打ち明けている。しかし、周平にまで話すのは抵抗があった。夫の平左衛門に話していない事柄を、眼前の男に話してもよいのだろうか。

「さようでござるか」

またもや周平は察したようだった。

「そうであるならば、なにも申しますまい。芸者姿もさまになっておりまする。ご亭主も惚れ直しましょう」

まだ表情は硬かったが、重い空気を振り払おうとしているのが感じられた。留以は念のために告げる。

「小糸という権兵衛名でございます。言うまでもないことと存じますが、外で会うたときには、素知らぬ顔をしてくださりませ」

「承知いたした」

「それで中川様は、なにゆえ、先程の場におられたのですか」

留以は訊いた。探りを入れるような問いかけになっていた。両国橋の騒ぎ、此度の騒ぎと、行く先々に周平がいる。偶然とは思えなかった。

「御役目の話でござるゆえ、仔細は申しあげられませぬが、おそらく殺められた坊

主は、富岡八幡宮の境内にある二軒茶屋に、行くところではなかったのかと存じます」

仔細は申しあげられないと言いつつ、答えていた。もっとも明かしてもいい内容なのかもしれない。

「だれかと密談をするつもりだったのですね」

留以が発したのは、確認の問いかけだった。建前上、周平は答えられないが、小さく頷き返したように見えた。

「ひとつ、お訊ねしたいのですが、先日、わたしの家においでになられたと夫から聞きました。おのぶによれば、尾行けられていないか、中川様は気にかけておられた由。深更においでになられたようですが、あの日の夕方にも様子を見に来られましたか」

気にかかっていたことを口にする。周平の顔がさっと緊張した。

「いや、それがしが訪ねたのは、深更だけでござる」

「では」

留以も不安を覚えている。向かいの本庄沙苗が見た侍らしき男は、夕方、裏木戸から中の様子を窺っていた。周平であれば安心できたものを、却って不安を呼び覚

ます結果になっていた。

「やはり、『土竜』はお辞めになられるのが宜しかろうと存ずる。諸々の事情は、お察しいたしますが、あまりにも危険すぎるのではないかと」

なかば諦めつつの助言に思えた。言い出したら聞かない気質であるのを、周平はよく知っている。当然のことながら、留以は右から左に聞き流した。

「中川様は、両国橋の騒ぎの折、命を落とされた黒崎半九郎様の護衛役を担っておられたのですか」

一歩、踏みこんだ問いかけを投げる。周平は今度も小さく頷き返すに留めた。言葉にはできないが、可能な限り真実を伝えたい。そんな気持ちが伝わってくる。

「黒崎様は吟味物調役として、寺社奉行様に出向いていた。そして、此度はお坊様が殺められた。お寺がらみの騒ぎでしょうか」

自問の呟きが出た。と同時に、またもや元締の源内が告げた言葉を思い出していた。

〝町人についてはわかりませんがね。小林様の心中騒ぎは、もうひとつの騒ぎ、両国橋の騒ぎに関わってくるかもしれません〟

留以は思いきって口にする。

「まさか、巷の心中騒ぎも、関わりがあるのですか」
「……」
周平は沈黙を返した。それが答えのように思えたが、留以は竹を割ったような気質ゆえ、訊かずにいられない。
「中川様」
「わかりませぬ」
答えて、続けた。
「旗本だった小林新右衛門は、もしかすると、関わりがあったやもしれませぬ。旗本でござりましたゆえ」
最後の部分に、ひときわ力をこめた。真っ直ぐ留以の目を見つめている。お真佐とも話したことだが、旗本株や御家人株といった金になる株を担保にして、金を借りたのかもしれなかった。
「他の心中騒ぎとの関わりは」
留以の問いかけを遮るように告げた。
「まだ調べはついておりませぬ」
「先程、殺められたお坊様は、なんというお寺の方なのですか。密談の相手という

のは、もしや……」

「小糸さん」

周平は遮って、笑った。

「芸者の小糸さんには、関わりなきことではないかと存じまする。三味線や踊りの稽古をなさるのが宜しかろうと」

「皮肉ですか」

つんと横を向いた。軽く下唇を噛みしめている。

「その癖も昔のままでござるな。稽古で負けて悔しいときや、思いどおりにならないとき、決まって下唇に血が滲みました」

「え」

思わず唇に手をあてていた。留以に向けた周平の笑顔もまた昔のままだった。懐かしさとせつなさが、こみあげてくる。

「中川様も早う所帯をお持ちなされませ。三男坊とはいえ、今は御目付の兄上様の配下として、立派に御役目をお務めなされているではありませんか。どなたかよいお方はおられぬのですか」

ごまかすように言っていた。ひとときの感傷に引きずられてはならないと、自分

に戒めている。
「留以殿が薦めてくれる方ならばと思うております」
　周平は意外な言葉を口にした。
「わたしに仲人役を務めろと？」
「さよう」
「かように申されましても……心がけておきますが、中川様のお心に添うお方を見つけられるかどうか」
「それそれ。真剣に悩む姿も、昔のままでござるよ」
揶揄するような口調に、ちらりと冷ややかな目を返した。
「からかうのがお好きなのも、昔のままでございますね」
「これは一本、取られ申した」
　明るい笑い声につられて、留以も笑っていた。周平が御新造を迎えた後、家族ぐるみの付き合いができれば、どれほど嬉しいことか。独り身を守っている姿を見る度、複雑な気持ちが湧いていた。
　心を読んだわけではないだろうが、
「それがしも、留以殿にひとつ、お訊ねいたしたき儀がござる」

周平は急に居住まいを正した。
「なんでございましょうか」
「野村殿を選ばれた理由でござる。剣術小町として名を知られていた留以殿には、まさに星が降るごとく、縁談話が持ちこまれた由。その中から野村殿を選ばれたのは、なにゆえでござろうか」
「夫は、夫だけは」
答えようとしたが、思い留まる。
「お許しください。お答えできませぬ。夫とわたしの間の話でござりますゆえ」
「さようか」
周平は執着しなかった。刀と脇差を持って、立ちあがる。留以も慌て気味に立ちあがった。
「もうお帰りですか」
「留以殿、あ、いや、小糸さんは望まぬやもしれぬが、これからもお目にかかることがあるのではないかと存ずる。くれぐれも御身をたいせつになされよ。無茶はせぬがよしでござる」
と、周平は階段を駆け降りた。あとに続いた留以も、玄関に降りて、草履を履い

た。戸を開けたときである。

四

「お」
船着き場にいた丈吉と目が合った。
「あら」
留以は、わざとらしいほど明るい声をあげる。
「この間はありがとうございました。丈吉さんのお陰で助かりましたよ」
「それじゃ、小糸さん。また寄らせてもらうよ」
すかさず周平が応じた。
「今日はわざわざすみませんでしたね。これからも宜しくお願いします。〈藤乃家〉の小糸をご贔屓に」
頭をさげて、周平を見送る。様子を見ていた丈吉が感心した様子で、留以と周平を交互に見やっていた。
「すごいじゃねえか。昼間から客が来るとはよ。たいしたもんだぜ、小糸姐さん」

「昔の知り合いなんですよ。ご祝儀を持って来てくれたんです。こんなところで立ち話するのもなんですから、あがってくださいな」

留以の誘いに、丈吉はいちおう手を振った。

「あいにく手元不如意なのさ。なさけない話だが、ここで飲むほど持ち合わせがなくてね。今日は遠慮しておくよ」

口では断っていたが、表情ではあがりたいと訴えていた。やりとりが聞こえたに違いない。

「ツケでかまいませんよ」

女将の千代が顔を出した。

「一見だってのに、いいのかい」

これまた丈吉は通人のふりをする。そんなにがっついちゃいねえと、必死にごまかしていた。本心は見えみえだったが、女将もまた心得ている。

「もちろんですよ。小糸さんのお知り合いは、〈藤乃家〉にとってはお得意様。さあさ、あがってくださいな」

千代に促されて、丈吉は中に入った。

「どうぞ、丈吉さん」

留以は、二階の座敷に丈吉を案内する。風を通すために開けておいた丸窓を、閉めようとしたが、

（岡田様）

文士郎が先程の周平同様、なにをするでもなく船着き場に佇んでいた。気になったが、話しかけるような真似はできない。丸窓の障子戸を静かに閉めた。待つほどのこともなく、お真佐が箱膳に載せた熱燗を運んで来る。

「すみません」

留以は受け取って、襖を閉めようとしたが、お真佐に小さな仕草で止められた。開けたままにしておけと告げていた。

頷いて、留以は箱膳を丈吉の前に置いた。

「丈吉さんは、命の恩人ですからね。あのとき、助けていただかなければ、あたしはどうなっていたかわかりませんよ」

銚子を手に取って、勧める。

「さあ熱いのを、どうぞ」

「悪いねえ」

丈吉は蕩けそうな顔で、お猪口を手にする。ひょっとこのような口をして、旨そ

うに酒をすすりあげた。
「くぅ。五臓六腑に染みわたるぜ」
「それは、よござんした。まだまだ冷えますからね。あたしもお相伴に与りたいんですが、三味線の稽古が終わってないんですよ。女将さんに怒られちまいますから」
先んじて言うと、小さく舌打ちする。
「ちぇっ、ひとり酒かい。ま、いいがね。それはそうと」
と丈吉は切り出した。
「二、三日前によ。姐さんそっくりの女を見たんだ。あまりにも似ているんでな。調べてみたのさ」
「言いたいことはわかっていますよ。八丁堀の定町廻り同心、野村様の奥方様ですね」
またもや先取りしたような言葉になっていた。
「なに？」
怪訝そうな丈吉に、
「よぅく存じあげておりますよ」

留以は、女将の千代が提案した話を口にする。

「江戸に出て参りましたとき、こちらの女将さんに言われたんです、野村留以様に瓜二つだと。剣術小町と謳われていたお方だとか。さらに町方の同心に嫁いだとなれば、噂話の好きな江戸っ子は放っておきませんよねえ」

自画自賛のようで面映ゆかったが、これも御役目と割り切った。丈吉に怪しまれてはならない。

「まあ、そうだな。調べるほどのこともなかったぜ。顔も名前も知れわたっていたよ」

「女子ながらも剣術の腕前は、慥かだとも訊きました。それで、あたし、剣術の型だけでも教えていただけないかとお願いにあがったんです。常々剣舞をやってみたいと思っていたもんですから」

「ははあ、剣舞かい」

丈吉は、わかったような、わからないような顔をしていた。花柳界には、さほど通じていないのだろう。

「あたしも初めてお目にかかったときは驚きました。本当にそっくりなんです。気味が悪いほど似てました」

留以は大仰に目を丸くしてみせた。
「確かにな。驚くほど似てたぜ」
丈吉も頷き返している。
「そうかい、他人の空似かい」
「ええ。留以様もなにか感じることがあったんでしょう。てっきり断られると思っていたんですが、快くお引き受けいただきました。そのうち二人揃ったところを、丈吉さんにも見ていただけるかもしれませんよ」
虚実ないまぜの話を、とにもかくにも纏めあげた。我知らず、元締の脚本を頭に置いていたのかもしれない。なかなかの出来ではあるまいか。
「姐さんみてえな別嬪が、二人も並んだ日にゃどうなることか。ありがたすぎて、酒が飲めなくなっちまわあ」
丈吉は信じたような顔をしていた。
「お上手だこと」
留以はすかさず酌をする。丈吉が本当に『もがりの猛蔵』の手下なのか。なんとかして早くそれを聞き出したい。こういう機会は多くないだろうし、敢えて多く持ちたいとも思わなかった。

「丈吉さんは、上方から来たんでしたよね」
まずはあたりさわりのない話を振ってみる。
「ああ。生まれは奥州だがな。その後は上方暮らしよ。江戸に出て来たのは、姐さんに会った日の、そう、三、四日、前だったか。今は楊枝を作っているが、上方では小間物屋、貸本屋、煙草売り、はては鳶の職まで、まあ、なんでもやったよ。そろそろ所帯を持ちてえと思ってな。江戸に来たってわけさ」
今度は丈吉に先読みされたような感じだった。江戸に来るまでは、なにをしていたのか。詳しく訊こうと思ったのだが、猛蔵の手下であれば、真実を話すわけがない。
「江戸には、いい女がいるのかしら」
妬くふりをすると、丈吉はすぐに答えた。
「冗談じゃねえや、まだいねえよ。こうやって姐さんに出会えたのも、なにかの縁だろうぜ。時々、寄らせてもらうよ」
手を握ろうとしたが、留以はさりげなくかわして、酒を注ぐ。
「そういえば、さいぜんの騒ぎ、見ましたか」
次に投げたのは、坊主が殺された騒ぎだった。必要な話を引き出そうと、懸命に

考えているのだが思いつかない。焦りを隠して、返事を待っていた。
「斬られたところは見なかったがね。小判が派手に飛び散ったらしいぜ。こうやって腹のあたりに抱えていたんだろうよ」
仕草で表して、続けた。
「菓子折かなにかに入れていたのかもしれねえや。それが地面に四散したとか。おれだったら小判に気を取られて拾っているうちに、あわや御用となるところだがよ。下手人のやろう、見向きもしなかったみてえだな」
不意に声をひそめる。
「ありゃ仕事人の仕業かもしれないぜ」
「仕事人、ですか」
留以は世間知らずの田舎者を演じた。
「噂には聞いたことがあります、恐ろしい頼み事を請け負う者が江戸にはいると。でも、本当にそんな人がいるんですか」
「いる」
断じた丈吉のお猪口に、留以はまた酒を注いだ。
「ご存じなんですか。丈吉さんは、その」

口ごもると、
「仕事人かい」
丈吉が訊いた。
「ええ」
「直接は知らねえがな。頼みたけりゃ、仲立ちしてやってもいいぜ」
「おお、恐い。やめてくださいな、恐い話をするのは。鳥肌がたっちまいましたよ」
「お坊様が斬られるなんて、世も末ですねえ」
お真佐が、新しい銚子を持って来た。
「大金を持っていたらしいですよ」
留以の言葉を聞きながら、お真佐が注ぎ役になる。
「どこに行くつもりだったんでしょうね。だれかに届けようとしたんでしょうか」
さりげなく丈吉に問いかけを投げた。両手に花となって、ますます鼻の下が伸びている。丈吉はお真佐にも、ちらりと気があるような目を返した。
「さあてな。小糸姐さんにも言ったが、おれだったら落ちた小判を拾い集めるのに夢中だったろうぜ。今頃は、これだ」

両手を前に出して、お縄になった仕草をする。留以は笑いながらも忙しく考えていた。なにを、どう話せば、猛蔵の手下だと確かめられるだろう。

「二、三枚、くすねたやつがいるかもしれませんね。それはそうと、丈吉さん。さいぜん煙草売りもやったと言っていましたけれど、丈吉さんは、煙草は喫らないんですか」

煙草の話がふと口をついて出た。酒を飲む男の多くが煙草も楽しむのを留以は知っている。亡き父もそうだった。義父の時之助は、剣術の稽古に差し支えると言って喫らないが、実父の天城小十郎は煙草好きだった。

そこまで考えたとき、

天城家から失くなっていたという品物のことが浮かんだ。姉の織江によれば、銀煙管には梅の意匠が彫られていたらしい。そして、今は妹の朋江のもとにある印籠には鶯が彫られている。父が特別に作らせたものなのかもしれなかった。

「煙草はたまに喫るぜ」

答えた丈吉に、留以は艶っぽい流し目をくれた。

「まあ、そうですか。実はあたしも煙草が好きなんですよ。それで煙管を集めているんです。中には珍しいものもあるでしょう。見せてもらうだけでも楽しいもんで

すから」

お真佐から銚子を受け取って、また注ぎ役になる。口数の少ないお真佐は、空になった銚子を盆に載せ、階下に降りて行った。仲居役をしつつ、いざとなれば留以の援護役を務めるつもりなのかもしれない。襖を閉めない理由を、留以はそう察していた。

「煙管か。それなら、ひとつ、持ってるぜ」

丈吉は少しの間、懐や袖を探っていたが、やがて、鈍い輝きを放つ銀色の煙管を右袖から出した。花らしき意匠を目にして、留以はどきりとする。

五

（まさか）

逸る心を懸命に抑えた。もしかしたら、父の煙管ではないのか。丈吉は、やはり、猛蔵の手下なのか。

「ちょいと見せてもらってもいいかしら」

留以は、平静を装って問いかけた。

「おう。もちろんさ」

渡された煙管を、留以は、食い入るように見つめた。花の意匠ではあるものの、梅ではない。桜が描かれていた。

「華やかな煙管ですね」

すぐ丈吉に返したが、ふたたび忙しく考えている。父の形見と思しき煙管と印籠。それをもとにして、話を引き出せないだろうか。

「あたし、特に花の絵が入った煙管が好きなんですよ。桜や牡丹、撫子や菊。美しく咲く花に、あやかりたいと思いましてね。ああ、そうそう、以前、梅の絵が入った煙管を見たことがあります」

梅。の部分で、丈吉の眉がぴくりと動いた。

「丈吉さんも見たことがあるんですか、梅の煙管」

すかさず訊いている。

「いや、梅だったかどうかはわからねえや。そうかい、小糸姐さんは花の絵が入った煙管が好きなのかい。上方には、たまに京から古い品物が流れて来るんだがよ。いわくありげな煙管も見たことがある。いくつか買っておけばよかったぜ」

ついと丈吉は、目を逸らした。梅の煙管の話が出たからではないのか。目を合わ

せられない理由があるのでは……まじまじと見つめすぎただろうか。
「なんだったら、この煙管、姐さんにやってもいいぜ」
太っ腹なところを見せる。が、ごまかそうとしているようにも見えた。梅の煙管の話から、留以の気を逸らさせようとしているような……。
「聞こえましたよ、丈吉さん。なにを狙っているのやら。煙管ひとつで騙されちゃ駄目ですよ。それが男の手なんですからね」
女将の千代が、盆に肴を載せて来た。
「なに言ってやがる。煙管ぐれえで姐さんの気が引けるとは、はなから思っちゃいねえさ。おれはただ花の煙管を集めていると聞いたからよ」
「お気持ちだけ頂きますよ」
留以は言った。
「春を表すような煙管じゃないですか。大事にしてくださいな。見せてもらえただけで充分です。この次、丈吉さんが来てくれたときに、あたしが集めている煙管もお見せしますよ」
「おや、小糸さんも満更ではない様子。次の約束を取りつけられましたね、丈吉さん。小糸さんほどの別嬪芸者に、ここまで言わせるとは凄いじゃありませんか。男

冥利につきるでしょう?」

からかうような千代の言葉に、丈吉は笑みを返した。

「ああ。悪い気はしねえや」

「ですが、あたしは『そげもの芸者』ですからね。丈吉さんのお気に召すかどうか。まだ本性を顕していませんから」

留以は牽制したつもりだったが、

「その本性ってやつを見てえもんだな」

丈吉は、にやにやしていた。逆に好色心を刺激されたようだった。

「自分で『そげもの芸者』などと言う芸者はいませんよ。小糸さんは、本当に変わり者ですねえ」

千代は笑って、丈吉の箱膳に持って来た肴を置いた。小松菜のお浸しや牛蒡のきんぴら、漬け物といった素朴な小鉢を並べる。

「あたしが作ったものなんですよ。小糸さんじゃありませんけど、丈吉さんのお気に召すかどうか。お腹が空いているようなら仕出し料理を取りますが」

できるだけ金を使わせまいとしていた。家庭的なもてなしこそが、男心をつかむコツかもしれない。

「いや、これで充分さ。すまねえな。気を使わせちまってよ」
丈吉は女将の心遣いに気づいていた。
「たいしたことじゃありませんよ。小糸さんは売れっ妓になりますからね。こうやって、のんびり付いてもらえるのも今のうちだけです。ときには、とうがたちすぎた元芸者が、お相手することになるかもしれませんけれど、そのへんはお許しくださいな」
千代はそつなく応じて、座敷をあとにする。階段を降りて行く足音を聞きながら、留以は丈吉の杯に酒を注いだ。
「丈吉さんは、今までこのあたりにはおいでにならなかったんですか」
ふたたび探りを入れている。
「たまに裏手の子ども屋には来たがな。芸者遊びをするほどの余裕はねえや。小糸姐さんとも、これから何度、逢えるやら」
「安く済ませますよ。女将さんはあのとおりのお人で……」
階下の声を聞き、留以は言葉を切る。玄関先でお真佐がだれかと話していた。男の声が聞こえている。二言、三言、かわした後、
「そんな人はいませんよ」

お真佐の叫ぶような声がひびいた。
「なんの用ですか」
千代がそれに続く。
「どけ。中に入れろ」
「駄目です」
と、お真佐。
「いるのはわかっているんだ」
「ここに入るのを見たんだからよ」
男はひとりではない、少なくとも二人はいるようだった。丈吉は腰を浮かせて、右手を懐に入れている。匕首（あいくち）でも隠し持っているのだろうか。鋭い目を廊下に向けていた。
「丈吉さん」
留以は、不安なふりをする。丈吉が本性を顕すのではないかと、内心、次の展開を待っていた。
「二階か？」
階下のやりとりは続いている。

「いいえ。二階にいるのは、うちの芸妓ですよ。お客はいません。お探しの人は来ていませんよ」

千代が懸命に押しとどめていた。

「降りて来い、『木賊の丈吉』」

男のひとりが大声をあげる。

「逃げられねえぞ」

「丈吉よ。取って食おうってわけじゃねえ。話をしに来ただけなんだ。外に出て来いや」

「来ねえなら、こっちから行くぜ」

もうひとりも声をはりあげた。留以は一瞬、悩んだが、丸窓の障子を開けた。

「ここから屋根伝いに逃げて」

「だが」

「早く！」

と言っているうちに、男たちが駆けあがって来た。留以はとっさに前へ出ている。丈吉を庇うように立ち塞がったが、ひとりの男に軽く払いのけられた。

「あっ」

大袈裟によろめいて、畳の上に倒れる。
「姐さん」
逃げそこなった丈吉に、留以は助け起こされた。座敷に入って来たのは、総勢四人。見るからに堅気ではない様子の男たちだった。
「外に出ろ」
ひとりが促した。
「堅気の衆に迷惑をかけるのは、てめえもいやだろう。それとも女を楯にして、逃げまわるか」
「だれだ？」
丈吉は訝しげに問いかけた。
「見たことのねえ面ばかりだぜ。勘違いしているんじゃねえのか、ええ、相手を間違えちゃいねえかい」
懐に右手を入れたまま、ゆっくり立ちあがる。留以には後ろにさがれと、左手で合図を送っていた。突然の訪問客同様、女を巻きこむのは本意ではないのかもしれない。留以は壁際までさがった。
「おれたちは〈相模屋〉よ」

ひとりの答えに、丈吉の横顔が引き攣る。
「〈相模屋〉だと？」
「憶えがあるだろう。なに、たいした用じゃねえ。ちょいとそこまで面ぁ、貸してくれりゃ済む話よ」
来い。と、兄貴格らしい男は顎を動かした。観念したのか、丈吉は小さな吐息をつき、男たちのあとに付いて行く。
「丈吉さん」
追いかけようとした留以を、別のひとりが手で制した。
「別嬪さんよ。あいつには関わらねえこった。盗人だからな。もしかすると、この家に押し入るつもりだったのかもしれねえ。下調べだったのかもしれないぜ」
「盗人」
独り言のように呟いた。では、やはり、『もがりの猛蔵』の手下なのか。丈吉と四人が出て行くのを待って、留以は階段を駆け降りた。

六

「お真佐さん」
留以が呼びかけると、玄関先にいたお真佐が振り返る。
「様子を見た方がいいと思いますよ」
「でも」
留以は玄関の三和土に降りて、草履を履いた。
「〈相模屋〉の名は、小糸さんもご存じでしょう。政五郎親分は、任侠気のある男として、町方にも一目置かれていますからね」
「あの〈相模屋〉ですか」
平左衛門の口から時々耳にする屋号だった。〈相模屋〉の政五郎は、新門辰五郎と列んで、江戸を代表する大親分である。町奉行所に手を貸すことも珍しくない。
今回のこれもそうなのだろうか。
「お真佐さんの言うとおりです。出て行かない方がいいですよ」
女将の千代も止めたが、留以は戸を開けて、外に出る。船着き場の前に、丈吉と

四人が立っていた。剣呑な気配を察したに違いない。〈藤乃家〉に並ぶ居酒屋や一膳飯屋は、次々に戸を閉めた。

小名木川沿いの一角は、不気味な静けさに包まれる。

「それで、おれになんの用だ」

丈吉は訊いた。顔が白っぽくなっている。

「通り名は『木賊の丈吉』。木賊の茎ってのは、物を研いだり、磨くときに使うんだってな。てめえは、親分の『刀』を磨くのが得意らしいじゃねえか」

ひとりが意味ありげな言葉を投げた。親分の刀というのが、男の逸物を指しているぐらいは、留以にもわかった。つまり、丈吉は親分の男妾なのだろう。

（その親分とは、だれ？）

息を詰めて、見守っている。

「は。くだらねえことを言うもんだぜ」

丈吉は、必死に虚勢を張っていた。

「木賊色の着物が好きだから、そう名乗っているだけよ。見てみろ、今も着ているじゃねえか、これさ」

ばさばさとわざとらしく、片袖を振った。黒みを帯びた緑色は確かに木賊色だが、

通り名の意味は単なる色ではなく、もうひとつの色話のように思えた。
「どうでもいいことだ、そんな話は」
男は相手にしなかった。
「てめえは新顔だからよ。調べるのに、ちょいと手間取っちまってな。挨拶するのが遅れたってわけだ。まあ、だからこそ『もがりの猛蔵』は、てめえに江戸の下見役を命じたのかもしれねえがな」
続けて投げられた言葉に、留以は慄えた。
「……」
もがりの猛蔵、もがりの猛蔵と、耳の奥で木霊のようにひびいていた。眼前に仇の手下がいる。答えを教えてくれた〈相模屋〉に礼金を払いたいほどだった。
「勘違いするな」
それでも丈吉は首を振る。
「おれは、そのなんとかという男の子分じゃねえ。上方から来たばかりで、右も左もわからねえや。〈相模屋〉さんに挨拶しなかったのは……」
「とぼけるんじゃねえ！」
男が恫喝した。兄貴分なのかもしれない。他の三人は黙りこんでいる。それがよ

けいに不気味だった。

「てめえが、猛蔵の手下だってのは、わかっているんだよ。吐きたくねえってんなら、好きにするがいいさ。その気にさせるのは、おれもきらいじゃねえ。猛蔵に仕込まれた技ってのを、見せてもらおうか」

衆道の話をしながら、その実、拷問を匂わせていた。じりっと四人の輪が縮まる。丈吉は船着き場の端に追い詰められた。もう後がない。繋がれていた屋根船を、ちらちらと盗み見ている。

「船で逃げるのは無理だな」

視線を読んで、男は言った。

「舫綱を解いている間に、この世とおさらばだ。さあ、吐け。『もがりの猛蔵』の手下なんだろう、正直に吐け」

「違うと言っているじゃねえか。なんだったら、〈相模屋〉さんに行ってもいいぜ。政五郎親分に直接、お目にかかって話してもいい」

「〈もがりの猛蔵〉の手下だと認めろ。認めたら、親分に会わせる」

「だから違うと……」

「うるせえなあ」

不意に繋いであった船から声がひびいた。だれかが屋根船の障子戸を開ける。留以の位置からは船の中が見えなかったため、気づくのが遅れた。

（岡田様）

屋根船から出て来たのは、なんと岡田文士郎だった。お真佐が後ろから袖を引いた。元締が描いた絵図に従っているのだろうか。それゆえ船着き場にいたのだろうか。答えは得られない。

留以は観客のひとりになっていた。

「さいぜんから、雀のように囀りやがって。うるさくて寝られやしねえ」

文士郎は、船から岸に飛び移る。おもむろに持っていた刀と脇差を腰に差した。追い詰められていた丈吉の隣に立つと、

「いくら出す？」

とぼけた顔で訊いた。

「は？」

呑みこめなかった丈吉に、苛立った声を返した。

「四対一じゃ、かなわねえだろうが。だから助太刀してやろうと言っているのさ。多勢に無勢ってのが気に入らねえからな。で、いくら出す？」

「い、一両でどうだ」
丈吉は早くも文士郎の後ろに隠れている。
「吝くせえやつだぜ。自分の命の代金が、わずか一両とはな。さっさと連れて行け。思う存分、痛めつけてやるがいいさ。そのなんとかという野郎のことを吐くまでな」
前に押し出そうとしたが、
「二両、ええい、三両でどうだ」
丈吉の答えを聞き、文士郎はにやりと笑った。
「というわけだ。おまえさんたちには、なんの怨みもねえがよ。三両分の仕事はしねえとな」
腰を沈めて前に出る。
「てめえ」
兄貴分らしき男が懐から匕首を出した。それが合図となって、他の三人も匕首を構える。文士郎は、じりじりと間合いを詰めて行った。数では勝っていたが、力の差はあきらか。四人は押されるようにさがる。
（今のうちに）

留以は、丈吉にこちらへ来いと合図を送った。この騒ぎは元締の絵図に従うがゆえのことなのか、あるいは文士郎が小遣い稼ぎを思いついたのか。はっきりしない以上、丈吉を逃がすわけにはいかなかった。

そろそろと、丈吉はこちらに来る。文士郎の後ろを通って、少しずつ〈藤乃家〉に歩を進めていた。一触即発、文士郎は四人と睨み合っている。だれかが匕首を突き出せば、次の瞬間、命の灯がひとつ消えるのは必至。

四人は完全に呑まれていた。

「退け」

兄貴分らしき男が、低い声で命じた。男たちは文士郎から目を離さないようにして、さがり始める。脅しのつもりだったのか、

「はっ」

文士郎は深く踏みこんだ。そのとたん、四人は踵を返していた。背中に〈相模屋〉の屋号が入った袢纏が、角を曲がって見えなくなる。

「た、助かった」

丈吉は倒れこむようにして、〈藤乃家〉に駆けこんで来た。少しの間、文士郎は四人が消えた角を睨みつけていたが、

「逃げたようだな」
ようやく緊張を解いて、こちらに来る。
「旦那」
丈吉の目には、感謝が満ちあふれていた。
「助かりましたぜ」
「礼よりも、三両だ。びた一文、まけられぬぞ」
手を差し出した文士郎に、丈吉は、へつらうような笑みを向ける。
「まずは一献といきましょう。その後、遊女屋にご案内しますよ」
自分の家のような顔をして、〈藤乃家〉に入って来た。留以は笑みをくずさない。あくまでも他人のふりをしながら、文士郎を迎え入れた。
「さあさ、どうぞ、二階におあがりくださいな。とんだ邪魔が入っちまいましたよ。物騒な世の中になりましたねえ」
丈吉の背中を冷ややかに見つめている。
仇と狙う男の手下が、飛びこんで来たと思った。

第六章　叫び

一

「前座の小芝居を打ちました」
源内は説明した。
「〈相模屋〉の政五郎親分とは、昵懇の間柄でしてね。丈吉の調べを頼んでおいたんですよ。この話はすでにお聞きかもしれませんが、丈吉は『もがりの猛蔵』の仲間になってまだ日が浅いとか。調べるのにちょいと手間取りました」
慥かな話でなければ動けない。丈吉が『木賊の丈吉』の通り名を持ち、間違いなく猛蔵の手下だとわかった時点で、源内は岡田文士郎を配した。
「留以様には、芸者として探りを入れていただかなければなりません。思うように

動けなくなると思いましてね。岡田様にも手伝っていただくことにしたわけです。ええ、もちろん〈相模屋〉とは事前に話をしておりました」

助人を買って出れば、丈吉は文士郎を信頼するだろう。〈相模屋〉の手下は打ち合わせどおりに、わざと丈吉を脅したのだった。

「前にも申しあげたと思いますが、丈吉は、しばらく泳がせておいた方が宜しいのではないかと存じます。彼の者に張りついていれば、猛蔵の動きがわかります。いつ江戸に出て来るのか、また押し込みをするつもりなのか。網を張って猛蔵を待ちかまえるのが、得策ではないかと存じます」

十一年目にして、ようやく動きを見せた『もがりの猛蔵』。さまざまな手がかりを得るために、留以は『そげもの芸者』に化ける段取りをつけていたが――。

土竜として動く前に、入水心中の生き残り、小林隼太に逢っておきたかった。次はいつ時間が取れるかわからない。

二日後の午前、逸る心を抑えながら、留以はおのぶと一緒に竪川沿いの河岸を東に向かっていた。

「お待ちください、留以様。そんなに急がなくても、隼太様は逃げやしませんよ」

おのぶの呼びかけは、聞こえないふりをした。

「ええと、二ツ目之橋のところを左に曲がる」

懐から紙片を出して確かめつつ、角を左に曲がる。隼太の叔父——川瀬弥次郎から聞いた家の場所が記されていた。たまたまなのだが川瀬家は、あの夜、留以が仕事をした場所のすぐ近くだった。

「このあたりでしたね」

つい足を止めている。今日は定町廻り同心の妻女らしい装いをしていたが、それを気に留める者の姿はない。昼間でも人通りの少ない場所だった。

「ここで仕事をしたとき、わたしは、ふと人の気配を感じて振り向きました」

あの夜の再現とばかりに、留以は左の肩越しに振り返る。刹那、人影が素早く家の陰に隠れた。

「わたしと亭主は、あちらに控えていましたが」

おのぶが指したのは、反対方向の曲がり角。仕事を見られた場合のことなども考えて、源内は元仕事人の夫婦を常に付けてくれる。

「人影など見えませんでしたよ。ちらりとでも姿が見えれば、わたしはともかくも亭主にはわかるはずです。目がいいですからね」

何度目になるだろう、気休めにしか思えなかったが、小さく頷いた。
「そう、ですね」
「宜しいのですか」
おのぶに言われて、はっとした。
「そうでした。過ぎし日のことよりも、今は隼太殿です」
ふたたび小走りになっていた。おのぶが先に行って、家を探し始める。下女はぬかりなく、袖武鑑を取り出していた。右に曲がり、さらに東へ進む。相変わらず周囲は静まり返っていた。
（食事はちゃんと摂れているでしょうか。話はできるようになったでしょうか。隼太殿は、いかような声で話すのでしょうか）
想像する声が、耳の奥でひびいている。
〝母上〟
少し高めの可愛らしい声だ。まさか留以のことを忘れてはいないだろうが、隼太は一度、地獄を経験している。心にどんな変化が起きるかわからなかった。
「このあたりではないのですか」
留以は気が気ではない。

「たぶんこの家だと思いますよ」
ほどなく、おのぶは一軒の家の前で足を止めた。規模の異なる武家屋敷が林立する区域だが、いかにも貧乏御家人といった風情の、質素な門構えの家だった。
「ご免くださいまし」
留以は潜り戸を叩いたが、出て来る者はいなかった。
「家の中にいるのかもしれませんね。お待ちください。わたしが確かめて参ります」
おのぶが潜り戸から中に入る。留以も腰を屈めて、覗きこんだ。おのぶが玄関先で呼びかけると、女房らしき女が出て来た。三十前後だろうか。家の中は玄関先でも暗いため、地味な色目の着物であることぐらいしかわからなかった。
会話は聞こえないが、おのぶはおそらく来意を告げたに違いない。留以は目を凝らして、隼太が出て来ないか待っている。すぐに取り次いでもらえると思ったのだが、川瀬弥次郎は不在だったのか。
「どうも話が通じません」
おのぶが首を傾げながら戻って来た。
「通じないとは、どういう意味ですか」

留以は潜り戸の前に屈みこんだまま、ちらちらと玄関に目を走らせている。一度、奥に引っこんだ女が、男を伴って現れた。

「それが」

おのぶの返事が終わらないうちに、潜り戸から男女が出て来た。留以は辞儀をして、挨拶する。定町廻り同心の妻女だと話してから、念のための問いかけを投げた。

「こちらは、川瀬弥次郎様のお屋敷でございますか」

屋敷と言えるほどの造りではないが、いちおう相手をたてている。

「いかにも。それがしが、当家の主、川瀬弥次郎でござる」

男の答えに、留以は当惑した。

「え？」

まじまじと相手を見つめている。年は女房と同じぐらいで三十前後、のっぺりとした胡瓜のような顔の持ち主は、留以が知っている弥次郎ではなかった。似ても似つかぬ顔には、誠実さではなく、困惑が浮かびあがっている。

「失礼ですが、番町に屋敷を賜っておられる御旗本、小林新右衛門様の弟君でございますよね」

高まる不安を押し隠して、訊いた。

「さよう。なれど五歳でこの家の養子になった後は、小林家とは疎遠になり申した。二親の死に目にも逢えなんだ次第。ほとんど絶縁状態でござったが」

いったん言葉を切ったのは、話すのに多少の勇気が必要だったからだろうか。

「先日、親戚から兄夫婦が大川に入水した知らせを受け申した。急ぎ屋敷を訪ねたところ、すでに入れなくなって……」

「隼太殿はいないのですか」

留以は叫ぶように言った。

「ひとりだけ生き残ったのです、隼太殿は。川瀬様にとっては甥でございます。年はまだ五歳、わたくしの妹の家に預かってもらう段取りをつけたのです。なれど迎えに来られました、川瀬弥次郎様が」

どっ、どっ、どっ、と心ノ臓が異様に脈打っていた。話しているうちに、恐ろしい事実を悟っていた。

あのとき、隼太を連れて行った川瀬弥次郎は贋者なのだ、と。

「あぁ、隼太殿」

座りこみかけた留以を、おのぶが支えた。

「留以様」

「宜しければ中に」
女房が潜り戸を指し示した。おのぶと女房に支えられて、どうにか歩けたものの、留以は玄関先に座りこむ。主にあがるよう勧められたが、その言葉は心に届かなかった。
「どこに……隼太殿はどこに？」
ぐるぐると同じ自問が頭の中でまわっている。やはり、確かめるべきだった。一日、いや、半日でもいい。調べる時をもらい、川瀬家に使いをやるべきだった。それを怠った己に腹をたてている。
「小林様から文などは届いていませんか」
おのぶが代弁者となった。
「届いておりませぬ」
弥次郎は答えた。
「先程も申しあげましたが、それがしは親戚からの知らせで、騒ぎを知ったような有様でござる。甥が助かったらしいと聞いたのは」
と、女房を見る。
「三日後ぐらいじゃありませんでしたか」

その答えに、弥次郎は小さく頷き返した。

「確かそのあたりでござる。なれど、ご覧のとおりの貧乏御家人。今も内職の傘張りに勤しんでいたところでござってな。生き残った甥を引き取る云々は、ちらとも思い浮かべませなんだ」

かなり正直な言葉に思えた。下手に名乗り出れば、甥を引き取るはめになるかもしれない。食い扶持が増えるのは死活問題だ。小林隼太のことは、夫婦ともに考えないようにしていたのではないだろうか。

「迂闊でした」

留以は、ぽつりと言った。悔やんでも悔やみきれない。

「確かめるべきだったのです。隼太殿は、贋者に抱かれて、わたしを見つめていました。なぜ、別れなければならないのか、わからないようでした。言うたのです、これからはわたしを母と思うてほしいと。それなのに」

あふれる涙を拭うことさえ忘れていた。

「あの手を離してはいけなかったのです」

独り言のように言った。小さな手、心地よい温もり。きつく抱きしめると、隼太も留以の首にまわした腕に力をこめた。それが隼太の『返事』なのだと、留以は感

じた。
「いったい、どこに」
はっとする。
「もしや」
思いついたとたん、留以は走り出していた。いてほしい、いや、いるわけがない。行っても無駄だと心のどこかでわかっていたが……。
それでも留以は走っていた。

二

なぜ、隼太は連れ去られたのか？
（なにかを知っていると思うたのでしょうか）
自問しながら、留以は、心の中で叫んでいる。
（許してください、隼太殿）
きっと生きている、無事でいてくれるに違いない。贋者の川瀬弥次郎は、悪人には見えなかった。隼太を助けてくれる、はずだ。

（隼太殿）

急いだつもりだったが、番町の小林家に着いたときには、七つ（午後四時）の鐘が鳴り終わっていた。屋敷の周囲も川瀬家同様、静寂に包まれている。閉門を申し渡された家の門は、固く閉ざされていた。

おのぶが知らせたのだろう。姉の近藤織江と甥の真吾が近づいて来た。

「留以」

織江の呼びかけに、大胆な提案を返した。

「真吾殿。わたしが踏み台になりますゆえ、中に入ってくださいませぬか。潜り戸の錠を開けてほしいのです」

「おやめください、中にはだれもおりませんよ。万が一、お上の耳に入ったときには、大旦那様にご迷惑がかかるかもしれません。帰りましょう、留以様」

懇願するようなおのぶの言葉は無視する。

「駄目ですか」

屈みこんで、甥の目に目を合わせた。

「おまかせください」

少し高い声は、留以が思い描く隼太の声に重なる。隼太と同い年の真吾にとって

留以は、憧れの叔母上。頼まれれば、無理をしてでも実行しようとする。

見かねたに違いない。

「わかりました。どうぞ、わたしを踏み台にしてください」

おのぶが踏み台役を買って出た。

「すみません」

「わざとらしく真吾様に頼むような真似をなさらなくても、よいではありませんか。はじめから踏み台になってくれと、わたしに仰ればよいのです」

おのぶは、ぶつぶつ言いながら両手と膝をついた。留以は背中に乗って、塀を軽々と乗り越える。驚いた姉がまた呼びかけたが、その間に表門の潜り戸を素早く開けていた。

「どうぞ」

と、おのぶを促した後、早口で言い添えた。

「少し冷えて参りました。お身体にさわりますゆえ、姉上は真吾殿と家にお戻りくださいませ」

返事は聞かずに、屋敷に足を向けた。玄関も閉ざされており、廊下は雨戸を閉められている。勝手口にまわると、戸は打ちつけられていなかった。だれかが無理や

り開けたのか、戸を打ちつけた木が地面に落ちている。
「どなたかおいでになりますか」
留以は念のために呼びかけた。が、応えはない。格子窓から入る夕焼けが、ひっそりとした台所を浮かびあがらせている。膳台や竈、流し場などの陰影が、在り(あ)し日の姿をわずかにしのばせた。
「わたしもお供いたします」
おのぶが後ろに来る。
「心強いこと」
「これをお持ちください」
おのぶが差し出した小太刀を鞘袋から出した。帯に鞘袋を挟み、留以は台所に入る。心中騒ぎから、さほど時は経っていないのに、膳台はうっすらと埃(ほこり)を被っていた。主を失ったとたん、家からも命の灯が消える。
「失礼いたします。わたしは近所の近藤と申します」
挨拶しながら、留以は台所の板の間にあがった。人がいたときの場合を考えて、実家の姓を名乗っている。雨戸が閉められた家の廊下は、真っ暗でなにも見えない。
「おのぶ」

「はいはい」
「返事は一度で充分です。全部、開けなくてもいいですから」
「はい」
おのぶは、なかば諦め顔で廊下の雨戸を開け始めた。庭にいた織江と真吾が、びくっとして、こちらを見た。
「家にお戻りくださいと、言うたではありませんか。ここは埃にまみれております。姉上と真吾殿は、そこでお待ちください」
言い置いて、留以はそろそろと歩を進めた。廊下にも埃が積もっていた。人が入ったのであれば、足跡が残っているはずだ。慎重にそれを確かめながら、座敷の様子にも目を走らせる。
（どこが隼太殿の居室だったのでしょうか）
五歳はまだ子供だが、小林家は中級旗本の部類に入る家柄。隼太は一人で寝むよう、躾けられていたのではないだろうか。
「それにしても」
おのぶが、ぼそっと言った。
「本当に道具がありませんねえ。なにもかも売り払ったんでしょうか。中はがらん

どうですよ」

虚しさを覚えているのかもしれない。寂しげな口調だった。留以はそれでも注意深く座敷を見まわしている。なにか手がかりが残っていないだろうか。隼太を連れ去った男は、ここに来ただろうか。

そして、肝心の隼太はどこにいるのか。

「あ」

留以は奥の座敷で、文机を発見した。ぽつねんと置いてある様子が、なぜか隼太を想起させた。と同時に、留以は夫の日記帳のことも思い出している。文机の抽出に入れられた日記帳には、

〝日々是平安也〟

という文言が、毎日、記されていた。ただそれだけなのだが、盗み見る度、ほっと心がなごむようになっていた。小林新右衛門の場合はどうだろう。

留以は試しに抽出を開けてみた。一番上の抽出に、折り畳んだ文のようなものが入っていた。

「遺書ですか」

おのぶが隣に来る。

「そうかもしれません」
広げてみたが、座敷は暗すぎて読めない。留以はおのぶと廊下に出る。夕あかりを頼りにして、記された内容を確かめた。
「よくわかりませんね」
意味不明な、短い文言が記されていた。
「桜に殺された」
留以は小声で読みあげる。殺された、と記してある以上、やはり、遺書なのかもしれなかった。
「それは」
おのぶが横から覗きこむ。
「夕あかりのせいでしょうか。墨で記したものでは、ないように見えますが」
ごくりと唾を呑んだ。元仕事人の嗅覚が、墨ではないものをとらえたのだろうか。
夕あかりを受けた文は……血の叫びをあげていた。

三

消えてしまった小林隼太。

贋者の川瀬弥次郎は何者なのか。なぜ、隼太を連れ去ったのか。隼太が人になにか話すとでも思ったのだろうか。話されては困ることを、隼太は知っているのだろうか。しかし、話したくても話せないものを――。

二日後の夜。

「本日は、お招びいただきまして、ありがとう存じます。五行の構えを取り入れた剣舞をお目にかけたく思います」

短い挨拶の後、留以は、料理茶屋の座敷の舞台で踊り始めた。隼太のことは胸の奥深く仕舞いこみ、『土竜』に徹している。

場所は深川の富岡八幡宮境内に立ち並ぶ二軒茶屋の一軒〈伊勢屋〉の二階だった。芸者の装いはしているものの、ほとんど化粧はしていない。粋な辰巳芸者らしく、紅だけすっと引いていた。きめ細かな白い肌に紅い唇、そして黒地の着物が、見事な彩りをなしている。

扇子を小太刀に見立てて、上段の構えから、中段の構えに移る。お真佐の弾く三味線が、いい具合に音頭を取っていた。剣舞を見ている客は、今のところ、二人だけである。上座にいるのが、招かれた客人のようだった。

〝ひとりは、寺社奉行、本多中務大輔忠民様の家臣。真鍋直英様でござる〟

昨日、八木沢兵庫は告げた。密談の場を持つために、留以は、いったん野村家に戻っていた。真鍋は右側に座している。

〝本多家の御用人を務めていたお方でござる。今は本多家の寺社役に就いておられまする。明日の夜、〈伊勢屋〉を訪れることがわかりましたゆえ、芸者の小糸にお出まし願いたいと思うた次第〟

姓名などがわかっているのは、真鍋のみ。招かれる客がだれなのか、兵庫はつかんでいなかった。

〝帰るときに手下が尾行けて、何者かを突き止める所存。できれば名字だけでも、聞き出せぬかと思いまするが、まずは怪しまれぬのが第一でござる。無理はせぬようにお願い申しあげまする〟

今宵は、兵庫も客のふりをして、別の座敷に控えているはずだ。真鍋が招いた客については、姓名がわかった時点で、留以かお真佐が知らせる手筈になっていた。

（なにを企んでいるのか。それとも、すでに企みは始まっているのか）

留以は踊りながら、二人の客に時折、鋭い目を向けた。中段の構えから八相の構えに移すや、仮の敵を相手に刃を交える。お真佐の三味線がそれに合わせて、激しくなった。ひとつひとつの動作を決める度、客からは小さな吐息が洩れる。見慣れた歌舞伎の舞台を頭に置いたのが、功を奏しているようだった。

（『もがりの猛蔵』の手下、『木賊の丈吉』）

猛蔵と丈吉を思い浮かべただけで、動きにいっそう気合いが入る。脇構えで小太刀に見立てた扇子を隠した。女将の千代から手ほどきを受けた舞いの要素も取り入れている。仮の敵と刃を交えつつ、二人の客に近づいて行った。

「えいっ」

と、客人を突く真似をして、舞台の方に戻る。お真佐の三味線の音が、だんだん小さくなっていった。最後は素早く扇子を広げ、はらはらと桜が散る仕草をして纏めた。三味線の音が消えたとき、

「失礼いたしました」

留以は舞台に畏まって、深々と一礼する。

「いや、素晴らしい踊りであった」

「まことに」

とたんに二人の客から大きな拍手が湧きあがった。真鍋は興奮して、軽く腰を浮かせている。名無しの客も惜しみない拍手を続けていた。

「小糸」

真鍋に呼ばれて、留以は真鍋の傍らに侍る。お真佐がもうひとりの隣に付いた。酌をする前に杯を渡されたため、留以は杯を手に取った。

「喉が渇いたであろう。はじめは白湯の方がよいか」

と、真鍋は濃やかな気配りを見せる。兵庫の話によると、年は四十一。太い眉につい目を引き寄せられそうになるが、いかにも場慣れした上級藩士という感じだった。

「いえ。まずは一献、頂戴いたしたく存じます」

「さようか」

真鍋が注いだ酒を、留以は一気に空ける。すぐに杯を濯いで、真鍋に手渡した。今度は留以が銚子を持ち、まずは真鍋に酒を注いだ。上座で鼻の下を伸ばしている名無し侍の前にも進み出る。

「お楽しみいただけましたでしょうか」

「うむ。堪能した」

名無しは酌を受けながら呟いた。

「それにしても、美しいのう。辰巳芸者にかような芸妓がいたとはな。迂闊にも知らなんだわ」

年は四十前後、右の唇の横に、かなり大きな黒子がある。目鼻立ちのはっきりした顔立ちもまた特徴的かもしれない。留以はそれらを頭に刻みつけた。

「上州の田舎から出て来たばかりでございます。右も左もわからない田舎者でございますので、ご指南のほど宜しくお願いいたします」

「『そげもの芸者』と聞いたゆえ、なにか変わった芸ができるのではないかと思うてな。月岡殿に楽しんでいただきたいと思い、招んだ次第でござる」

真鍋の言葉に、留以は満面の笑みを返した。

「これからもご贔屓に」

月岡という名字は、珍しい部類に入るのではないだろうか。さらに真鍋が『月岡様』ではなく、『月岡殿』と呼んだことも頭に留めた。自分より上の地位であれば『様』を付けるはず。そうしなかったのはすなわち、同役程度の相手ということに他ならない。

武家は色々と面倒だが、呼び方ひとつで相手の地位がある程度わかるのは、けっこうありがたいことかもしれなかった。

「五行の型が決まっていた。剣術の心得があるのか」

月岡が訊いた。

「知り合いに小野派一刀流の、師範を務めておられるお方がおります。型だけご指南していただきました」

野村留以の名は出さない方がいいと、八木沢兵庫から助言を受けていた。八丁堀との繋がりは、できるだけ表に出さないのが得策。警戒心をいだかれぬよう、留以は素直に助言を受け入れていた。

「なれど付け焼き刃にしては、堂に入っていたではないか。『えぃっ』と突かれたときには、ちと驚いたわ。あまりにも気迫がこもっていたゆえ」

月岡は半分、本気のような表情をしていた。

「おそれいります」

留以は会釈して、真鍋の傍らに戻ろうとしたが、

「月岡殿の隣に」

いち早く示された。すみやかにお真佐と席を入れ替わる。真鍋が気配り怠(おこた)りな

い能吏であるのは、ここまでの言動に表れていた。もとは御用人という話だが、留守居役も兼ねていたのかもしれない。

（さて、なにを、どう切り出せばいいでしょうか）

どうやれば自然に話を引き出せるだろう。兵庫は寺の講に関わる話が聞ければ重畳（ちょうじょう）とも言っていた。

「あたしは田舎者でございますから、永代寺で行われる出開帳が楽しみなんです。お客様が深川に訪れてくだされば、それだけ多くお座敷もかかるでしょうしね。永代寺で大きな出開帳は行われるでしょうか」

出開帳好きを装って、話を投げてみる。

「いかがでござるか、真鍋殿」

月岡が真鍋に答えを求めた。

「そうよな。秋頃にはまた成田山の成田不動が、来るやもしれぬ。かれこれ、十五、六年前になろうか。わしはまだ跡目を継いでおらなんだゆえ、父の手伝い役として、お供をしたのだがな。あのときの出開帳は賑（にぎ）やかであったわ」

思い出すように、少し遠い目をする。

「確かに凄い行列だった」

月岡も同意して、続けた。
「成田を出立したときの人数は、百人程度だったのだがな。江戸に着くと、成田講の面々が加わって来る。永代寺に入ったときには、なんと、その数は千人にも膨れあがっていたとか」
「千人」
お真佐が受ける。
「凄い数でございますねえ」
「この大行列には、『成田山開帳』という幟が、数十本ほど、ひるがえっていた。まるで神輿が練り歩くような様子であったな。まあ、派手やかにやるのは、話を広めるためもあるゆえ、なかなか大変やもしれぬがの」
真鍋の話を、月岡が継いだ。
「話題を集めて、あらたな信者を獲得せねばならぬ。ときには興行が失敗することもあるからの。今、我が国における寺の数は、百万に届こうかという騒ぎじゃ。坊主たちは戦々恐々よ」
「お寺が百万もあるのですか」
目を丸くした留以に、月岡が告げた。

「さよう。ついでに言うと、我が国の人口は、約三千万人。つまり、だいたい三十人につき、ひとつの寺という割合になる話じゃ」

「人気があるのは、やはり、成田のお不動様でございますか」

留以は、月岡の杯に酌をしながら、視線で真鍋に答えを求めた。

「いや、川崎大師も負けておらぬ。特に家斉公が二十五歳の厄落としにご参詣なされたのが、話題になっての。以来、急に川崎大師は名を知られるようになった。将軍様がご参詣なさるとなれば、民はこぞって押しかけるゆえ」

「川崎大師が有名になったのは、家斉公の参詣のお陰もござろうがの。あれでござろう、真鍋殿」

月岡が意味ありげに言った。

「うむ」

頷いたものの、真鍋は口にしない。

「なんでございますか。もったいぶらないでくださいまし。気になって、気になって、眠れなくなっちまいますよ」

留以のくだけた口調に誘われたのか、

「家斉様の身代わりよ」

真鍋はにやりとして、告げた。

文化十年（一八一三）九月二十八日。家斉公は、四十一歳の前厄祈願のため、川崎大師に参詣した。ところが家斉参詣の直前、三十四世山主の隆円上人（りゅうえんしょうにん）が急死する。川崎大師はその死を伏せて、家斉の参詣を迎えた。

「参詣した後、家斉公はその事実を知らされたというわけよ。自分の厄の身代わりで、山主が死去したと聞かされた家斉公は、いたく感激なされた由。五十石の寺領を寄進なされたそうな」

真鍋の説明を、月岡が補足する。

「この話を機にご公儀は、川崎大師に境内地を下賜（かし）するなど、強力な後押しをするようになったのじゃ」

「本当に参詣直前に、みまかられたのでしょうか」

留以は疑問を口にした。

「家斉様がご参詣なさる日は、当然、ご通達がなされていたはず。すでにみまかられていた山主の死を、その日に合わせたということも」

「考えられるの」

月岡が応えた。

「要は、家斉様がご参詣なさる前に、逝去したというのが重要なのじゃ。身代わり話が成り立つではないか。多少のずれは致し方あるまい」

と、真鍋はちらちら廊下を見やっている。

四

「お客様がおいでになるのですか」

留以は、視線を読んで訊ねた。

「さて、来るかどうか」

真鍋の答えに、月岡が頷き返した。

「あの騒ぎの後でござるからの」

留以とお真佐は、思わず顔を見合わせている。訊いていいものかどうか、迷いがあったが……思いきって口にした。

「新大橋の東詰で、お坊様が刺された騒ぎでございますか」

あの坊主は、真鍋に会いに来るつもりだったのだろうか。大金を持っていたことは、噂になっていたが、昨日、兵庫にも確かめていた。あれは賄賂であり、寺社奉

行の配下である真鍋に渡すつもりだったのか。
「いずれにしても、客が来たときには、ちと座を外してくれ。話が終わったらまた呼ぶゆえ、そのときにもう一度、剣舞を披露してくれぬか」
真鍋はうまく話をごまかした。留以の問いかけには答えていないが、追及すると怪しまれかねない。
「畏まりました」
頷くに留めた。
「寺も生き残りを懸けて必死じゃが、なんだかんだ言うても、儲けておるわ。存じよるか。寺には門前の遊女屋などから、冥加金が納められておるのじゃ」
月岡が別の話を振ってくる。坊主の騒ぎから、さらに気を逸らさせようとしているのではないか。そんな印象を受けたが、むろん口にはしなかった。
「存じませんでした。門前の見世は、必ず払わなければならないんですか」
素知らぬ顔で合わせる。
「さよう。いまや坊主も、金、金、金よ。心から仏に仕える者が、どれほどいるのやら。下手をすると」
と月岡は、右手を広げた。

「五百人ですか」
留以の答えに、大きく首を振る。
「五人よ。念のために言うておくが、江戸だけの話ではないぞ。日本中の坊主を合わせても、その程度しかおるまい。まともな坊主を探すのは、かようにむずかしいわ」
「手厳しいですねえ」
お真佐が苦笑しながら言った。
「ですが、いざとなればお寺さんは、お助け小屋などを開いてくださるじゃありませんか。地震や火事のとき、被害に遭った人たちを助けてくれます」
「それぐらいのことはしなければ、罰があたるであろう。功徳を施すのが、坊主の役目。儲けるばかりではな。黄金で身体が重くなりすぎて、地獄に堕ちかねぬ」
月岡の話が、しらじらしくひびいた。黄金で身体が重くなりすぎているのは、この二人も同じではないだろうか。
「失礼します」
廊下から仲居が呼びかけた。
「お客様がおいでになりました」

障子を開けると、恰幅のいい僧侶が姿を見せた。年はよくわからない。三十前後にも見えるし、五十ぐらいにも見えた。留以は今戸焼の腹鼓を打つ狸を思い出している。てらてらと光る頭や顔が、色好みであるのを示すかのよう。証をたてるかのごとく、留以に好色な目を向けた。

「これは、竜安殿」

「和尚みずから、おいでになられるとは」

真鍋と月岡は、二人同時に立ちあがる。月岡が上座を譲って、「どうぞ」と竜安に勧めた。仲居が運びこんだ新しい箱膳を、留以とお真佐も手伝い、上座に置いた。真鍋と月岡が上座の右側に箱膳を移して、自分たちの席を整える。

「では、失礼いたします」

留以はお真佐とともに出て行こうとしたが、

「待てまて。会うたばかりだというのに、愛想のないことよ。せめて、一献、かわそうではないか」

竜安が止めた。

「ですが」

躊躇うと、真鍋が手で指図する。どうやら主導権を握っているのは竜安のようだ。

留以が傍らに侍って、お真佐は真鍋たちの席に付いた。
「どうぞ」
留以が酌をすると、
「あまり見ぬ顔じゃな」
竜安は、舐めるように見つめた。妖怪狸にぺろりと舐められたように感じて、悪寒を覚えたが表情は変えない。
「〈藤乃家〉の小糸と申します。上州から出て来たばかりの、新参者でございます。どうぞご贔屓に」
「剣舞が得意でしてな」
すかさず真鍋が持ちあげた。
「さよう。見事な舞いでござった。真鍋殿と見惚れた次第。話が終わった後で、今一度、披露してくれる由。竜安殿もお楽しみになされよ」
「ほっほう、剣舞とな」
身体を揺さぶって、笑った。目が糸のように細くなる。ますますでっぷりと太った妖怪狸に似てきた。手を握りしめようとしたが、留以はさりげなくかわした。
「ささ、もう一杯、どうぞ」

と、酒を勧める。

顔には塗っていないが、手には白粉を塗っていた。野村家における労働の過酷さを表すような手であるため、白粉でごまかさなければならないのである。できるだけ、さわられたくなかった。むろん平左衛門以外の男に、さわらせたくないという気持ちもある。

「竜安様は、どちらのお寺のご住職なのですか」

少しでも話を聞き出すことに集中した。いつ真鍋たちに出て行けと言われるかわからない。気が急いていた。

「麻布の霊雲寺じゃ。わしのお祓いは、効果があると評判でな。お産が軽かった、富籤が当たった、不治の病が治ったなどなど、自分で言うのもなんだが、霊験あらたかなのじゃ。参拝者がひきもきらず、門前市をなす有様での。忙しゅうてならぬわ」

「まあ、不治の病まで治るのですか」

話を合わせたが、内心、胡散臭いと思っていた。夫の平左衛門の方が、よほど欲のない顔をしている。つくづく我が身の幸せを感じていた。

「一度、小糸も拙僧の寺に来るがよい。その気があればの話じゃが、金子を増やす

相談にも乗って……」

「竜安殿」

真鍋が素早く制した。しきりに目顔で「なりませぬ」と告げている。しかし、竜安は相手にしなかった。

「小糸は特別じゃ。これほど美しき芸妓に巡り逢えたのは、まさに仏のお導きよ。挨拶代わりの祝儀を与えたところで罰はくだるまい」

そっと留以の手を握りしめる。濡れたままの雑巾にくるまれたような、不快感に襲われた。太っているからだろうか。異様なほど手に汗を掻いていた。振りほどきたくなるのを、懸命にこらえる。

重要な話が聞けるかもしれない。そこに気持ちを向けた。

「金子を増やす相談とは、いかようなものですか」

さりげなく問いかける。

「どの寺でも行っているであろう、さまざまな講よ。儲けられる講と、寄進のための講がある。小糸には儲けられる講の話を、教えてやろうではないか」

きつく手を握りしめて、囁いた。

「霊雲寺に来たときにの」

汗まじりの体臭が立ちのぼっている。膨れあがった腹には、小判でも詰めているのではなかろうか。吐き気を覚えるほどだったが、無理に笑みを押しあげた。
「楽しみです。必ず伺いますので」
「その言葉、忘れてはならぬぞ」
「はい。それでは失礼いたします」
濡れ雑巾のような竜安の手は、最後の最後まで留以の手にからみついている。立ちあがる動きに合わせて、懸命に腕を差し伸べていた。僧衣の袖からあらわになった竜安の二の腕は、つきたての餅のように真っ白で、ふっくらしていた。
「他のお座敷にも招ばれておりますが、内所か仲居さんに知らせていただければ、また参りますので」
留以はお真佐を促して、しずしずと廊下に出る。
「ごゆるりとお過ごしくださいませ」
座り直して挨拶した。
「あとの楽しみにしようかの」
舌なめずりした竜安の目が、淫靡な輝きを帯びていた。目を合わせないようにして、障子を閉める。思わず吐息をついていた。

「ふう」
「小糸さん。わたしは内所におりますから」
お真佐が告げて、奥の廊下を指した。八木沢兵庫が別の座敷の前に立っている。事前に座敷を借りる旨、打ち合わせをしていたが……ただ漫然と廊下に突っ立っているのは、いささか配慮が足りないようにも思えた。会釈して、兵庫は座敷に戻る。
「大男がなにをするでもなく突っ立っているなんて」
つい声になった呟きを、お真佐は微笑で受け流した。
「小糸さんのことを、案じているんですよ」
では、と、お真佐は階段の方に歩いて行った。その後ろ姿を見ながら、留以は兵庫の座敷に足を向けた。
「〈藤乃家〉の小糸でございます」
あくまでも芸妓を装っている。座敷に入るまでは、だれが見ているかわからないからだ。
「失礼いたします」
障子を開けた瞬間、驚きに目をみひらいた。

五

「義父上」

声に出して言った後、慌てて廊下を振り返っている。なんと座敷には、義父の近藤時之助も同席していた。留以を見て、珍しく、にやりと笑った。

「小糸のかような顔を見られたは、幸いであったわ」

整った顔に、少年のような悪戯(いたずら)っぽい笑みが滲(にじ)んでいる。いつものように、きりっと引き締まった精悍(せいかん)な顔つきをしていた。

「さようでございますか」

他人行儀に応じて、留以は座敷に入る。兵庫が静かに障子を閉めた。男二人の座敷にも箱膳が調えられている。銚子も置かれていたが、酒は飲んでいないのだろう。時之助と兵庫の息から、酒の匂いは感じられなかった。

「近藤様のお力を、お借りせねばならぬ事態になっておりまする」

兵庫が口火を切った。いつもより言動が畏まっているのは、目付の時之助を慮(おもんぱか)ってのことに違いない。

「もしや」
留以は、躊躇いがちに問いかける。
「数々の心中騒ぎや両国橋の騒ぎ、そして、新大橋のお坊様の騒ぎは、関わりがあるのですか」
源内から聞いた話だが、二人にはそこまで明かせなかった。もはや騒ぎは武家だけに留まらず、町方をも巻きこんでいるのではないか。
「それを調べているところじゃ」
時之助は明言しないが、否定もしなかった。
「ひとつ、確かめておきたいのだが、小糸。真佐吉というあの芸者は、大丈夫なのか」
義父の問いかけには、さまざまな意味がこめられていた。此度の話をどこまで知っているのか。知っているとした場合、話を洩らす懸念はないのか。なにより信じられる者なのか。留以を案じつつ、役目の重さを告げていた。
「大丈夫でございます」
留以は、短く答えた。よけいな話をすると、逆に綻びが出かねない。曖昧にしておいた方がいいと判断した。

その気持ちを察したのか、
「さようか」
時之助もそれ以上、追及しなかった。
「して、留以殿」
あらたまった兵庫に、すかさず留以は告げる。
「ここでは小糸でございます」
「お、これはご無礼つかまつった。して、小糸。真鍋直英様の座敷にいた客と、あらたに訪れた客の姓名はわかったか」
手下に対するような口調になっていた。
「はい。真鍋様とご同席なされていたお方は、月岡様と呼ばれております。名字しかわかりませんでしたが」
「月岡」
ぴくりと時之助の眉が動いた。
「ご存じの者でござりまするか」
兵庫の顔にも緊張が走る。
「うむ。珍しい名字ゆえ、たぶん知り合いだと思うが」

と、時之助は留以に目を投げた。
「年はいくつぐらいじゃ」
「四十前後だと思います。目鼻立ちのはっきりしたお顔立ちをしておいでです。そうそう、唇のここに」
留以は自分の唇の右側を示して、続けた。
「かなり大きな黒子がございました」
「やはり、な」
ひと言、呟いて、時之助は黙りこむ。知り合いが三つの騒ぎに関わっているとなれば、平静ではいられない。かつまた直に月岡を見たうえでなければ、下手なことは口にできないと考えているのかもしれなかった。
「あとから来た坊主は？」
兵庫が訊いた。
「名は、竜安。麻布の霊雲寺の住職だと言うておりました。年はよくわかりません。三十から五十ぐらいのように見えますが、もしかすると、もっと若いかもしれません。逆にもっと年寄りなのかもしれませんが……恰幅のいいお坊様です」
我知らず、手をさすっている。汚れた濡れ雑巾のような竜安の手を思い出してい

た。握りしめられる度、この身体が穢れていくような不快感を覚えた。おぞましさに鳥肌立ったが、『土竜』に弱気は禁物と心の中で言い聞かせる。

「いかがした」

時之助が案じるような顔になった。仕草や表情を察してくれただけでも、ありがたいと思った。

「いえ、なんでもありません」

「案ずるな、平左殿も外に来ておるのじゃ。是非にと八木沢殿に名乗りをあげたらしゅうての。連絡役として、控えておる」

「旦那様が」

平左衛門が近くにいる。そう聞いただけで、心がふわりとあたたかくなった。それはすぐに全身へと広がる。

〝小林隼太は生きておる。わしが必ずや探し出すゆえ、案ずるな〟

昨夜、力強く告げた夫の言葉が甦っていた。

「霊雲寺の竜安。年はよくわからない。恰幅がいい、か」

兵庫は、取り出した紙に矢立で留以の言葉を書き留めながら、続けた。

「竜安の供役を務めたのは、尋常ならざる数の用心棒でござる。警戒しているのや

もしれませぬな。なにか奇妙な話、さよう。儲け話のようなことを口にはいたしませなんだか。よい金儲けの話がある、などというような」

「ございました」

遮るように言った。

「なれど、どの寺でも行っている講の話です。寄進する講と、儲けられる講があるのだとか。詳しい話が聞きたければ、霊雲寺に来いとのことでした」

「生臭坊主は、殊の外、小糸がお気に召したと見ゆる」

時之助の笑みが、侮蔑をこめた苦笑に変わっている。おもむろに懐から紙を取り出した。手渡されたそれを、留以は声に出して読みあげる。

「桜に殺された」

目をあげて言った。

「小林様のお屋敷に残されていた遺書と同じ文言ですね」

「うむ」

「これは、どちらで手に入れたのですか」

「昨夜、わしの屋敷に届けられたものよ。おそらく小林殿がだれかに預けておいたのであろう。届けた者に仔細を訊ねたのだが、関わりはないとのことであった。単

なる町の便り屋よ」

時之助の表情は暗かった。

「まるで謎かけのようじゃ。意味がわからぬ」

と腕を組む。

「小林様は、ご自分のお屋敷に残した遺書が、御目付に届かないことをご懸念なされたのかもしれませんね。もしかしたら、握りつぶされてしまうかもしれないと、お考えなされたのではないでしょうか」

留以は、満開の桜が咲き誇るさまを思い浮かべている。と同時に、追い詰められた小林新右衛門のことも考えていた。意味ありげな言葉は、間違いなく遺書だろう。たったひとり残された隼太は……。

「そういえば」

不意に思い至った。

「隼太殿は『さくら』の言葉に怯えておりました。わたしはてっきり花見のことなのだと思うておりましたが」

二親に花見だと言われて行った先には、入水心中という過酷な運命が待ちかまえていた。大川に沈む直前、見たであろう岸辺に咲く満開の桜。それが隼太の記憶に

焼きついてしまったため、『さくら』に過剰な反応を見せるのではないか。そう考えていたのだが、あるいは、もうひとつ理由があるのかもしれない。

「もしかすると、二親は隼太のいるところで、かように言うていたかもしれませんね」

われらは『さくら』に殺されるも同然だ、と。

「近藤様も仰せになられたが、それがしも意味がわからぬ」

兵庫も腕を組み、考えこんでいる。確かに『桜に殺された』だけでは、小林新右衛門の真意はつかめなかった。

「妹に聞いた話では、商人も続けざまに心中しているとか。彼の者たちは遺書などを残していないのですか」

留以は確認の問いかけを発した。

「遺書はなかったように思うが」

兵庫自身は調べていないのだろう、自信がなさそうだった。

「あとで確かめてみます」

留以と時之助を交互に見て、告げた。本当に桜が関わっているのか。関わっているとしたら、どのような形で心中に追いこんだのか。大好きな花だけに、できれば

関わりがないという結果になってほしかった。

（もしや）

留以は、いやな胸騒ぎを覚えている。『さくら』が冠された講のことを、いやでも考えていた。儲けられる講と、寄進する講。儲けるつもりだったのに、なんの断りもなく寄進されてしまったとしたら……。

「殺められた坊主のことだが」

時之助が話を変える。

「定かではないのだが、仕事人の仕業ではないかという話が出ておる。聞いたやもしれぬが、擦れ違いざまに一太刀よ。その遣い手、地面に散らばった小判には、見向きもしないで消えたとか。あまりにも手際がよすぎるゆえ、おそらく仕事人ではないかと」

話しながら、じっと留以を凝視めた。

「……」

まさか。

留以は慄えた。あのとき、だれかに『仕事』の様子を見られたと感じたのは、やはり、気のせいではなかったのだろうか。見たのは義父、時之助ではないのか。長

すぎる注視の意味をつい考えてしまったが、
「義父上ったら、真剣なお顔をなさって」
軽くかわそうとする。
「仕事人など、黄表紙の中だけの話でござりましょう。かように恐ろしい者たちが、まことにいるとは思えません」
背中に冷や汗が吹き出していた。つつーっと伝い落ちていく。
(気づかないでほしい)
心の中で叫んでいた。
「ふむ。黄表紙の読みすぎか」
時之助が目を逸らしたので、ほっとする。廊下を人が行き交う気配がした。真鍋たちの話が終わったのかもしれない。
「そろそろ小糸に、お呼びがかかるやもしれませぬな」
兵庫の言葉に、なにを思ったか。時之助は急に酒を飲み出した。銚子を直接、口につけ、流しこむように飲んでいる。義父のこんな姿を見るのは初めてだった。
「義父上。突然、いかがなされましたか」
「確かめるのであれば、早い方がよかろうと思うた次第よ。小糸にも、ちと手伝う

てもらわねばならぬ」
「もちろんお手伝いいたしますが」
「よし。では肩を貸せ」
「はい」
立ちあがった留以の肩に、時之助は腕をまわした。
「月岡殿に挨拶をして参る」
「なるほど」
察しのいい兵庫が障子を開ける。留以も義父の意図をとらえていた。時之助は廊下に出ると、大声で叫んだ。
「これ、待て、待たぬか、小糸」
留以の背中を軽く押した。真鍋たちの座敷に行けと示しているのは言うまでもない。留以も心得たもの。
「お許しを。次のお座敷がございますゆえ、またの機会にしてくださりませ」
逃げるように、真鍋たちの座敷に向かった。
「ならぬ、ならぬぞ。待て、待てぃ」
時之助は酔ったふりをして追いかけて来る。留以もまた逃げるふりをして、真鍋

たちの座敷の障子を開けた。

六

「竜安様ぁ」

留以は、竜安の後ろに隠れる。

「待て、小糸。今宵はわしの相手をせい」

続いて姿を見せた時之助が、留以を探すように、ぐるりと座敷を見まわした。下手な歌舞伎役者であれば尻尾を巻いて逃げ出したかもしれない。見事な芝居だった。とろんとした目が月岡に留まる。

「お」

時之助は、よろめくようにしながら、座敷に入って来た。

「だれかと思えば、月岡殿ではござらぬか。いやいや、かようなところでお目にかかるとは、奇遇でござるな」

もつれるような足どりや口調は、すでに酔っぱらいのそれだった。酒臭い息を吐きながら、月岡の膳の前に座る。

「これは、近藤殿」
月岡は、ばつが悪そうに目を逸らした。あきらかにいやがっていた。時之助は目付。旗本を監視する役目の者と、料理茶屋で出くわすのは楽しいことではないだろう。困惑したように、真鍋と竜安を見やっている。
「まずは一献」
時之助は、酔っぱらいになりきっていた。勝手に銚子を取りあげて、月岡のお猪口に注ぎ始める。訊かれる前にと思ったのか、
「剣舞をする芸妓が現れたと聞きましてな。さて、いかような技かと見物しに参りました次第。小糸の美しさと、きれのいい剣舞に、ひと目惚れでござるよ」
時之助は追いかけて来た理由を告げた。銚子に口を付けて、一気に酒を飲む。義理とはいえ父娘なのだが、気づいた者はいないようだった。留以は汗くさい竜安の後ろに隠れて、様子を見ている。
「して、月岡殿。今宵はなんの集まりでござるか」
わざとらしく訊いた。
「いや、まあ、その」
もごもごと口ごもる月岡を、横から真鍋が助けた。

「われらも同じでござる。小糸の噂を聞きましてな。さて、いかような芸妓だと、集まりました次第。あ、申し遅れましたが、それがしは寺社奉行本多中務大輔様が配下、真鍋直英にござります。寺社役を務めておりまする」

「さようか」

時之助は正体を明かさない。

「近藤様。他のお客様のお座敷に、いつまで居座るおつもりですか。これ以上、不粋な真似は、なさらぬ方が宜しいのではないかと存じます」

留以は引き際を演出する。顎をあげ、きっと時之助を見据えていた。さぞかし気の強い芸妓に見えただろう。

「わしは招かれざる客か。なれど、睨みつけるその顔も美しいのう。さいぜんも言うたが、小糸。わしはひと目惚れじゃ」

時之助は最後まで達者な役者ぶりを披露した。もつれるような足どりで廊下に出る。障子を閉める間際、留以に意味ありげな笑みを投げた。

〝わしの知っている月岡殿じゃ〟

と言ったに違いない。突然の闖入者は、真鍋たちを動揺させた。時之助の足音が遠離って行くと、

「何者だ、あれは」
真鍋が月岡に答えを求めた。
「公儀の御目付役でござる。名は近藤時之助。親しく話したことはござらぬが、能吏のようでござってな。噂は聞いておりまする」
「公儀の目付が、なにゆえ、ここに」
真鍋の不安げな呟きに、月岡が応えた。
「われらの動きに気づいたのではあるまいか。調べるために来たのでは……」
「なぁに、案ずることはない」
竜安は鷹揚にかまえている。
「いざとなれば、黄金がものを言うであろうさ。地獄の沙汰も金次第よ。なんならあの目付も、仲間に引き入れればよいではないか」
「いや、近藤時之助は、袖の下が通用しない目付と聞いている。ゆえに上様の信任も厚いとな、聞いた憶えがある」
意気消沈して、今にも死にそうな様子の月岡を、留以はちらりと見た。
「噂なんか、あてになりませんよ」
申し訳ありません、義父上。心の中で詫びつつ、言った。

「つい今し方、ワ印をもらっていました。この目で見ましたからね。間違いありません。相手はわかりませんが、続けざまに三人ほど来ていましたよ。あたしの踊りを見に来たなんていうのは、単なる言い訳です」

ワ印は賄賂のことである。

「なに？」

月岡の表情が変わった。

「今の話は、まことか」

「はい。竜安様が仰るとおり、地獄の沙汰もなんとやら。黄金をちらつかせれば、言いなりになると思いますよ」

どうせなら、時之助をこの仲間に引っ張りこんでほしかった。それが無理だとしても、月岡の警戒心を解く必要がある。この者たちには、予定どおりに動いてもらわなければならない。

「近藤様は女子（おなご）に弱いですが、黄金にはもっと弱いお方。噂は噂にすぎないのではないかと存じます」

きっぱり断言した。

「そのほうらよりも、小糸の方が頼りになるのう」

竜安は、後ろにいた留以の尻を抱えこむようにして、隣に座らせた。尻にふれたまま、やんわり撫でている。このうえなく不愉快だったが、これも御役目と自分に言い聞かせた。時之助の名演ぶりを見れば、四の五の言っていられない。

「目付を仲間にできれば、これ以上、心強いことはない。近藤時之助であったか。まずは彼の者に、挨拶しようではないか。明日にでも菓子折を届ける。うまくやるゆえ、わしにまかせておけ」

竜安は左手で胸を叩きつつ、右手で留以の尻をさわり続けている。呆れるほどの生臭ぶりだった。

「すべてを話すのでござるか」

月岡の不安は消えていないようだった。同意を求めるように、真鍋を見やる。

「それがしも、いささか懸念がありまする。ワ印を届けることに異存はござらぬが、詳しい話をするのは、今少し様子を見るのが宜しいのではないかと存ずる」

二人は慎重だった。

「臆したか」

竜安は、ふんと鼻を鳴らした。

「黄金さえあれば、上様とて従うであろう。わしはあの目付が気に入った。話のわ

かる男よ。小糸に付き添い役を頼み、霊雲寺に招こうではないか」

「なれど、竜安殿」

真鍋も退かなかった。

「新大橋の騒ぎを、よもや忘れたわけではありますまいな。殺められたのは他でもない、竜安殿に仕えていた坊主ではござらぬか。あれは見せしめやもしれませぬ。あるいは、われらへの挑戦状ということも考えられまする。仕事人の仕業であるのは、まず間違いござりませぬが、ご油断なさらぬのが肝要ではないかと存ずる」

留以のことはすでに仲間だと認めたのか、かなり踏みこんだ話を口にする。時之助の裏話をしたのが、奏功したのかもしれなかった。

「今のお話で思い出しましたが、そういえば、両国橋でも騒ぎがございましたね。確か寺社奉行様のご配下が襲われたとか。あれも見せしめだったのですか」

さりげなく揺さぶりをかける。

「あれは」

真鍋は返事に詰まった。目が宙を泳いでいた。

「黒崎様は、寺社奉行様の配下ではない。御旗本よ。ご公儀の評定所の役人でな。吟味物調役として、本多様のもとに遣わされたお方じゃ」

月岡が補足する。一気に酔いが醒めたのかもしれない。白けた顔をしていた。
（黒崎半九郎様を殺めるように命じたのは、この三人でしょうか）
妙な空気の意味を、留以はそう読んでいた。黒崎は表向き、手伝いとして務めていたが、実際は寺社奉行を監視するのがその役目。外に出てはまずい話をつかんでしまったがゆえ、殺されたのではないだろうか。
「ええい、辛気くさい話はやめじゃ。酒が不味うなるわ」
竜安が、ぽんと留以の尻を叩いた。
「綺麗所を呼んで参れ。三、四人、頼む。できれば夜の相手をな、務めてくれる芸妓も呼んでくれぬか」
またぺろりと舌なめずりする。
「むろん小糸が相手をしてくれるのならば、黄金をはずむがの」
上目づかいに睨めつけた。
「は。いくら小判を積まれてもご免ですね。あたしをそのへんの不見転芸者と、一緒にしないでくださいな」
つんと留以は顎をあげる。
「気の強いことよ。もっとも、わしは、そういうところも好きだがの」

鼻の下を伸ばしっぱなしの竜安を、うんざりしたように真鍋が見やった。
「小糸に頼む必要はござりませぬ。芸妓の手配は整えておきました。そろそろ来るのではないかと存じます」
冷めた目をしていた。狸坊主の果てしなき欲望に、嫌悪感を覚えているのかもしれない。配下の坊主が死んだばかりだというのに、平気で芸妓と戯れる気持ちが、理解できないのかもしれなかった。
「お。来たかもしれぬな」
竜安は相変わらず、平然としている。妖怪狸の耳に念仏だろうか。留以も廊下に人影を見て、障子を開けた。
開けようとしたところだったに違いない。
「あら」
若い芸妓が、廊下に畏まっていた。隣にもうひとり控えている。二人とも二十前後であるうえ、かなりの美人だった。
(とても転び芸者には、見えませんね)
そんなことを思いつつ、中に招き入れる。
「どうぞ。お待ちでしたよ」

留以は告げて、竜安を振り返った。
「あたしは、真佐吉姐さんを呼んで参ります」
「うむ。剣舞を披露してほしいからの。すぐに戻って来るのじゃぞ」
「はい」
愛らしく応えた。二人の芸者と入れ替わるようにして、留以は廊下に出る。ちょうど通りかかった仲居に、お真佐を呼んでくれるよう頼み、いったん時之助が待つ座敷に戻った。

第七章　艶やかな刺客

一

「あやつは月岡竹次郎と言うてな。年は、三十八ぐらいだったと思うが、定かではない。勘定奉行の配下よ。御金奉行を賜っておる」

時之助は言った。

「勘定奉行様の配下」

留以は驚きを禁じえない。時之助が出張って来るのも道理、幕府の重臣が騒ぎに関わっているとなれば、当然の流れだった。

「念のために尾行けさせまする」

兵庫の言葉に、時之助は頷き返した。

「頼む」
「では、わたしは座敷に戻ります。剣舞を披露することに……」
不意に男の絶叫がひびいた。留以よりも先に、時之助が廊下へ出る。素早く刀掛けから自分の刀を取っていた。留以も刀掛けに残されていた時之助の脇差を握りしめる。兵庫を追いかけるように、座敷から飛び出した。
「だ、だれかっ、賊じゃ、狼藉者じゃ」
騒ぎは問題の座敷で起きていた。竜安の叫び声が聞こえている。
「芸者に化けた刺客じゃ。捕まえろ、や、役人を呼べ！」
座敷から二人の芸者が出て来た。それぞれ眼前に短剣を構えている。いくら用心棒を雇い入れても、料理茶屋の座敷にまでは配さない。死角を突かれた襲撃といえた。艶（あで）やかな刺客たちは、少しずつ階段に歩を進めて行った。
刀を腰に携えた時之助が、間合いを取りながら、様子を窺っている。他の座敷から顔を覗かせた者たちに、兵庫が「出て来るな」と手で合図していた。
「竜安様。ご無事でございますか」
留以は、座敷の前で足を止めた。真鍋が右腕から血を流している。それを月岡が手当てしていた。

「お、おぉ、小糸」

竜安の顔は蒼白で、腰が抜けたようになっていた。両手を差し伸べていたが、握りしめてやるほどの慈悲心は持ち合わせていない。

「ここでお待ちください。お医師を頼んで参ります」

障子を閉めて、時之助と兵庫の方に向かった。二人の艶やかな刺客は、階段の手前で立ち止まっている。背中を向けたとたん、時之助に斬りつけられると思っているのだろう。睨み合っていた。

二階の座敷は、すべて障子を閉めている。廊下にいるのは、二人の刺客、留以と時之助、そして、兵庫の五人だけだった。

「だれに命じられた？」

時之助が訊いた。

「わしは目付の近藤時之助よ。事と次第によっては、二人の命、助けぬでもない。いかがであろうな。評定所で話をせぬか」

おそろしく優しい声だった。留以の知らない義父の一面を、垣間見たように思えた。罪を犯した者が、ついほだされてしまうような……。

「はっ」

女のひとりが、短剣を突き出した。時之助がさがった隙に、ひとりが階段を駆け降りる。残った女は、時之助を睨みつけたまま、一段ずつ階段を降り始めた。狭い場所だけに思いきって攻められない。時之助、兵庫、留以の順で、階段を降りて行った。

（お真佐さん）

階段の下では、お真佐が、先に降りた女と対峙していた。だれかが知らせたに違いない。外で見張り役を務めていた同心たちが、玄関の三和土に集まっている。逃げ道を塞ぐような形になっていた。平左衛門の顔も見える。

二人の刺客は玄関先で背中合わせになった。時之助たちと同心に挟まれてしまい、逃げるに逃げられなくなっている。

「今一度、訊ねる」

時之助が、ふたたび口を開いた。留以は兵庫と階下にそっと降りる。兵庫が刀を持っていないことに気づき、仕方なく留以は義父の脇差を渡した。

「命じた者の名を申せ。さすれば……」

ひとりが時之助に短刀を繰り出した。横から兵庫が脇差の柄で打ちつけようとする。が、いち早くもうひとりが、それを防いだ。腕を斬られかけた兵庫が、慌て気

味に距離を取る。

（速い）

留以は驚きに目をみはった。腕にはいささかおぼえがあるものの、慣れない芸者の着物が思いのほか動きを妨げている。眼前の女刺客のように、短剣を操れるかどうか。はなはだ疑問だった。

「殺してはならぬ」

時之助は命じるとともに、二人を威嚇していた。おとなしくお縄になれば、命までは取らぬ。なれど逆らえば死あるのみ。聞こえたはずだが、女刺客たちはまったく表情を変えなかった。

（このままでは死人が出る）

非常にまずい状況になっていた。見張り役と尾行役をする予定だった同心たちは、槍や捕物道具を携えていない。十手を構えて、玄関先を身体で塞いでいるだけだ。むろん、いざとなれば刀を抜くだろうが、この二人を取り押さえられるだろうか。力の差があまりにもありすぎる。

「御目付様」

留以は時之助に呼びかけ、簪を投じた。すぐさまお真佐もそれに倣った。ほと

んど同時に飛んだ二本の簪は、女刺客たちの顔に当たりそうになる。ひとりは短刀で弾き返し、もうひとりは顔を動かして避けた。隙を見て時之助が、ひとりの腕を摑む。

「あっ」

と声をあげたのは、だれだったのか。するりと女の着物と帯が脱げていた。脱げた着物と帯はそのまま時之助の手に残っている。まるで蟬の抜け殻のようだった。もうひとりは自分で着物と帯を脱ぎ、玄関先にいた同心たちに投げる。

ふわりと着物が広がった。

「うわわっ」

同心たちは避ける暇もない。覆い被さった着物の上を、二人の刺客は文字どおり、飛んだ。ひとりは軽くだれかの頭に足を突いたが、もうひとりは一気に飛び越える。身軽な動きはまるで猿のよう。時之助と一緒に、留以は足袋で外に走り出た。

次の瞬間、女刺客のひとりは、料理屋の屋根に舞いあがる。続こうとしたもうひとりに、時之助が斬りつけた。目にも止まらぬ早業だったが、女は逆とんぼを切って離れる。軽業師の動きだった。

「お借りします」

留以は出て来た同心の腰から刀を抜き取るや、投じた。騒ぎに気づいて逃げたのだろう、幸いにも境内に人の姿はほとんどない。留以が投じた刀は、女が逆とんぼを終えるであろう位置をめがけていた。

当たった！

と思ったが、女は刀が顔に食いこむ刹那、避けていた。信じられない動きだった。それでも留以は前に出ようとしたが、

「さがれ」

間一髪、時之助に腕を引かれた。料理屋の屋根にいた女が投じたに違いない。境内の石畳（いしだたみ）に短刀が弾き返された。留以は落ちたそれを取って、境内にいたもうひとりに投じる。

ほとんど同時に時之助が走っていた。

留以が投げた短刀を避けることに、女はほんの一瞬、気を取られる。自分の短刀を構えて弾き返した。時之助はわずかな隙をのがさない。

「はぁっ」

真っ向斬りを叩きつけた。女は間合いを取ったが、いち早く兵庫が後ろにまわりこんでいた。大男に背後を取られては逃げられない。観念したように、持っていた

短刀を前に投げた。
（もうひとりは）
留以は料理屋の屋根を見あげる。仲間を見捨てて逃げたのか、すでに屋根から姿が消えていた。
「猿轡を咬ませろ」
時之助の命で、兵庫が女に猿轡を施した。舌を嚙み切られるのを懸念したのだろう。胡座を掻いた女を見たとき、留以はふと異常に気づいた。
「男？」
喉仏が性を物語っている。
「まさか」
兵庫は猿轡を引っ張るようにして、下手人の顎をあげさせた。いやでも喉仏があらわになる。
「よう化けたものよ。これぞまことの『そげもの芸者』じゃ」
忌々しげな呟きを、時之助が受けた。
「忍びの心得があるのやもしれぬ。逃げた仲間が取り返しに来るやもしれぬゆえ、見張りの数を増やすのが宜しかろうと存ずる」

「承りました」
厳重に縄を掛けて、兵庫は刺客を立たせた。なにげなく隣の料理茶屋を見た留以は、元締の源内が、二階から顔を突き出していることに気づいた。あらかじめ席を取っておいたのだろう。
（流石は元締。ぬかりはありませんね）
騒ぎの一部始終を悠然と見物していたに違いない。ことによると源内は、艶やかな刺客の正体を知っているかもしれなかった。

二

源内たちと会えたのは、三日後の夜だった。場所は源内が用意した屋根船の中である。留以とおのぶ、岡田文士郎とお真佐という顔ぶれで、いつものように船を流しながらの集まりになっていた。
「残念ながら、見憶えのない者たちでした」
開口一番、源内は言った。
「二人とも男でしたがね」

「え？」

留以は、二度目の衝撃を受けている。

「もうひとりも男だったのですか」

「はい。喉仏が出ておりましたよ。てまえは隣の料理茶屋の二階におりましたので、月明かりに照らし出された刺客が見えました。近藤様も仰せになられたようですが、忍びの心得がある様子。しかも女形のごとき見事な化け方でした」

時之助と兵庫の話、そして、真鍋たちとの話については、すでに留以が告げている。

「義父が着物を摑んだ瞬間、するりと帯ごと脱げました。あれは」

留以の眼差しに、源内は応えた。

「歌舞伎の早変わりの技を、真似たのではないかと存じます。おそらく帯を着物に縫い留めておいたのでしょう。ひとり捕まったとはいえ、あの見事な化けっぷり。さらに路上の襲撃ではなく、堂々と座敷を訪れましたからね。大胆と言うべきか、豪胆と言うべきか。あれだけの腕と度胸を持つ仕事人を抱えている元締は、そう多くないと思いますが」

源内は、浮かない表情になった。

「思いあたる元締がいるのか」
文士郎が問いかける。酒と肴を堪能して、ほろ酔い加減という感じだろうか。行灯に照らされた横顔が、ほんのり赤く染まっていた。
「いえ、ちょいと噂を耳にしただけでして」
いつになく歯切れが悪かった。
「この間、仕事人が殺された騒ぎも、もしかしたら、元締が『ちょいと噂を耳にしただけ』の輩の仕業でしょうか」
今度はお真佐が訊いた。源内が抱えている仕事人が殺されたとなれば、みな無関心ではいられない。だれの胸にも消えない不安があった。
「まだ調べはついておりません。今回の騒ぎに話を戻しますが、ご公儀のお裁きを見守るのが宜しいのではないかと存じます。襲われたのは、寺社奉行の寺社役を務める真鍋直英様と、勘定奉行の御金奉行を務める月岡竹次郎様ですからね」
「義父も言うておりましたが、月岡様は、本当に勘定奉行様のご配下なのですね」
確認するような留以の言葉に、源内が応える。
「はい」
少しの間、船内は静けさに包まれた。

寺社奉行の真鍋と、勘定奉行配下の月岡。そこに霊雲寺の住職、竜安が加わった。

数日前に新大橋の東詰で殺められた坊主は、竜安に仕えていた。おそらく賄賂と思われる菓子折を持って、真鍋たちのもとを訪ねる段取りだったのではないだろうか。

密談には、大きな謀（はかりごと）の匂いがした。

頻発している巷の心中騒ぎ、両国橋で殺められた吟味物調役の黒崎半九郎、そして、新大橋で殺められた竜安の配下の坊主。

この三つの騒ぎに、繋がりがあるとしたら……？

「新大橋の坊主殺しは、見せしめ、もしくは真鍋や竜安たちへの挑戦状のように思えなくもない」

文士郎がぼそっと言った。

「公儀から遣わされた黒崎半九郎は、真鍋たちの動きに気づいたがゆえ、始末されたのやもしれぬな」

続けて出た言葉にも、同じ話を考えていたことが表れている。

「てまえもかように考えております」

源内が同意した。

「あるいは心中騒ぎで死んだ者の身内が、仕事人を頼んだのかもしれません。さて、

ではなにゆえ、頻々と心中騒ぎが起きているのか。死ななければならないほどに追い詰められたその理由とはなんなのか」

「真鍋様たちが行っている『なにか』が原因ではないかと」

遠慮がちに留以は告げた。まだ確信できるだけの証はない。が、金と欲にまみれた竜安の、傲慢な言動を見たことによって、おぼろげだった疑惑が、より確かな形を成してきたように感じていた。

「その『なにか』とは？」

源内の問いかけに、お真佐が片手をあげる。

「講じゃないかと思います。吉原でも話が出ているんですよ。花魁を落籍せたほどのお大尽が、いきなり無理心中したという騒ぎもあったようでしてね。江戸ばかりではなく、京や大坂にも心中騒ぎが広がっているらしいんです」

「おのぶが冗談まじりに言うておりましたね。心中病とでも言うような、流行病なのではないのかと」

「ええ、言いました。留以様はその後を継いで、『心中が伝染る』などと呟いておられましたが」

「そう考えたくなるほどに、いえ、いっそ病であればと思いたくなるような騒ぎで

す。犠牲になるのは、いつも弱い者ばかり。もっともお大尽までもがとなれば、弱い者云々はあてはまらないかもしれませんけれど」

留以の頭には、小林隼太が浮かんでいた。贋者の川瀬弥次郎は、隼太をどこに連れて行ったのか。

「ご存じかと思いますが、入水心中の生き残り、小林隼太殿の行方がわかっておりません。隼太殿は『さくら』という言葉を聞くと、ぴくりと震えておりました。必ずわたしにしがみついて……関わりがあるかどうかはわかりませんが、いちおうお話ししておきます」

「万が一のための策でしょう。留以様が言っておられた『なにか』が、幼子の口から洩れるのを恐れたに違いありません。念には念を入れたのでしょうが」

源内の消えた語尾には、すでに隼太はこの世のものではないというような含みがあった。留以は仲間たちに頭をさげる。

「調べのついでですかまいません。あの子を探していただければと思います」

「まかせておけ」

文士郎が軽く胸を叩いた。

「留以殿のお酌があれば、さらに気合いが入るのだがな」

明るく言って、杯を差し出した。湿っぽくなった場を、変えようとしているに違いない。

「お安い御用ですよ」

留以も合わせる。おのぶが渡した銚子を傾けて、文士郎の杯に注いだ。いつの間にか源内も杯を差し出している。

「元締まで、なんですか」

呆れ顔のおのぶを、源内は完全に無視した。

「そういえば、岡田様。『木賊の丈吉』の方は、どうなっておりますか」

かなり強引に話を変えたが、留以にとっては重要な話である。つい真剣な目を文士郎に向けていた。

「前座の田舎芝居が、うまくいったようだ。あの後、二度、会うたがな。『旦那、旦那』と持ちあげて、いささかうるさいほどよ。まあ、素直に三両、渡したゆえ、あれこれ言えぬがな」

と、唇をゆがめる。

「あやつは両刀ゆえ、油断がならぬわ」

「閨に忍びこまれましたか」

お真佐が訊いた。相手が男でも女でも、丈吉は相手をするのではないか。妬いているほどではないが、さりとて無関心という顔でもない。微妙な女心を、お真佐は文士郎に示しているような感じだった。

「かような真似をすれば、即座に叩っ斬る」

そこだけ文士郎は、真面目な顔になった。が、すぐさま苦笑いに変わる。

「男と寝るほど相手に困ってはおらぬゆえ、と、そうじゃ。おれのことが心配ならば、お真佐よ。いつでも閨に忍びこんで来い」

「ご遠慮申しあげます。岡田様と寝るほど相手には困っておりませんので」

やり返されて、ふたたび文士郎は苦笑した。男女の仲になっているような、いないような会話だったが、

「それで」

留以は話を戻した。

「丈吉の口から『もがりの猛蔵』の話は出ましたか」

九割がた丈吉が猛蔵の手下であることはわかっている。しかし、留以は慥かな話を得たかった。猛蔵は、今、どこにいるのか。江戸に出て来るとしたら、いつなのか。手がかりをつかみたい。

「いや」
文士郎は小さく首を振る。
「遊冶郎を装っておるが、なかなかどうして、慎重な男よ。まだ知り合うて日が浅いゆえ、完全には警戒心を解いておらぬのであろうさ。ここは辛抱が肝心、焦りは禁物じゃ、留以殿」
「は、い」
焦りは禁物と心の中で繰り返した。ようやく猛蔵の尻尾が見えた。摑まえるところまではいっていないが、憎い仇の姿が見え隠れし始めている。絶対にのがしてはならない。
「それにしても」
源内が吐息まじりに言った。
「近藤様が出張って来られるとは思いませんでしたよ。ご公儀の御目付様の中でも能吏という評判の高いお方。やりにくいこと、このうえありません」
「それは留以様のお言葉ですよ、元締。もちろん、あたしもそうですけどね。大旦那様に鋭い目を向けられると、鳥肌が立ちますから」
おのぶが大仰に震えあがって見せる。冗談とは思えない表情だった。四年ほど前

に怪我をした弥太郎夫婦を、助けたのが縁で二人は近藤家に来た。よもや目付の家とは思わなかったに違いない。実感がこもっていた。

よけい不安になったのか、

「近藤様の動きは、姉君様から逐一、お知らせが来る手筈になっておりましたね」

今度は源内が確認の問いかけを発した。

「はい。おのぶが連絡役を務めてくれております」

「どうも竜安は、びびっちまったみたいですね。死人のような顔で寺に戻ったらしいんですけれど、それっきり外には出て来ないとか」

おのぶの口調には、かすかな苛立ちが漂っていた。留以の胸にも似たような思いがある。竜安たちが行っている講とは、どんなものなのだろう。確かめたい気持ちを、懸命に抑えていた。

「じきに動きますよ」

源内は自信たっぷりだった。

「小糸さんの美しさを、生臭坊主は忘れられませんからね。二、三日うちに連絡をよこすでしょう。霊雲寺で派手な催しを開くに違いありません。過日、ご披露し損ねた剣舞を、小糸さんに舞っていただこうではありませんか」

ゆるゆると舞台の幕があがり始める。
艶やかな刺客は、生臭坊主の誘いを待っていた。

三

十日後。
竜安に招かれた留以は、麻布の霊雲寺に来ていた。
「凄い賑わいですねえ。まるで浅草の奥山か、日本橋のようではないですか」
一万坪はあろうかという敷地内には、さまざまな見世物小屋や屋台が立ち並んでいる。蕎麦や天麩羅、鰻、団子、甘酒といった食べ物屋の屋台から立ちのぼる匂いが、入り交じっていた。祭りの夜店を思い出させる風景だったが、今はまだ九つ（午後零時）の鐘が鳴ったばかりである。
晴れわたった空と、乾いた風が清々しかった。
麻布は、御城の南西に位置している場所で、台地あり、坂あり、谷ありの南傾斜面をなしている。周囲は大名家の中屋敷や下屋敷をはじめとして、大小さまざまな武家屋敷が多かった。また寺も夥しい数になっている。一万坪を超える敷地を有

する寺も少なくない。霊雲寺もその例に洩れず、敷地は軽く一万坪を超えていた。
「元締たちが着いたようです」
左側を歩いていたお真佐が囁いた。留以同様、細い縞の着物で装っている。あとで二人とも江戸褄の芸者装束に着替える予定だった。おのぶと弥太郎も来るはずだが、まだ姿を見ていなかった。
境内の近くは、人波でごった返している。
「お義父上様ですよ」
と、お真佐が寺の廻り廊下を目で指した。時之助も着いたところなのだろう、供を従えて若い僧に案内されていた。竜安から贈られた菓子折を、笑顔で受け取ったのが五日前のこと。同役の行いを真似たのが奏功したのか。本日の大切な客人として招かれる結果になっていた。
「真鍋様と月岡様は、先程、寺の中に入りましたね」
留以の言葉に、お真佐は頷いた。
「ええ。役者は揃いました」
「仕事がやりやすいのか、やりにくいのか」
曖昧な呟きが出る。流れをつかみかねていた。今までは深更というのがほとんど

だった。大勢の人がいる賭場で仕事をしたこともあるが、昼間、しかも堅気の者が集う場所は初めて。さらに目付の義父、時之助が加わるとなれば、やはり、やりにくいと思わざるをえなかった。

「寺は広いから大丈夫ですよ。元締が張り切っておりました。絵図の描きがいがあると言っておりましたから」

「いかような筋立てなのでしょうか」

「とりあえずは、茶店に行くようにという指示がありました。小糸さんが驚く出会いを整えたそうです」

お真佐のあとに付き、行き交う人の波をすり抜けて行った。寺の敷地内に設けられた茶店は、料理茶屋のような規模を誇っている。きらびやかな前掛を着けた女たちが、忙しげに給仕していた。

「まるで水茶屋のようですね」

留以は、小声で告げる。二人は寺の参道が見える場所に陣取った。お茶を頼み、なにをするでもなく参拝客たちを眺めている。

「お真佐さんは、この間、講の話をしていましたが」

留以はさりげなく切り出した。

「竜安和尚は二つの講の話をしていました。寄進する講と、儲けられる講があるのだと。わたしは『さくら』が気になっているのです」
「行方知れずのお子が、その言葉を聞く度、怯えたと言うておられましたね」
お真佐が受ける。心を読んだような言葉になっていた。
「ええ」
答えながら、いやな予感と、自嘲まじりの不安をまたもや味わっている。隼太の父、小林新右衛門が残した遺書にはこう記されていた。
〝桜に殺された〟と。
あの文言の意味を思うにつけ、我が身の愚かさに行き着くのだった。もし、想像どおりだったとしたら……。
「岡田様が参りました」
お真佐の声で、気持ちを戻した。岡田文士郎がこちらに歩いて来る。隣には『木賊(とくさ)の丈吉』を伴っていた。
(元締の『驚く出会い』とはこれでしょうか)
留以は立ちあがって、挨拶する。
「丈吉さんじゃありませんか」

「おう、小糸さん」

丈吉はやけに愉しげな顔をしていた。対する文士郎は、渋面になっている。冗談まじりの衆道云々が、あながち的外れではなかったのかもしれない。丈吉に迫られているのかもしれなかった。

「先日はどうも」

留以は文士郎に、他人行儀な挨拶を投げた。文士郎も頷くにとどめる。『もがりの猛蔵』の話をしたいところだが、むろん口にはしなかった。

「丈吉さんもお詣りですか」

座るよう勧めたが、丈吉は首を振る。

「おれたちは、ちょいとぶらぶらして来るよ。先生から儲けられる講があると聞いたんでな。様子を見に来たってわけさ」

その先生は隣で相変わらず仏頂面をしていた。苦笑いした留以は、そのまま視線が釘付けになる。御高祖頭巾を着けた武家女が、下男と下女を伴って真っ直ぐこちらに来た。両目だけ出した姿は、まさに野村留以。昔から似ているとはよく言われたが、正直な話、これほどとは思わなかった。

（姉上）

危うく出かかった呼びかけを呑みこんだ。供を務めているのは、もちろん弥太郎夫婦である。ここで留以は気づいた。これこそが源内の整えた出会いであると。

「留以様」

立ちあがって、深々と辞儀をする。それに気づいた丈吉が振り向いた。吃驚（びっくり）したように、留以と留以に化けた近藤織江を交互に見ている。

「こいつは驚いた」

目を丸くしていた。

「そっくりじゃねえか」

「言葉を慎（つつし）みなさい。南町奉行所の定町廻り同心、野村平左衛門様の奥方様ですよ」

おのぶがすかさず注意する。

「あ、これはどうも失礼いたしました。それじゃ、小糸さん。おれたちはこのあたりで失礼しますよ」

上目遣いに会釈すると、早々に離れて行った。文士郎も一緒だったが、擦れ違いざま肩越しにちらりと織江を見やる。この出会いの場をもうけた源内の手配りに、感心したのかもしれない。かすかに唇をゆがめた。

「あれが『木賊の丈吉』ですか」
織江は、少しの間、丈吉の後ろ姿を睨みつけている。両目に炎のような怒りがともっていた。目しか出ていない分、よけい凄みが感じられた。
「お座りください。お身体にさわります」
留以は自分の隣を指し示した。どこで、だれが見聞きしているかわからない。姉上と呼ぶのは意識的に避けていた。
「お茶をもらえますか」
と織江は、御高祖頭巾を外した。
「どうぞ」
留以が渡した茶を、喉を鳴らして、飲んだ。わずか一瞬の出会いだったが、いかに緊張したかが表れている。あらためて仇討ちのことを考えたに違いない。
「そなたの苦しみが、ようわかりました」
聞き取れないほどの声で告げた。留以は母親の無惨な死に様を、不幸にもその目で見てしまった。しかし、織江と朋江は時之助の家に泊まりに行っていたため、二親の様子はもちろんのこと、血で染まった屋敷も見ていなかった。織江たちが対面したのは、ある程度、綺麗に整えられた両親の亡骸なのである。

それが原因だろうか。留以は、姉妹との間に見えない壁のようなものを感じていた。理解しようと努めてくれた織江にさえ、言葉にできない隔たりを覚えていたのだが……。

「留以様」

わざと己の名を口にした後、織江の手をきつく握りしめる。留以に化けた姉が、留以の真実の哀しみを、留以の真実の苦しみを、共感してくれたと思った。もしかすると、源内はそこまで考えていたのだろうか。

「わたしと朋江がおりますよ」

織江もまた手を握り返した。

「はい。なれど留以様に、かような無理をさせるとは……元締にあとでひと言、申しあげなければなりません」

「ですが、これで丈吉は信じたではありませんか」

おのぶが、お真佐と席を入れ替わって、隣に座っていた。お真佐は新しい茶を頼み、弥太郎の隣に座る。茶店の一角に、留以を含む五人が集まっていた。

「確かにそうですね」

詳しくは語らないようにする。留以と小糸が並んだ姿を、丈吉が目にした以上、

もう留以が小糸なのではないか、という疑問は二度といだくまい。

「ご無理をなさらぬよう」

それでも念のため、姉の耳もとに囁いた。夏には二人目の子を授かる大事な身体。こうやって留以の身代わりをさせること自体、気がひける。

「わかっております。本当は朋江がやりたいと言うたのですよ。なれど、御高祖頭巾を被るとよけいに、似ていないことがわかりました。がっかりしておりましたよ」

これ以上は口にしないでほしいと仕草で示した。織江も迂闊だと思ったのだろう、目顔で頷き、運ばれて来た新しい茶を飲んだ。

「小糸さんにお願いします。講の話をよく聞いてきてください。寄進する講と、儲けられる講。あたしは、あれが気になって、気になって」

おのぶも茶を啜っている。

「『さくら』ですか」

留以は訊いた。

「はい」

「見事に散ってしまうかもしれませんね」

「やはり、そうですか」
うなだれたものの、おのぶはすぐに目をあげた。
「中川様です」
「え」
留以も行き交う人の中に、中川周平を見つけた。時之助とも連絡を取り合っているのだろうか。そのあたりの話は、あまり入って来なかった。周平は留以と織江に目顔で挨拶した後、寺の裏手に消えた。
「幕開けです」
不意に背後で声がひびいた。源内の配下の美少年が、留以たちと背中合わせに座っている。さりげなく置かれた脚本を、おのぶが手に取った。
舞台の幕があがる。

四

「いや、見事であった」
竜安の拍手に、他の客たちの拍手が続いた。

「近藤様は二度目とのことじゃが、此度も感じ入っておられたご様子。小糸の剣舞に見惚れておられたぞ」

と告げる竜安自身も満足げだった。

寺の離れの広間には、留以とお真佐、義父の近藤時之助、そして、竜安と真鍋直英、月岡竹次郎の六人が集っている。本堂へは渡り廊下で繋がっていた。酒や料理を運ぶのは、小綺麗な僧服をまとった美童たち。みな年は十三、四歳ぐらいだろうか。丈吉であれば、相好を崩したかもしれなかった。

まだ寒いため、廊下に面した障子は閉められている。

「お粗末様でございました」

留以は舞台に畏まる。斜め後ろには、三味線を抱えたお真佐が控えていた。三味線の棹には、お真佐の武器、千枚通しが仕込まれている。留以は自分の小太刀を持っていないが、そのときになれば、おのぶか源内が届けてくれるはず。それがかなわないときには、刀掛けに掛けられただれかの脇差を使うつもりだった。

一見、華やかに見える座敷だが、離れの廊下や庭には大勢の用心棒が立っていた。深川の富岡八幡宮の騒ぎがあったからだろう。ものものしい警戒ぶりに見えた。

「ささ、早う酌を」

竜安に促されて、留以は立ちあがる。
「はい」
お真佐と一緒に、今度は酌婦の役目を務めた。留以はまず義父の時之助の隣に侍る。時之助がいてくれるお陰で、竜安は流石に尻をさわるような真似はしない。この間よりはずっと行儀がよかった。
「それにしても〈伊勢屋〉のあれは、凄い騒ぎでござったな」
時之助が口火を切る。
「なれど真鍋殿の怪我は、かすり傷程度だったとか。なによりでござる」
「それよ」
竜安は言った。やけに狎れなれしい口調だった。
「過日の刺客は、だれの命令で動いたのか。真鍋殿の話では、仕事人ではないかとのことであったが、捕らえた女子は吐いたのであろうか」
急に真剣な表情になっている。
「竜安殿」
真鍋の呼びかけに、時之助の返事が重なる。
「彼の者は女子ではない。男が化けた芸者よ。あれぞ、まことの『そげもの芸者』

だと、あとで話した次第にござる」
「なに？」
信じられなかったのか、答えを求めるように、竜安は真鍋と月岡に目を走らせた。二人とも苦笑いを浮かべている。
「話したではござらぬか」
「いや、憶えておられぬのも無理からぬことよ。それほどに襲われた衝撃が大きかったのでござろう」
月岡の苦笑いには、多少、侮蔑がこめられているように見えた。なさけないと言いたげだった。
「ふん。憶えておるわ。ちと思い出せなんだだけじゃ」
あきらかに竜安は気分を害した様子だった。
「物騒なお話は、もうやめましょう」
留以は、銚子を持って、竜安の隣に座る。
「恐い話よりも、竜安様。儲けられる講の話をしてくださいな。ここに来れば、教えてくださるというお約束でしたよね」
重要な話題を振った。源内の脚本に講の話も記されていたが、おそらくそれが原

因で心中騒ぎが頻発しているのではないかという、あくまでも推測の域を出ないものだった。より慥かな話を得たいのが、正直な気持ちである。

「さようであったな」

狸のような住職は、にんまりほくそえんだ。今にも腹鼓を打ち始めそうな表情をしている。

「確か寄進する講と、儲けられる講があると、聞いた憶えがあります。間違っておりませんか」

すかさず留以は問いかける。真鍋や月岡に話を変えられてはたまらない。『仕事』のときが迫っている。早く答えを聞きたかった。

「そのとおりじゃ。寄進する講とはの。預けた金子をそのまま霊雲寺に寄付してもらう講よ。儲けられる講は、それとは異なるものでな。預けられた金子を、さらに特別な場所へ預ける仕組みじゃ。慥かな筋に預けるゆえ、損をすることは絶対にない」

竜安は留以の手を握りしめて、撫でさする。過日同様、鳥肌が立ったものの、懸命にこらえた。

「本当に大丈夫なのでしょうか」

ちらちらと、真鍋たちにも目を向ける。
「その慥かな筋とやらが、雲のように消えてしまったら、預けた金子も消えてしまうでしょう。いったい、どこに預けるのですか」
「ご公儀じゃ」
さらりと答えたのは、時之助だった。
「は？」
留以は、すぐには呑みこめなかった。公儀が金子を預かるとは、どういう意味なのか。はたして、そんなことが本当にあるのか。
思わずお真佐と顔を見合わせていた。
「ご公儀は、武家や商人、寺、町人などから、多額の金子を預かっておる。それをまた貸し付けて、利を得ておるのじゃ。金利が一割と安いゆえ、借りている者は多い。五、六年前の調べでは、公儀の貸付金は、およそ二百六十万両にも及ぶ由」
「近藤殿。もうそのあたりで」
真鍋がやんわりと制した。芸者ふぜいに、そこまで詳しく教えることはあるまい。適当にごまかせばいいものを。そんな顔をしていた。
「今のそれは、その」

口ごもった留以に、
「悪行ではない。法にふれているわけでもない」
時之助は答えた。
「利益を出しておるからな。その利益分をまた公儀に預けて、大きな利を生もうとする者も少なくないが」
と、そこで竜安や真鍋たちを見た。
「問題は、金子を集める方法じゃ。竜安殿。この女子に二つの講について、ご指南してはもらえぬか。儲ける講の方は、今、わしが言うたとおりゆえ、必要ないがな。寄進する講は、いささか騒ぎになっておるのではあるまいか」
「かようなことはない。雑念寺の名を借りて行った桜花講の方もまた時期を見て、集まった金子をご公儀に預けるつもりであった。それを信じられぬ愚か者が多くてのう。まあ、ちと騒ぎになったやもしれぬが」
桜花講。
そう、それは留以が、おのぶと一緒に金子を預けた講の名だった。留以はなけなしの二分、おのぶは二朱。今戸の寺に雑念寺が出張って、小判を掻き集めたのだろう。一年で二倍になるという証文もかわしているが……騒ぎが続く中、桜の散るさ

まとともに、何度目かの不吉な思いが、留以の胸をよぎった。

心中した小林新右衛門は、遺書にこう書き記した。

〝桜に殺された〟と。

そして、隼太もまた『さくら』という語を聞く度、震えて、留以にしがみついた。父子の苦しみと哀しみが、今、あきらかにされたのではないか。頻発した心中騒ぎの多くが、この桜花講の犠牲者なのではないか。

〝一年後には二倍になる〟

その謳い文句を信じた挙げ句、命を絶つはめになったのではないか。隼太が冷たい大川に、二親と入水しなければならなくなったのは――。

「まあ、それがしがとやかく言う筋合いではござらぬが、『さくら』まで雇い入れて桜花講に誘ったのは、いかがなものかと存ずる。ちとやりすぎた感がなきにしもあらずよ」

時之助がさらに告げた。三人に話すふりをして、留以に真実を教えていた。

「侍の場合は旗本株、商人の場合は店を担保にして、講に掛ける金子を用立ててやっていた由。中にはうまく儲けられた者、いや儲けさせてもろうた者もいたようだがな。彼の者たちを『さくら』に使えば、獲物は面白いように引っかかるという仕

組みよ」

明るい声で内情を暴露する。

（そういえば、あのとき）

桜花講をした日のことを、また思い出していた。前にいた中年の女は、はじめは無愛想だったのに、留以たちが列に並んだとたん、愛想がよくなった。挙げ句、すでに儲けた話をしたのも、今にして思えばおかしな話である。

「まさに桜花講。うまく名付けたものじゃ。夢ははらはらと散って、元金も取り戻せずに終わる」

とどめを刺すような時之助の言葉に、三人は渋面で視線を交わし合っている。目付の真意を計りかねているようだった。賄賂として贈ったあれを、忘れてしまったのか。話が違うではないかと、三人とも表情にあらん限りの不満をこめていた。

「近藤殿」

月岡が代表するように口を開いたが、

「言うたではござらぬか、それがしがとやかく言う筋合いではないと」

時之助は最後まで喋らせない。

「なれど、竜安殿。そろそろ桜花講は、名を変えねばまずいのではないかと存ずる。

知られすぎてしまいましたゆえな。さよう。次は梅花講、いや、銀杏講とでも名乗ればよいのではござらぬか」

竜安たちにとって好意的な提案は、これまた留以に向けられてもいた。この会話から読み取れという意味なのだろう。

（つまり、『寺に寄進する講』とやらの名は、葉を落とす木々の名から取っているわけですね）

苦々しさを噛みしめている。あるいは小判を集めるために、幕府もある程度、目をつぶっているのかもしれない。が、今回の騒ぎばかりは、見過ごすわけにはいかなくなったのではないだろうか。この三人は、私腹を肥やしすぎたのではないだろうか。

（ゆえに義父上や中川様が出張ることになった）

時之助は仲間になったふりをして、この場に参加している。中川周平のような配下たちを、捕縛のために配しているに違いない。仕事人としては、ますますやりにくい流れになっていた。

「銀杏講か」

竜安は、満更でもない顔をしていた。

「近藤様の仰せに従うのが、よいかもしれぬの。確かに騒ぎが大きゅうなりすぎた感がなきにしもあらずじゃ。よし、次は銀杏講にしようではないか」
「儲けられる講にも名があるのですか」
留以の問いかけに、竜安はにんまり笑った。
「松葉講よ。目出度い松の木にあやかった次第じゃ。松の木の葉は散ることもなく、青々とした葉を繁らせる。小糸と真佐吉であったか。二人もわしに金子を預けるがよい。年ごとに利息分を渡してやろうぞ」
「まあ、嬉しい」
目を向けた留以に、
「はい」
お真佐が頷き返したときである。
ずずーんと重い衝撃音がひびいた。

五

（始まりましたね）

留以はもう一度、お真佐に目配せする。源内の手配りによるものだろう。騒ぎを起こす段取りになっていた。

「今の音は」

竜安が腰を浮かせる。

「様子を見て参る。小糸と真佐吉は、ここを動くな。庭にはむろんのこと、廊下にも出てはならぬぞ」

いち早く時之助が刀と脇差を取った。二度、三度と衝撃音が続いた。時之助が障子を開けたとたん、きな臭い匂いが流れこんで来る。

「ここから出てはならぬぞ」

今一度、言い置いて、時之助は飛び出して行った。お真佐が素早く障子を閉める。竜安は立ちあがり、広間を右往左往していた。

「逃げた方がいいのではないか」

真鍋と月岡に訊いた。

「ちらりと見えたのですが、鉄砲を持っている者がおりました。先程の音は、火薬かなにかに火を点けたのかもしれません。用心棒の何人かが倒れておりました」

と、お真佐が予定どおりの言葉を告げた。三人をばらばらにして、ひとりになっ

たところを仕留める。それが源内の描いた絵図だった。岡田文士郎も今の爆発騒ぎを利用して、寺の中に入りこんでいるはずだ。

「では、庭に出るのはまずいな」

真鍋も不安げに眉を寄せている。

「ぬかりはない。かようなこともあろうかと思い、寺の裏手に出る抜け道を作っておいたのじゃ」

少し得意げに言い、竜安が障子を開けた。と同時に廊下から刃が伸びる。文士郎だろうか。間一髪で真鍋が竜安を後ろに引っ張った。

「刀を」

早口で命じる。

「はい」

不本意ではあったが、留以は真鍋に刀を渡した。まだ三人は一緒にいる。刺客から逃げるふりをしながら、ひとりずつ仕留めるのが源内の描いた絵図。月岡にも刀を渡したが、廊下では早くも斬り合いが始まっていた。真鍋が刺客と刃を交えている。

「真鍋殿」

月岡も加勢せざるをえない。刀を腰に差す暇（いとま）もなく、廊下に進み出た。竜安は

おろおろするばかり。恐ろしくて廊下には出られないのか、廊下の斬り合いを震えながら見つめていた。今なら簡単に仕留められる。

（どうしますか）

留以とお真佐は、当惑気味に視線を交わし合っていた。筋書きどおりではないが、ここで仕留めるべきだろうか。しかし、時之助が戻って来ることも考えられた。義父には絶対に殺めるところを見られたくない。

「今のうちに」

真鍋が叫んだ。

「竜安殿」

月岡も促していた。留以はとりあえず別の座敷に移った方がいいと判断する。

「参りましょう、竜安様」

先導するように前へ出た。真鍋の脇差を右手に握りしめている。竜安の後ろには、三味線を抱えたお真佐が付いていた。

「な、なれど」

震えが止まらない狸坊主に、留以は問いかけた。

「抜け道はどちらですか」

「右、右じゃ」

示したその指も小刻みに震えている。留以とお真佐は邪魔な芸者装束を脱ぎ捨てた。裾を引きずりながらでは、まともに戦えない。二人とも下に小豆色の着物を着ていた。

（行きますよ）

お真佐に合図して、留以は勢いよく障子を開けた。左側の方で真鍋と月岡が、それぞれひとりずつ、刺客と思しき侍を相手にしている。用心棒を務めていた男のように思えたが、顔を確かめている暇はなかった。

「お早く」

留以に急かされて、ようやく竜安は廊下に出て来た。留以、竜安、お真佐の順で廊下を進む。離れとはいえ相当な広さを有していた。廊下の左側には壁、そして、右側には、幾つもの座敷が連なっている。真鍋と月岡が食い止めているお陰だろうか。廊下を進むにつれて、背後の刃鳴りが遠離っていった。

「暗いですね」

慎重に歩を進める。座敷の窓は開けてあるのかもしれないが、廊下は決して明るいとは言えなかった。目を馴らしながらの足取りになっている。

「それ、その座敷じゃ」
竜安がひとつの座敷を指した。目印らしきものはないが、狸坊主の頭にだけ、刻みこまれているのかもしれない。留以は障子を開けた。
次の瞬間、喉もとに刃が伸びた。
「くっ」
留以はかろうじて飛びさがる。抜け道があるという座敷で待ちかまえていたのは……給仕役を務めた美童のひとりだった。派手やかな衣裳を纏ったその手には、短刀が握りしめられている。
「おまえは」
衝撃を受けたように、竜安は立ちつくしていた。あるいはこの坊主も丈吉のように両刀なのかもしれない。美童と閨をともにしたことがあるのかもしれなかった。
(元締が手配りした者なのだろうか)
留以は脇差を抜き、美童を睨みつけている。敵なのか味方なのか、判断しかねていた。手配りしたのが元締であれば、この座敷には岡田文士郎を潜ませておいたのではないだろうか。それとも状況が変わったため、配しておいた美童が動かざるをえなかったのか。

「おのれ、小童めが。恩を仇で返しおって」
悪態をつきながら竜安は、留以の後ろに隠れていた。いざとなれば、留以を突き飛ばして相手が怯んだ隙に、逃げるつもりなのではないだろうか。桜花講などという、ふざけた講を行っただけでも許しがたいものを……。
（隼太殿）
怒りがこみあげてくる。もし、源内の配下であるならば、美童も留以と刃を交えたくないと思っているはず。試しに威嚇の一撃を放ってみる。
「はっ」
脇差を軽く振り降ろした。殺気はまったくこめていない。美童は素早く避けて、留以の後ろにまわりこもうとする。
（狙いは竜安）
それを感じて、留以は戦いの芝居を続けた。相手が避ける時を与えつつ、右、左と脇差を打ち降ろした。竜安は留以の背中に必死にしがみついている。動きを速くした。竜安が付いて来られないほどに素早く左右に動いた。
竜安の手が一瞬、背中から離れる。
（今です）

留以は、すっと右に動いた。武術の心得がない竜安にしてみれば、眼前から消えたように見えたかもしれない。楯代わりにしていた留以がいなくなって、竜安は棒立ちになる。

刹那、美童は竜安の喉を掻き切っていた。

阿吽の呼吸だった。

「あ……」

竜安は喉から血を迸らせて、身体を硬直させる。鯨のような巨体が、静かに沈んでいった。美童は喉を掻き切ると同時に座敷に戻っている。竜安の血飛沫を浴びるのが、いやだったのかもしれない。

艶やかな刺客の、鮮やかな仕事だった。

「お命、終っていただきました」

留以は屈みこんで、竜安の目を閉じさせる。

「筋書きが違いすぎますね。どうなっているのでしょうか」

お真佐が言った。

「先程の刺客はどこへ？」

留以は問いかける。

「あそこから逃げたんじゃないでしょうか」

と目で指したお真佐は、三味線の棹を握りしめていた。鋭い目で障子を開けたままの座敷を見やっている。留以はそろそろと床の間に近づいて行った。床の間の後ろに不自然な空間ができている。抜け道の出入り口に違いない。先程の艶やかな刺客は、おそらくここから外に逃げたのだろう。

「この抜け穴が寺の裏手に続いているのですね」

不自然な空間の床に、暗渠（あんきょ）のような穴が見えた。梯子（はしご）か階段が設けられているのだろうか。暗くてよく見えなかった。

（天城家にあった隠し部屋のよう）

命を取り留めた空間が甦っている。どこかに作られた仕掛けを引くと、床の間の壁が動くようになっているのかもしれない。高鳴る心ノ臓を、無意識のうちに押さえていた。

「人の気配が」

覗きこもうとしたが、お真佐に腕を引かれる。

「新手かもしれません。狭い場所で戦うのは危険です」

そう言っているうちに、みしみしと音がし始めた。だれかが上にあがって来る。

留以とお真佐は、とっさに身構えた。
「留以様、ですか？」
おのぶが穴から頭だけ突き出していた。暗闇の中を歩いて来たためか、何度も目をしばたたかせている。もと仕事人にしては不用心すぎる言動だったかもしれない。
「おのぶらしゅうもない。顔を突き出したところを、刺されたらどうするのですか」
留以の言葉で、安堵したようにあがって来る。後ろには、弥太郎も付いていた。おのぶは留以の小太刀をしっかりと抱えている。
「騒ぎが派手だったものですから、抜け道に忍びこむのが、ちょいと遅くなりました。ですが、必要なかったようですね」
すでに血の臭いをとらえたようだった。廊下に倒れている竜安を、弥太郎と一緒に確かめている。
「岡田様は？」
留以の確認に、おのぶは首を振る。
「わかりません。あちこちで火薬が炸裂したんですよ。逃げまどう参拝客を避けながら、ここに来るのがやっとでした」
「抜け道があることは知っていたのですか」

「いえ、元締もぎりぎりまでわからなかったようです。つい今し方、知らせを受けたところなんです。とにかく留以様に小太刀をお届けしなければと思いまして」
「小糸、真佐吉」
不意に時之助の大声がひびいた。
「どこにおるのじゃ。声をあげよ」
呼びかけが、だんだん近づいて来る。留以はおのぶと弥太郎に仕草で抜け道を示した。ここに下男夫婦がいるのは、あまりにも不自然すぎる。二人が抜け道に入るのを待って、お真佐と一緒に廊下へ出た。
「義父上」
「留以」
時之助が駆け寄って来る。
「無事か。怪我は？」
まず留以の身を案じる姿に、胸が熱くなった。
「大事ありませぬ」
「それは重畳。広間におれと言うたものを、姿が見えなんだゆえ、案じたぞ」
答えた後、斃れた竜安に目を向けた。

「大往生とは、いかなんだようだな」
「給仕を務めていた美童のひとりが、下手人でございます。抜け道から外に逃げました。真鍋様と月岡様は、いかがなされましたか」
「二人とも斬られたわ。竜安の用心棒を務めていた侍よ。何人かが刺客となって襲いかかったようじゃ」
「飼い犬に手を咬まれたわけですか」
「彼の者たちに飼われている気持ちは、なかったやもしれぬがな。さて、留以よ。あとは大目付様とわれらの役目じゃ。早う外に行くがよい。おのぶと弥太郎が案じておろう。そなたを探しているやもしれぬ」
「はい」
数々の疑問はあったが、すべて胸に秘めた。問いかける相手は時之助ではない。
留以はお真佐と長い廊下を戻って行った。

六

留以が問いかけるべき相手は……元締の源内だった。

「真鍋直英、月岡竹次郎、そして、竜安。三匹の『犬』を仕留めたのは、てまえの仕事人ではございません」

源内は、驚くべき答えを告げた。

「では、いったい、何者が」

留以は言葉を失った。翌日の午過ぎ、いつものように源内の屋根船に集まっている。お真佐と岡田文士郎も、しばし黙りこんでいた。

「本当は、おれが真鍋、お真佐が月岡、そして、留以殿が竜安を仕留めるはずだった」

ぼそっと文士郎が言った。

「むろん芝居の流れによっては、おれが竜安を仕留める結果になったやもしれぬがな。ところが、どうだ。いざ幕があがってみれば、われらの出番はなしよ。連中は火薬玉のようなものを投げたゆえ、参拝客は狂ったように逃げまどう有様。元締にしては、派手な演出だとは思うたが」

「申し訳ありません。事前の調べが、てまえの思うようにはいきませんでした。蟻の這い出る隙もないほどに、竜安は寺の守りを固めておりましたので。抜け道があるのを知ったのは、騒ぎが始まってすぐのことです。配しておいた手下のひとりが、

見つけて参りました」

「その話は、おのぶに聞きました。当然のことですが、竜安のそばに侍(はべ)っていた美童は、抜け道のことを知っていたのでしょう。見事な仕事ぶりでしたが、逃げ足も速かったですね」

「一度目のとき、深川富岡八幡宮の料理茶屋の騒ぎだが、あのときの刺客は、確か芸者に化けていたな」

文士郎が、確認するような問いかけを発した。

「はい。此度は美童でございました。どちらも艶やかな刺客でございます。美童は遠目から見ただけでございますので、よくわかりませんが、芸者の方はまあ歌舞伎役者まがいの化けっぷり。女子と見まごうばかりの美しさと艶やかさでございました」

源内の答えには、羨(うらや)むようなひびきが感じられた。同じことを感じたのかもしれない。

「悪かったな。おれは芸者にも美童にも化けられぬ」

文士郎が皮肉まじりの言葉を返した。

「いえ、岡田様は頼りになる仕事人でございます。ただ正直に申しますれば、芸者

や美童に化けられる刺客も揃えたいのです。少しずつ仕込んでおりますが、なかなか彼の者たちに列ぶ腕前にはなりません」

「元締はだれだ？」

文士郎が訊いた。留以も知りたい事柄だった。

「はっきりしないのです」

源内は小さな吐息をつく。

「言うなれば新参者でございましょう。上方からでも出張って来たのか。あるいはさらに遠く九州あたりからかもしれません。江戸の元締たちは、みな戦々恐々ですよ。依頼が来なくなるんじゃないかと警戒しております。艶やかで美しいうえ、仕事が素早い。いやはや恐ろしい新参者です。ちらりと小耳にはさんだのですが」

躊躇いがちに言葉を継いだが、

「そう、あくまでも噂なんですが」

と言った後、急に黙りこんだ。

「元締」

おのぶが促したが、小さく首を振る。

「いえ、やめておきましょう。まだ決め手がないのですよ。まさかという気持ちの

方が強いものですから……ですが、あれだけの遣い手が揃っているとなれば、噂どおりということでしょうか？」

最後は自問になっていた。留以たちは困惑気味に顔を見合わせる。常とは異なる源内の言動に、隠しようのない恐れが含まれているのを感じていた。少しの間、返事を待っていたが、それ以上、口にしなかった。

「捕まった『そげもの芸者』の調べは、どうなっているんでしょうか。そのあたりの話は入って来ないんですか」

お真佐が訊きながら、元締の杯に酒を注いだ。

「これまた不思議なことに、いっさい入って参りません。とうに斬首されているはずなんですがね。小伝馬町に連れて行かれたという話もなければ、小塚原に首が曝された様子もないんですよ」

「闇から闇に葬られたか」

文士郎は、すでに『そげもの芸者』が、この世にいないことを匂わせていた。正体のわからない新参者の元締は、抱えている仕事人に対しても、冷酷非道な振る舞いをするのだろうか。

「黒崎半九郎様を殺めたのは、竜安たちでしょうか」

留以は確認せずにいられない。新参者の仕事人の仕業ということも考えられたが、源内は大きく頷いた。

「まず間違いないと思います。桜花講の仕組みを知られてしまったがゆえ、始末せざるをえなかったのでしょう。賄賂を贈ろうとしたのでしょうが、黒崎様はそれを断ったのではないかと存じます」

「それで義父は受け取るふりをした」

「はい。近藤様の探索は、下手をすると、てまえよりも慥かだったかもしれません。それで色々と考えてしまうのですが」

源内は俯きかけたが、留以たちの視線に気づいて、顔をあげた。

「まあ、遅かれ早かれこの源内が、新参者の元締たちの正体を暴いて差しあげますよ。とりあえずはご苦労様でした。御礼申しあげます」

懐から幾つかの紙包みを出した。

「いいのか？」

口では言いつつ文士郎が、早々と右手を差し出している。

「さいぜんも言ったように、今回、われらは出番がなしだ。留以殿やお真佐は、仕込みで動いたが、おれはなにもしていない」

言葉と態度が、あきらかに違っていた。差し出したままの右手を、引っこめようとはしなかった。

「てまえも依頼人に同じことを申しました。礼金を返そうとしたのですが、返そうというその気持ちが嬉しいと仰いましてね。取っておいてくれとのことでした」

源内にしては珍しく、自慢げな言葉になったかもしれない。

「正直者は得をする、か」

すかさず文士郎が言い返した。ちらりと源内が見る。

「とはいえ、礼金がもらえたのはありがたいことよ。此度は無理だろうと、なかば諦めていたからな。源内様々だ」

慌て気味に言い添えた。受け取った礼金を掲げて、懐に入れる。源内はお真佐、留以と古い順に渡していった。

「岡田様が仰るとおりです」

留以も掲げてから、続ける。

「此度は楽をさせていただきました。あまりにも鮮やかな仕事ぶりに、見惚れてしもうたほどです。あの美童。会うたのは初めてですが、通じ合うものがありました。わたしやお真佐さんに、危害を加えようとはしませんでしたから」

「でも、留以様。座敷を開けた瞬間、短刀を突き出されたじゃありませんか」
お真佐の反論に、留以は小さく首を振る。
「竜安だと思ったのでしょう。なれど、その後は、ただひたすら竜安だけを狙うておりました。年は十三、四でしたが、まことの仕事人だと思うた次第です」
「そこが、わたしは引っかかるんですよ」
今度はおのぶが異論を唱える。
「たかだか十三、四の小僧じゃありませんか。冷静に人を殺めるなんて、普通はできませんよ。それに留以様やお真佐さんに、顔を見られたじゃありませんか。にもかかわらず、始末しないで姿を消しましたからね。まるで」
「同業者だと知っていたような」
お真佐が継いだ。
「確かに、言われてみれば、ですね」
遅ればせながら、留以も気づいた。
「あるいは始末するのはたやすくない相手と思うたがゆえ、さっさと逃げることにしたのかもしれぬ。二対一では不利だからな。それに薄暗い廊下では、顔まではっきり見えぬではないか。次に会うてもわかるまい。ゆえに無駄な争いはせぬがよし

と考えた」

文士郎が自分なりの意見を述べる。

「いささか薄気味悪さを覚えなくもありません」

源内は少し青ざめていた。正体のわからない元締に対して、留以も恐れに似た感情を持っている。源内組の動きが、後手後手にまわっているのも口惜しいことだった。

少し場が暗くなったかもしれない。

「そういえば、丈吉に聞いたんだがな」

文士郎が話を変えた。

「『もがりの猛蔵』が、来月あたり江戸に来るかもしれぬと」

「まことですか？」

留以はさっと緊張する。つい大きくなった声を、源内が仕草で抑えるよう示した。

「申し訳ありません」

「いえ、留以様のお気持ちは、よくわかります。ご案じなされますな。岡田様には引き続き、丈吉に張りついていただきますので」

「おれは衆道のケはないぞ」

「わかっておりますよ、岡田様が女子をお好きなことは」
お真佐に言われて、にやりと笑った。
「やはり、お真佐も同じ気持ちか。どうだ、帰りに一杯、飲らぬか」
「あいにく急いでおりますので。すみませんが、近くに着けてくださいな」
船頭に訴えると、文士郎も腰を浮かせる。
「おれも降りるぞ」
「あら、またですか。まるで、あたしを追いかけるかのよう。いささか、うるそうございますね」
「右に同じじゃ。おれが降りる場所で、なぜかお真佐も降りる」
「さようですか」
心を探り合っているのか、それとも不仲を装っているのか。新参者の元締と同じように、この二人のこともよくわからない。
「お気をつけて」
と、留以は二人を見送った。

七

そして、また姑たちにとっては平らかな、しかし、留以にとっては過酷な日々が戻って来た。

「この縫い目はなんじゃ、留以殿。雑巾もまともに縫えぬのか。わたしは、まがりなりにも仕覆師。嫁女がこれでは困りますな」

希与の言葉が、どこか遠くで聞こえていた。留以が『地獄の刻』と呼ぶ裁縫の時間は、睡魔と戦う時間でもあった。ともすれば閉じかける瞼を、苦労して持ちあげている。

「睡そうな顔をして。毎晩、なにをしているのでしょうか」

ちくりと刺さりかけた環紀の言葉も、すぐさま想像上の小川に流した。

「申し訳ありません」

とりあえず謝ったが、母娘の目はいっそう真剣味を増している。

「宜しいか。千家の流れを汲む茶の湯の道具を、代々にわたって製作する職人たちを『職家』と呼んでおります。わたしは袋師、つまり、茶入を入れる袋を作る仕覆

師じゃが、茶人によっては……」
　長くなりそうな希与の十八番を、
「失礼いたします」
　おのぶの声が遮った。障子を開けて、告げる。
「朋江様から、まだおいでにならないのかと、矢のような催促でございます。お約束しておられたようなのですが、留以様は失念なされていたのではないかと」
「そうでした」
　はっと留以は思い出した、ふりをする。朋江の名を聞いたとたん、一瞬のうちに睡魔が消えていた。
「こうしては、いられません。義母上様、義姉上様。続きはまた今度ということにさせていただきます。珍しい菓子をいただいたという話なのです。きっとお二人にも、喜んでいただけると思いますので」
「菓子か」
　甘い物が好きな希与は、早くも物欲しげな顔になる。環紀も母親と奪い合うほどの甘い物好き。
「まあ、それでは仕方ないですね」

義姉の言葉が終わらないうちに、留以は座敷を飛び出していた。
「行って参ります」
素早く玄関で草履を履き、あとはもう後ろを見ない。呼びかけられた瞬間、地獄の刻に逆戻りしかねなかった。楓川（もみじがわ）に架かる新場橋を渡ったとき、ようやく後ろを見る余裕が出た。
「あら、おのぶ。いたのですね。声を掛けるのを、忘れておりましたよ」
「脇目もふらずにまっしぐらでございましたね。ですが、まだまだ足は衰えておりません。留以様のお供は、務められますよ」
「ほんに、助かりました」
安堵して、歩調をゆるめた。このあたりは常に大勢の人が行き交っている。昔は人波がきらいだったが、野村家に嫁いだ後、変化した。あの母娘と少しでも離れたいという気持ちがあるのかもしれない。
静かな野村家と、混み合う雑踏。
相反するざわめきにふれると、肩の力がぬけるようになっていた。
「あ」
留以は前方の人波に、中川周平の姿を見た。責めるような目を、おのぶに向ける。

とたんに違うと首を振った。
「逢う段取りなど整えておりません。たまたまですよ」
「そうですか？」
半信半疑だったが、ここで言い合いをしても始まらない。留以は辞儀だけして、周平と擦れ違った。
「留以殿」
と周平が呼びかけた。
「はい」
留以は振り返る。そこにあったのは……周平の物言いたげな眼差しだった。やはり、もしや、まさかと、仕事をしたあの夜のことが甦る。
周平に見られたのではないか？
留以が仕事人であることを、知っているのではないか？
「中川様」
掠れた声で答えを促した。乾いた唇を素早く湿らせている。
「いや、そのお姿がよいと、しみじみ思うた次第。危険な場に出向くのは、過日のあれを最後にした方が宜しいのではないかと存ずる」

周平は、あたりさわりのない言葉を口にした。目付の配下らしい助言といえる。かつて恋仲だった女子と、行く先々で出逢うのは、周平の方もいやなのだろう。

「お言葉、心に刻みつけますが、わたしは『そげもの』でございますゆえ」

素直には従えませんと、なかば開き直っていた。

「さようか」

口もとをほころばせて、周平は続けた。

「河岸の芝桜が、そろそろ見頃でござる」

視線で楓川の方角を指した。花見が好きな周平は、江戸各地の見頃を知っている。目付の配下として探索がてら、密かに花見を楽しんでいるのかもしれない。

「気づきませんでした。たった今、新場橋を渡って参りましたのに」

気持ちに余裕がないことを自ら露呈したようなものだった。周平はなにも応えない。ご免とだけ告げて、離れて行った。

「気になりますね」

おのぶが言った。

「霊雲寺の騒ぎの折、近藤様もそうでしたが、御目付様の配下である中川様もまた、参拝客を寺から逃がすことに腐心しておられました。斬り合いの場に近づけぬよう

にしておられましたが」
「なにが言いたいのですか」
留以は、答えを聞きたくなかった。足早に楓川の方へ戻り始めた。留以も目付やその配下の動きには、いささか疑問をいだいている。が、御役目を遂行しただけだという思いもあった。
「お待ちください、留以様」
隣に並んだおのぶに、冷ややかな目を投げる。
「義父上たちは参拝客を守ったのです。命を優先しただけではありませんか。間違っていたとは思えません」
「ええ、確かにそうですが」
「隼太殿は無事でしょうか」
歩きながら、ふと思い出していた。我知らず、おのぶの問いかけを遮ろうとしたのかもしれない。一日に何度、隼太の顔を思い浮かべることだろう。あのとき、自分が気をつけていれば、あのとき、確かめていればと、後悔ばかり湧いてくる。
「旦那様が探してくださいますよ。お約束してくださったじゃないですか」
おのぶの慰めが虚しくひびいた。

「そうですね」

一度も声を聞くことなく別れている。隼太はどんな声で話すのだろうか。甥の真吾に似た少し高い声かもしれない。一度でいい。呼んでほしかった。

「母上」

という呼びかけに、どきりとして足を止めた。留以の傍らを、四、五歳の男児が通り過ぎる。その先で待っていた母親のもとに駆け寄って行った。

（隼太殿）

留以は、少しの間、肩越しに母子を見つめていた。追いついた我が子の手を、若い母親が握りしめる。どれほど望んでも、留以は子を授からない。せめて隼太をと思ったそれさえ叶えられなかった。

幸せな母子の姿が、人波にまぎれて見えなくなる。

「参りましょう」

おのぶに促されて、ふたたび歩き出した。忘れるしかないのだろうか。この腕に今も残る隼太のぬくもりを……。

「ああ、綺麗ですねえ」

留以は、楓川を見おろした。周平の言葉どおり、河岸に芝桜が咲いている。薄紅

色、桜色、白と、可憐な花びらを広げていた。
「どこかで隼太殿も」
見ているだろうか、いや、見ていてほしかった。
芝桜の美しさが、留以の心に沁みた。

あとがき

近頃は、どうもシリーズの間が空くようになってしまい、我ながら歯がゆい思いを味わっています。もっと体力があれば書けるんですけどね。お許しいただきたいと思います。

さて、面白い流れが出てきました。『もがりの猛蔵』の手下と思しき男、そして、新参者らしき仕事人たち。この後、どういうふうに動いていくのか、私自身も楽しみながら、留以を追っていきたいと思います。

さてさて、先日、カバーを描いていただいている山口晃さんの個展を、ちょいと覗かせていただきました。朝日新聞にも取りあげられていましたので、ご存じの方も多いのではないかと思います。銀座のメゾンエルメスの八階で催された個展でしたが、まず室内に設けられた電柱に吃驚しました。もちろん本物の電柱ではあり

ません。山口さんの作品なのです。

驚くと同時に、不思議な懐かしさを覚えました。私は下町の本所生まれです。今も生家はそこに在りますが、一瞬のうちに『昔の路地』に戻ったような感覚でした。電柱のそばで立ち話をしている母親、豆腐屋さんのラッパの音、走りまわる子供たちのざわめき、などなど、脳裏に浮かんだのは懐かしい風景でした。

信じていただけないかもしれませんが、割下水通りに出ると、隅田川の花火が見えましたもの。おじさんたちが通りに縁台を出して、花火をちらちら見つつ、ビールを飲みながら将棋や碁を打っていましたよ。昭和の懐かしい風景というやつでしょうか。

またこの割下水通りは、夏の盆踊りのときには、櫓が組まれて、盆踊り大会の場ともなりました。私の父親は小さな鉄工所の親父でしたが、この櫓をパイプで作り、組み立てる役目をいつも担っていましたね。それが楽しみのひとつだったのでしょう。盆踊りやお祭りが大好きでしたから。

それも今は遠い夢、でしょうか。立ち並んでいた町工場は、次々に消えて、割下水通りは北斎通りという、もうひとつの名を得ました。名前はとてもいいですね。江戸時代は南割下水でしたが、そのままの割下水通りよりも、北斎通りの方が粋で

洒落ています。

立ち退いた工場の跡地には、瀟洒なマンションが建ち、今は本当に綺麗な――でも、どこか味けない――通りになりました。両国から錦糸町、あるいは逆に錦糸町から両国に至る通りなのですが、スカイツリー効果でしょうかね。錦糸町も行く度に表情が変わる感じがします。昔は小さなキャバレーが軒を連ねる、どちらかと言えば風紀上は、あまり好ましくない町だったのですけれど。

錦糸町からスカイツリーに、真っ直ぐ行ける道ができるとかできないとか。もし、本当にその道ができれば、また錦糸町は変わるでしょう。その変化の速さに、ついていくのが大変です。女性が安心して歩ける町になるのは嬉しいのですが……少し複雑ですね。

今回も文中に、武家屋敷が密集した本所界隈を登場させています。このあたりが私の実家だな、などと思いつつ書くこともしばしば。時の空間を超えるあたりが、山口さんとの共通点でしょうか。

（かなり強引に結びつけた感じですが）

一巻目の留以は表の顔、二巻目の留以は裏の顔。二つの顔を描いてくださったの

かしら、なんて勝手に考えています。これを書いている時点では、まだ三巻目のカバーはできていませんが、どんな留以になるでしょうか。山口さんのカバーを楽しみにしながら、次巻に進みたいと思います。

二〇一二年六月二十三日

六道慧



光文社文庫

文庫書下ろし／長編時代小説

そげもの芸者　奥方様は仕事人

著者　六道慧

2012年7月20日　初版1刷発行

発行者　駒井稔
印刷　堀内印刷
製本　ナショナル製本

発行所　株式会社 光文社
〒112-8011　東京都文京区音羽1-16-6
電話（03）5395-8149　編集部
8113　書籍販売部
8125　業務部

© Kei Rikudō 2012

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。
ISBN978-4-334-76441-8　Printed in Japan

Ⓡ本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上の例外を除き、禁じられています。本書をコピーされる場合は、事前に日本複製権センター（http://www.jrrc.or.jp　電話03-3401-2382）の許諾を受けてください。

組版　萩原印刷

お願い　光文社文庫をお読みになって、いかがでございましたか。「読後の感想」を編集部あてに、ぜひお送りください。

このほか光文社文庫では、どんな本をお読みになりましたか。これから、どういう本をご希望ですか。

どの本も、誤植がないようつとめていますが、もしお気づきの点がございましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえいただければ幸いです。当社の規定により本来の目的以外に使用せず、大切に扱わせていただきます。

光文社文庫編集部

本書の電子化は私的使用に限り、著作権法上認められています。ただし代行業者等の第三者による電子データ化及び電子書籍化は、いかなる場合も認められておりません。

ISBN978-4-334-76441-8

C0193 ¥648E





定価（本体648円＋税）

そげもの芸者　奥方様は仕事人　六道慧

八丁堀同心の妻、野村留以は姑と小姑との折り合いに日々悩む二十一歳。だが、剣術小町と称されるほどの武芸の腕前で、両親を殺めた夜盗への復讐に燃える仕事人でもある。宿敵である猛蔵の手掛かりを得るため、留以は辰巳芸者に扮する。剣舞を舞う一風変わった「そげもの芸者」として、悪事を謀る者たちのお座敷に潜り込んだ。「奥方様は仕事人」シリーズ第三弾！